

---

# 魔術的生徒会

夙多史

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔術的生徒会

### 【NZコード】

N4731Q

### 【作者名】

夙多史

### 【あらすじ】

羽柴魁人は他人の中に謎の光が見える眼を持つている以外はどこにでもいる男子高校生だつた。彼はメイザース学園入学後に出会つた少女 神代紗耶に異常な光を見てしまつ。以降、この眼に映る光について生まれて初めて知りたいと思い始めた魁人は、自らを魔術師と名乗る学園の生徒会と接觸することになる。

## プロローグ

深夜。夜行性の人々以外は寝静まつたころの時間帯。

静寂に包まれた狭い路地裏で、三つの人影が蠢いていた。何かか  
ら隠れているように辺りを警戒し、誰もいないことを確認しても、  
人影たちはコソコソと小声で話し合っている。

「おい、本当に大丈夫なんだろうな」

「ああ、問題ねえよ。俺がいるんだ。サツと行つてパツとやつちま  
おうぜ」

「そうそう。本摩ほんまは『魔法使い』なんだから、何も心配することは  
ないわよ」

人影は三人とも高校生くらいの少年少女だった。全員が闇に溶け  
るような黒っぽい服装をし、各々が手にサングラスやヘルメットな  
どの顔が隠れる道具を持っている。まるで今からどこかに強盗しま  
すよというような格好だが、実際にその通りだつた。

「でもな、これから忍び込むところつったら、この那緑市なよりしで一番で  
けえ銀行だぜ？ 絶対セキュリティとかやべえって」

一メートル近い大柄な少年がネガティブなことを言うのに対し、  
本摩と呼ばれた金髪をツンツンに逆立てた少年がポジティブに返す。  
「大丈夫だつてんだろ。俺様の力がありやあ、絶対成功する。

ああ、間違いねえ」

「キヤハッ！ 本摩つてばかあつくいい」

サングラスを片手で弄びながら、ニット帽を被つた少女がふざけ  
たように笑う。すると、大柄な少年の顔にも自信が満ちてきた。

「あ、ああ、そうだな。たとえ警察でも、本摩が本気出しあ一発  
で消し炭だ」

と、その本摩が口元で指を立てる。

「しつ……時間だ。顔隠して乗り込むぞ」

彼の指示に一人は無言で頷き、それぞれが手にしていたもので顔

を隠し始める。

その時、背後からジャリッという音が聞こえた。

「 ッ！？」

慌てて振り返る二人。そこには、彼らと同じくらいか少し年下の少女が立っていた。

腰よりも長く伸ばしたストレートの髪は夜闇より黒く、対照的な白い肌が浮かんで見える。服装は茶系のブレザーにチェック柄のスカート。そんな深夜の路地裏には到底似合わない高校の制服を着た少女が、小さめの輪郭に収まる漆黒の大きな瞳で彼らを見据えている。

「何だよ、ビビらせやがって……」

警官かと思った本摩は少々拍子抜け気味に呟いた。

「アレットメイザース学園の制服……ウチらと同じどこのじやん」「つか、何でメイザースの奴がここにいんだよ。まさか、俺たちの話をどつからで聞いて、仲間に入れてもらいに来たってわけじゃねえよな。おい、どうなんだ？」

冗談ぽく言いながら大柄な少年が現れた少女に歩み寄り、その大きな手で彼女の肩を掴もうとするが

「ゴスツッ！」という鈍い音がした瞬間、彼は宙を飛んだ。

「がはつ！？」

背中から地面に叩きつけられ、大柄な少年は何が起こったのか理解できず、ただ頭に『？』を浮かべる。だが、後ろの二人は見ていた。二メートル近い巨漢を、あの少女は華奢な体とは思えない脚力で蹴り飛ばしたのだ。

「……何もんだ、てめえ」

黒髪の少女を睨みつけ、声のトーンを低くして問う本摩に、彼女

はただ一言で答える。

「生徒会よ」

言葉の意味が呑み込めず呆然とする三人。少女はさうに告げる。  
「とりあえず、目覚めた力を使って銀行強盗なんて馬鹿なこと考えたあんたたち三人は、あたしら生徒会で処罰させてもらうから覚悟しなさい」

途端、三人は我に返る。黒髪の少女は自分たちの仲間になりに来たのではない。止めに来た、いや、潰しに来たのだ。そんな少女を、三人は完全に『敵』と認識する。

顔も見られた。敵は排除するしかない。

「どいてろ、俺がやる」

本摩は大柄な少年を下がらせると、ゆっくりと少女に近づきながら黒いジャケットのポケットに手を入れ、そこからライターを取り出す。そして、シユボツと火をつけた。

「あー、何か知らねえが、俺らの計画知ってるみてえだからよ。まあ、その、何だ……死ね！」

最後に凄みを利かせた一声を放つと、火のついたままのライターを宙空で円を描くように振る。と、どういうわけか夜闇に描かれた軌跡は消えずに残り、オレンジ色に輝く粒子が次第に円の周りから中心部に集つていく。

次の瞬間、集つた粒子が白熱する火炎球となつて射出された。それは砲弾のような勢いでまっすぐ飛行し、避ける暇など与えず黒髪の少女に直撃する。

爆破テロのごとく赤い閃光が迸り、爆音が轟き、熱波が押し寄せ、黒煙が上がる。深夜とはいえ、大通りに近いこの場所でこれだけのことが起きたれば流石に騒ぎになるだろう。だが、あの少女に知られていた時点で今日の計画は失敗である。もう別に構わない。

火炎と爆煙のカーテンを眺めながら、本摩はもう生きてはいないだろう少女へ嘲るように言葉を投げかける。

「ハツ、一瞬で骨」と灰になりやあ、てめえがここで死んだなんて誰も気づかねえよな。力のねえ馬鹿が正義の味方気どりでしゃしゃり出てくるからこ'うな ！？」

刹那、炎の色が青く染まつた。

何かやばいものにでも引火したのだろうか？ だつたら早く離れた方がいいのか？ そんな考えが頭の中を過つたが、そうではないことを彼はすぐに思い知る。

「突然魔力が開花した人つて、みんなこんな馬鹿みたいな思考回路なのかしら？」

そんな声がした途端、炎が暴風に煽られたように一瞬で吹き飛んだ。そこには灰になつたはずの少女が、火傷一つ負つてない姿のまま立つていた。

「な、何で……」

さらに彼女の右手には、一体どこから取り出したのか一振りの日本刀が握られていた。

それがただの日本刀でないことはすぐにわかつた。なぜなら、その見事な反りの刀身に、先程の蒼い炎がオーラのように纏つっていたからだ。

> i 20446 - 2717 <

蒼炎纏いし日本刀を携えた黒髪の少女が、目の前に敵として立ちはだかっている。明確な『死』の恐怖が急激に沸き起こり、本摩は震える足で後ずさる。

「くそつ！ こいつも俺と同じか

「違うわ」

冷やかな視線を向け、黒髪の少女はきっぱりと断言する。

「魔力が開花したばかりのあんたと、この私と一緒にしないでよね

日本刀の少女が一步踏み出す。

「あたしは魔術師で、あなたは魔力もろくに制御できないただの素人なんだから」

「ま、魔術師だあ？ てめえ、意味わかんねえことほざいてんじやねえぞ！」

本摩はもう一度ライターで円を描き、彼女に向かつて火炎弾を飛ばす。さつきよりも威力と熱量を上げているが、あの敵には通用しないだらうことは本能が悟っていた。だから

「おい！ てめえら、逃げ！」

ようど振り返った本摩だが、そこで見た光景に絶句する。

自分の後ろには、一緒に銀行強盗を企てた仲間が一人いるはずだった。

だが、そこに見える人影は、一、二、三、……五人。

明らかに数がおかしい。しかも、そのうち地面に伏して苦しそうに呻いている影が二つ。自分の仲間の二人だ。

（何だよこれ……。え、嘘だろ？ おい、何でてめえら倒れてんだよ。あいつら何したんだよ。つーかコレビデオいう状況なんだよ？）

事態を把握できず混乱する本摩に、謎の人影の一人が交渉するようになつてくる。

「ねえ、本摩くん。別に痛いことはしないから、このまま大人しく捕まつてくれないかな？」

どこかおつとりとした少女の声だった。

（こいつ何で俺の名……いやそれより、この声どつかで）

その時、背後からカツカツと軽い靴音が響く。僅かに首を動かして振り向くと、案の定、黒髪日本刀の少女が無傷でそこにいた。

「月夜先輩、こいつも伸しちゃつた方が早いと思います」

「あははー、力ずくの解決は最後の手段よ、紗耶ちゃん。できるだけ穩便に済ませること。まあでも、紗耶ちゃんは今日が初仕事だし、だんだんと慣れてくればいいよ」

月夜と呼ばれた人影が諭すように言うと、黒髪の少女 紗耶は

小さく舌打ちする。本摩は『サヤ』という名前こそ知らないが、『シクヨミ』といつね字には心当たりがあった。だが、今はそんなことを考へてゐる場合ではない。

(「んなとこで捕まつてたまるかよ!」)

逃げなければ。たとえ仲間を見捨てようとも。しかし実際問題、前は三人、後ろは日本刀、左右は高いビルの壁、完全に八方塞がりである。

そうなると、壁の薄いところを突破するしかない。それは必然的に女が一人の後方。妙な日本刀を持つていようが何だろうが、そこが一番薄い、と彼は判断する。

素早く踵を返し、本摩は田本乃の少女に向かって疾走する。向こうで『あつ、逃げた!』とか何とか言っているが、当然構つてないられない。

「ジ王やあああああああああああああああつー。」

もはや撃つまでに隙のできる能力は使わず、己の拳のみを頼りに全力で駆ける。対する少女は特に慌てたりはせず、幻想的な火の子を散らす日本刀を地面と水平にして構え

「ほら、結局いうなるんじゃない」

呆れたように呟いた瞬間、刃の先端から蒼い炎が射出される。ペ  
ンを走らせるよつに夜闇に線を描いていく炎は、蛇のように本摩に  
絡みつくと、一気に彼の体を炎上させた。

「ぐ、ぐわあああああああああああああああああああああああつー?」

断末魔を思わせる絶叫が路地裏に響き渡り、炎が消えると、本摩は体中からプスプスと煙を上げながら倒れ伏した。それでも加減されていたのか、彼は意識を失つてはいない。向こうで『ああ！ やり過ぎてる！？』とか言つてゐる声も聞こえる。

「やつれいひたじやない」

振り絞るようにして出した一度目の質問に、少女は地に伏す本摩を見下しながら言う。

「生徒会、そして魔術師よ」

## プロローグ（後書き）

イラストは雨波さんによ頼したもののです。

## 一章 メイザース学園生徒会（1）

四月十一日。

県下でも大きな都市である那縁市。その中心部に広大な敷地面積を持つ私立メイザース学園は、朝八時という時間帯なだけに登校のピークを迎えていた。

空は快晴。穏やかな春の陽光が気持ちよい温かさを提供し、賑やかに登校してくる学生たちを差別なく包み込んでいる。

（またか……）

そんな中、西洋風の城門みたいな校門を抜けたところで羽柴魁人はしばかいとは眉を顰めた。

自然なままの黒髪に、どちらかと言えば整っている鋭い輪郭の顔立ち。まだ入学して三日目ということもあって、学園の制服は乱さずきちんと着ている。

決して優等生に見えるわけでもないが、不良というわけでもない。そんなどこにでもいるようなごく平凡な高校一年生である。だが一つだけ、魁人には他人と違うところがあった。

（また、見える）

それは、常人には見えないものが見えること。といつても、魁人は超能力者でもなければ靈能力者でもない。千里眼などないし、幽霊なんてものも見たことないから靈感はたぶんないのだと思う。

魁人の瞳に映るもの、それは 光。

曇りのない透明な輝きが、人の体の中に見えるのだ。人体そのものが透けて内蔵や血管まで見えてしまうという透視的なものではなくて、胸の辺りに輝きのみが透けて映り、心臓が鼓動するように僅かに明滅しているのもわかる。

ほとんどが消えかけの豆電球のように小さく儚げで、まるで人の魂でも見ているような感じもするが、輝きが見えない人もいるのそういう類のものではないだろう。

(本当に、あれって何なんだ)

氣味が悪い、とは思うも、それだけだ。吐き気がするほどグロくはないし、寧ろ綺麗だとさえ思つ。それに、あの輝きを見るのは初めてではないのだ。

物心ついた時から時々見えることがあって、まあつまりは慣れてしまつていた。感覚的には、道路を走っている車の中に外国の高級車が混じっている感じである。

確かに幼稚園の頃だったか、このことを親に話したら不氣味に思われたことがある。あの光が自分にしか見えないものだと知ったのは、その時からだ。

そして、成長するに連れて見ることも少なくなつた。だが、それは見えなくなつたというより、自分の意志で見る見ないをコントロールできるようになつただけだった。

(ていうか )

今も、『見る』と意識している。それは時々やつてしまつ悪い癖だが、今の場合はしつかりとした自分の意志の下で見ている。もつとも、見えたところで他人はおろか自分の役にすら立たないし、『見える人』なんて月に一度出会えるか出会えないかなのだが(何で、こんなに見えるやつが多いんだよ)

どうも、この学園はおかしい。意識を研ぎ澄ませば、周囲にいる人々の約半数はその『見える人』なのだ。学園ではなく自分がおかしいのかもしれないと思うも、こんなことは初めてだ。

この学園に入学してから三日、何度も確認してみたが結果は変わらない。このことを誰かに相談したい気持ちはあるが、(こんなのに信じてもらえるわけないよなあ。寧ろ不気味がられて避けられるのがオチだし)

知っているのは、両親だけなのだ。

とその時、パン！ という景気のよい音が後ろから響いた。

「いぎつ！？」

音とほぼ同時に痺れるような激痛が背中に走り、魁人は顔を引き

撃らせて小さな悲鳴を上げる。一瞬のタイムロスを経て、自分が誰かの平手をくらつたのだと気づいた。

「よつ、魁人！ どうしたよ、辛氣臭そうな変な顔して」

そんな軽い声に魁人は少々涙目になりながら振り向くと、そこには自分より十センチは背の高い少年が声に似合ひ軽薄な笑みを浮かべて立っていた。スリムな長身に思いつ切り着崩したブレザーを纏い、耳にはピアス、髪は茶髪。割と自由度の高い学校だからそれで何を言わることもないだろうが、遠目で見ると不良と間違われても仕方ない格好だ。

「梶川、お前いきなり何しやがんだ。今のかなり痛かつたぞ」

彼は梶川邦明。魁人の中学時代からの親友兼クラスメイトで、現在この学園で唯一の親しい存在である。

「あり？ おかしいなあ、加減ミスったかな？ まあ、オレの魁人君なら対戦車用口ケットランチャーぶつ放したところで傷一つつかないと思うが」

「死ぬ！ 絶対死ぬ！ 勝手に人を未来から来たアンドロイドみたいにしてんじやねえよ！ ナイフ一本で普通にあの世に逝けるって。あとさりげなく『オレの』とかつけるな気持ち悪い」

「はは、ジョーカージョーカー」

何の悪気もなく笑つてみせる梶川を、魁人は怨念を込めまくった視線で睨めつける。

「お前、今度から背後には気をつけろよ。簡単には消えないモミジ作つてやる」

「おつと、そいつは大変だ。次から新聞紙を五層ほど巻いてこねえとな」

とまあ、梶川とは昔からこういうノリの関係だ。地元からけつこう遠いところにある学園なだけに他の知り合いはない。正直、彼の存在は心強いことこの上なかった。

ふと思つて梶川を『見る』が、例の輝きが見えたりすることはなかつた。これはいつも通り。

とりあえずそこは安堵し、そのまま一人で適当な会話をしながら一年の昇降口へと向かう。途中、梶川が思い出したように言つてきた。

「そうだ魁人、今日は何の日か覚えてるか？」

「お前の誕生日は三ヶ月先だろ」

「いやいや違うって。今日はアレだ、健康診断」

「……それがどうした？　あー、もしかして尿検査のアレを忘れちゃった同盟でも作るつもりか？　だったら残念、俺は忘れてないからその同盟には入れないぜ」

自分たち新入生のプランは、一日目は入学式、二日目に対面式やクラブ説明会などがあり、今日は健康診断とHRのみで午前中に終了、次日の日から早速授業といった具合になっている。

「どうやらまた違つたらしく、梶川は大げさに頭を搔き鬯つた。

「だあーっ！　これだから魁人君はあー！　いいが、健康診断とは体操着で行うものだ。つまりうちの高レベルな女子たちの体操着姿を初見できる日なのだよ。健全なる男子高校生たるもの、テンション上げずにはいられるかーっ！！　ってあれ？　何故引いてんのかな魁人君？」

「寄るな変態！　同類と思われる」

こいつがこうこう奴なのは知つてゐるが、他の生徒たちがいる中でここまで高々に声を上げられたら、内容が内容だけに友としての縁を切ることを真剣に考えた方がいいかもしれない。

「何を言うか同士。君もそつち方向の理由でわざわざこの学園を選んだんじゃないのか！？」

「同士言つな！　つーか違う！」

確かにこここの女子のレベルは高いと聞いていた。この学園を知ったのはこいつが誘つてきたからだが、自分はこの馬鹿と大いに違つて普通な理由でこのメイザース学園を母校にすると決めたのだ。そう、普通の理由だ。そんな不純なものじやなくて、もつと普通の、普通の

(……あれ？俺がここ選んだ理由って何だつたっけ？)

実家を離れ、アパートを借りて一人暮らししてまでこの学園を選んだ理由……思い出せない。親友に誘われたから……ってわけでもない。面接の時は何を言つただろう？いや、面接は嘘八百を並べただけだつた気がする。

(まあいいか、どうだつて)

忘れたつてことは、それだけ適當だつたつてことだ。県内でも有名な進学校だし、自由度は高いし、一人暮らしにも憧れていた。それらが大きいところを占めていることは間違いない。

そういう考えでいるうちに昇降口に辿り着き、魁人は手早く上履きに履き替える。

「とにかくだ」梶川はテンション高くバツと両腕を広げ、「オレは宣言しよう。一年、否、一ヶ月以内には彼女を作る！」

「変態に寄つてくる物好きがいることを切に願つ」といてやるよ」

「酷つ！？」でもオレは負けない。既に目ぼしい一年女子の簡単なデータは収集済みなのだ

「仕事速つ！？」

わつはつは、と何か高らかに笑う梶川に真っ白い視線を投げつける魁人。その行動力をもつと別のところで活用したらいいのに、と思うが言つても無駄なので口には出さない。

梶川はブレザーのポケットから手帳らしきものを取り出して開く。何か『美少女手帳』とか意味不明なことが書いてあるが、気にしたら負けだ。間違いない。

「一組の堀町真苗、オレらと同じ三組の鈴瀬明穂、五組の月岡愛梨、八組の朝風祥子などなど。フフフ、オレ好みの女の子盛りだくさんだぜ。しかし

はつきり言つて魁人には梶川が並び連ねた女子の顔は誰一人として思い浮かばない。同じクラスでもそうなのだから、他のクラスなど知つたことではない。

「オレ的には、一番はやっぱ神代紗耶だな。彼女こそ頂点にしてキ

ング！あ、この場合はクイーンかな？まあとにかくぐだ。メイザ

ース学園にミスコンがあれば絶対に投票するね

「……あのな、お前の自己満足で喋ってるのならいいけどよ、俺には誰だかさっぱりわかんないんですけど。気に入つたんなら勝手に告つて玉碎してこい」

「玉碎は決定事項！？ オレ結構いい男よ？」

「どこがだよ」

顔はよくても中の上と言つたところだ、性格はコレだ。いい奴だということは否定しないが、いい男かどうかは謎である。もつとも、こういうお調子者は大抵クラスの中心人物になるから、面白がられても嫌われることはないだろ？ 中学の時はそうだった。

「つーか魁人、お前はもつちょっと周りを見ろよ。同じクラスなんだぜ、神代紗耶」

「赤の他人なんて俺にとってはただの背景なんだよ。そいつを観察する趣味はない」

あまり觀察が過ぎると、余計なものまで見えてしまうかもしねないのだ。

「何か、お前には出会いが少なさそうだなあ。 ん？ お、噂をすれば」

梶川は敬礼でもするかのように手刀の形にした手を額にあて、口元に嫌らし笑みを浮かべながらこちらへと歩いてくる女子生徒を眺める。

そんな彼に呆れ顔の魁人も、釣られたようにその女子生徒を見た。

心臓が大きく跳ねた。

彼女はまさしく美少女だつた。白磁のような白い肌に、対照的なストレートの黒髪と漆黒の大きな瞳。歩き方はどこか凜としていて、どこぞのお嬢様といった雰囲気を醸し出している。背丈は高校生にしては若干低めだが、プロポーションはよく、梶川が一番と言つた

のには得心がいった。

だが、魁人の心臓が強く鼓動しているのはそんなことではなかつた。

例の透明な輝きが、彼女にも見えたのだ。それも、なぜか自分の意志とは関係なく自然に見えてしまつていた。その輝きは、他の誰よりも、今まで見た誰よりも大きく力強い光を放つてゐる。さらに、違うのはそれだけではない。

形。そう、彼女に見えている輝きの形状は遠くから見た電球の光のようなものではなく、あれはどう見ても

（炎、だよな）

強く、しかし淡い月光のような輝きを放つ、子供の握り拳を一回り大きくしたくらいの透明な炎。それが、彼女の中に見える光だった。

だがこの時、魁人は気づいていなかつた。彼女の強い輝きを映す自分の瞳が、その光を反射する澄んだ青色に染まつてゐることを……。

と、その輝きが唐突に消えた。

「え？ 何で……」

突然の事態に驚き、思わず声を出す魁人。すると、上履きに履き替えた神代紗耶が魁人の目の前で立ち止まつた。

「？」

不機嫌そうな顔で見上げてくる彼女に、魁人はさらに困惑していく。

（な、何で俺を見てんだよ……まさか！ こいつは俺があの光を見えることに）

気づいたんじゃ、と意外なことを思ったのと同時に、突き刺すような視線を魁人に向けていた彼女が口を開く。あからさまに不機嫌な声で、一言。

「そこ邪魔なんだけど」

「え？ ……あつ、ごめん」

一瞬わけのわからなかつた魁人は、自分が彼女の進路を塞いでいることに気づくと即座に謝つて脇に退いた。フン、と鼻から息を吐き、彼女はそのまま一瞥もせずに去つていった。

艶やかな黒髪の揺れる後ろ姿が階段の角に消えると、興奮を抑えていた梶川が爆発する。

「見ただろ魁人！ あんな可愛い子中学の時にやいなかつたって！ オレ様の属性判断眼鏡によると、彼女は絶対にTUNDERE系だ。嗚呼、ああいう娘に『か、勘違いしないでよね、別にあなたのためにしたんじゃないんだからね』とかつて言わせてみたいい！」

「……」

横で何かいろいろとほざいている馬鹿の言葉は耳にも入らず、魁人は彼女が消えた階段の方を呆然と見詰めていた。

## 一章 メイザース学園生徒会（2）

メイザース学園は併設型の中高一貫校である。

都市のど真ん中にあるにも関わらず、その敷地面積は東京ドームが二つほど入ってしまうほど広いらしい。何でも、昔ここには孤立した山があつて、そこを切り開いて建てたとか何とか。まあ、五十年以上は前の話だ。

その広さをうまく活かしているのかは知らないが、中等部と高等部の間には、常緑樹や桜の生い茂る公園が境界線のように存在している。学園緑化にしてはやり過ぎな気もしないでもないが、そこは生徒や教師にとつての憩いの場としてきちんと機能している。

そんなメイザース学園の高等部一年は現在、健康診断の最中だった。

保険室で内科検診を受け、視聴覚室で視力、音楽室で聴力、第一体育館で身体計測と、広い学園内をひたすら歩かされたため、ある意味では校舎案内も兼ねているように思えた。

「ハ、ハハハ……。な、なぜだ、なぜなんどうわああああああああああああああああつ！？」

その健康診断の途中、梶川が突然ムンクの叫びよろしく絶望的な表情で喚き出した。廊下内に響いた彼の声に、周りの生徒たちが何事かと視線を向けてくる。が、すぐに興味が失せたのか関わらない方がいいと思つたのか、誰もが各自の行動へと戻っていく。

「見渡すかぎり男男女、そして男！ なぜ、なぜだ！？ オレの天使たちの体操着姿は何処に！？」

まあ、それが原因だった。周囲を見回したところ、女子など一人もいない。

「男女別行動なんだから当たり前だろ」

冷めた口調で魁人は現実を伝えてやつた。内緒な話、まったく興味がなかつたわけではないが、横のコレに比べればショックなど受

けていないに等しい。

「オレはまだいつあるのかわからない体育の時間まで待たねばならないのか。……なあ魁人 この事態はどう対処すればいいと思う?」「とりあえずお前が一度転生することをオススメする」

「ぐつ、相変わらず厳しいお言葉。オレ様超ショック」

とか言っているが、こんな程度でダメージを受ける梶川ではないことは知っている。

現在、自分たちは第一校舎 職員棟の三階にいる。そこには屋上に出る扉がある他に、『生徒会室』と表記された部屋が一つあるだけで寂れた感じが否めない。一箇所しかない真新しい引き戸の横にはホワイトボードの掲示板があり、近々ある創立者際などの学校行事やら何やらが事細かに書き込まれていた（こんなところまで見に来る生徒がいるかどうかは謎だ）。

この生徒会室で、自分たち一年二組男子は一人ずつ適当な順番で血圧検査を行っていた。

「なあ、学校の健康診断って血圧測るもんなのか？ 貧血検査ならわかるけど」

魁人は素朴な疑問を親友に投げかける。

「ん？ さあ、コーコーセーは普通なんじゃないの。それよりも魁人、オレが生徒会長になつて女子の制服をメイド服に変えるつていう作戦をたつた今思ついたんだが、どう?..」

「全女子の恨みを買うだろうな」

というか、まず梶川が生徒会長になつたところを魁人には想像できなかつた。当の本人は自分が会長になつた時の叶わぬ夢をブツブツと声にして妄想し始めているが……。

魁人は思わず溜息をついた。そして窓の外を意味もなく眺める。この親友の戯言に付き合つことよりも、今は考えたいことがあつた。

神代紗耶。

異形の、そして強い輝きを宿す彼女のことを、魁人はずっと気にかけていた。

教室にいる時も何度彼女の方を見たことか。人体の中に存在する謎の透明な輝き。ちゃんと『見る』と意識すれば見れたが、あの時のように意識せず自然と見えてしまうことはなかつた。

それに、どういうわけか少しだけ輝きが弱くなり、形も炎からただの光球になつていた。

あれは錯覚だつたのだろうか？

いや、それにしてははつきりし過ぎていた気がする。

ならば偶然？

わからないことばかりだ。あの輝きについても、それが見えてしまう自分の眼についても。

(知りたい)

知りたい。知りたい。知りたい。

初めて、こんなに強く思えた。自分の異常な眼についての不安や恐怖はもちろんあるが、ただの純粋な好奇心も少なからずある。(神代紗耶。明らかに他とは違う彼女なら、何か知ってるかもしない。つていっても、たぶん無駄なんだろうな)

過度な期待は抱かない。が、希望も捨て切れない。

そんなことを考えていると、いつの間にか順番が回つてきていた梶川が検査を終えて出てきた。と、彼の様子がおかしいことに魁人は気づく。

「か、かかかか、かいと……お、オレは、オレはああああああ！」妙な興奮状態の親友が何かを語りかけるように肩を掴んでくる。その猛烈な勢いにやや気押されながらも、魁人はからかうように問うた。

「何だよ、この中に火星人でもいたのか？」

「オレは幸せだー！ ブフッ……も、もうどうなつてもいいぜえー！」

だが、梶川は魁人の問いに答えないまま、途中で鼻血を噴きつつ全力で走り去つてしまつた。魁人はもちろん、他のクラスメイトたちも走つていく梶川を啞然として見ていくことしかできなかつた。

「何だつてんだ？まあ、たぶん気にしたら負けなんだろうけど」意味不明な親友を怪訝に思いながらも、順番なので生徒会室のドアを開けて いちいち閉める必要性を感じない 中に入った。

中は 意外と広かつた。無駄に教室一個分ほどのスペースがあり、壁二面を覆い尽くすほどの中棚にはきちんと整理整頓された本や資料などがぎっしりと詰まっている。その棚の間に扉が見えたが、曇りガラスに『シャワー室故障中』という貼り紙が貼られているのは突つ込んだらダメなのかもしれない。

エアコンも完備されていて、部屋の中央には長机とパイプ椅子が置かれている。その長机の上には、血圧計と思われる圧迫帯つきの機材が乗っていた。

そして、机の向こう側には一人の女子生徒がいた。

「はーい、じゃあ診断表を彼女に渡してそこに座つてください」にこやかなスマイルでそう促してきたのは、対面するパイプ椅子に座っている少女だった。背中の真ん中辺りまで伸ばした緩いウェーブのかかった髪に、どこかおつとりしているも整った顔つき。ブレザーの上からでもわかるゆさつとした豊満な胸は、正直目のやり場に困りそうだ。

もう一人は、長い髪を青いリボンでポニーtailにしているのが特徴的な少女で、クールと言うべきか、ウェーブの少女とは対照的に感情の読めない表情で秘書のように直立している。

どちらもかなりの美少女だった。彼女たちが直に血圧計のカフを巻いてくれるのだとしたら、なるほど、梶川が壊れるわけである。この部屋にいるってことは、一人とも生徒会役員なのだろうか。そういえば、あのウェーブの人人が入学式の時にあいさつしていたような記憶がある。

ただ、この部屋には彼女たちしかいない。健康診断の手伝いをしているのならば、教師か医師か看護師がいてもよさそうなのに……。そこが気がかりと言えばそうだが、そんな疑問はすぐに吹き飛ぶ

ことになる。

言われた通り診断表をポニー・テールの少女に渡し、何か面接みたいだなと思いながらパイプ椅子に腰かけた瞬間、魁人は見た。見えてしまった。

「　！？」

血圧計のカフを手にしたウェーブの少女に、あの透明な光が宿つたのだ。さらに球状だったそれが、突然形を変えてまるで炎のようにな燃え始めた。

「これを手首に巻きますから、左手を机の上に出してください」  
しかも、見えるのは彼女だけではなかつた。彼女の手にしているカフ、それと繋がつてゐる血圧計にもあの謎の輝きが見えていた。それは光球でもなければ炎の形もしていない。まるで回路のように細く全体に張り巡らされ、血管を流れる血液のように絶えず流動している。

（な、何だ、何なんだよ、これは……？）

流石に氣味が悪くなり、冷や汗が頬を伝う。

そんな魁人の様子を訝しんでか、ウェーブの少女が首を傾げる。

「？　どうかしましたか？　手を出してくれないとカフを巻けないのですが……」

「あ、はい、えーと……」

とは言われても謎の輝きは現在進行形で見えているわけで、はつきり言うと出したくない。あんな不得体の知れない物を巻かれるなんてごめんだ。でも、そうしないと不審に思われる。あの輝きが見えているのは自分だけなのだから。と

「へえ～、君、もしかしてわかるんだ」

感心したような声がかけられた。弾かれたように血圧計からウェーブの少女に顔を向けると、彼女にこやかだった笑顔がどこか不敵な雰囲気に変わっていた。

「……は、はい？」

「わかるの？ わかるんだよね。わかるんでしょ！」

興奮した様子で彼女は身を乗り出して変な三段活用を使ってくる。ゆさゆさと胸が揺れ、息がかかりそうなほど近くに迫った彼女の顔は、プレゼントを貰つた子供のようにキラキラと輝いていた。

「わ、わかるつて……何が、ですか？」

美人に迫られてどきまぎする魁人に、彼女はさらりと言つてくる。

「君、何かを見たり感じたり、変な力を使えたりするでしょ？」

「！？ 何でそれを」

「あはっ！ やっぱりやっぱりー ビンゴだよ、葵ちゃん」

身を乗り出したまま彼女は後ろの少女を嬉しそうな顔をして振り向く。だが、葵と呼ばれたポニーテールの少女は何も言わず、ただ無感情な視線でまっすぐ見詰め返すだけだった。

すると、ウエーブの少女はハツとして乗り出した身を引いた。自分のした行動が恥ずかしかったのか、その頬は僅かに朱に染まっている。

「あ、あははー、『めんね。私としたことが、つい取り乱しちゃつた』

てへ、と可愛らしく笑つてみせる彼女に、ポニーテールの少女葵が初めて口を開く。

「興奮しそぎ」

抑揚のない、しかしどこか呆れを含んでいる口調でぼそりと一言。そんな表情も特に変化していない彼女に、ウエーブの少女はムッとして言い返す。

「葵ちゃんは落ち着き過ぎだよ。ほらほら、笑顔作つて笑顔。こういつ時は営業スマイルだよ。それにもつと笑つた方が男の子にもてるわよ？」

「別にもてなくていい」

「むー、葵ちゃんが笑うのつてリクちゃんといふ時くらいじゃない。

今度人を強制的に笑顔にする術式でも開発しようかな？」

「時間と魔力の無駄遣い」

「あのう、俺のこと忘れてません?」

問いを無視された上に蚊帳の外にされかけていた魁人が恐る恐る発言する。

「ていうか、『ジユツシキ』とか『マリヨク』つて……何?」

彼女たちの会話の中に聞こえた妙な単語。聞き流してもよかつたが、なぜか頭にこびりついて離れない。

「あ、そうだった、『めん』『めん』ウエーブの少女は二口二口とした笑顔に戻り、「君、普通の子みたいだからきなり言われても意味わかんないよね。えーと、ここは自己紹介からかな」

そこで一呼吸置いてから、彼女は別に訊いてもいらないのに勝手に自己紹介を始めた。

「私は三年生で高等部生徒会長の月夜詩奈。<sup>つくよみしづな</sup>『月夜』つて書いて『ツクヨミ』、叙事詩の『詩』に奈良県の『奈』で『シイナ』つて読むの。よろしくね」

「藤林葵。<sup>ふじばやしあおい</sup>一年生。会計。……よろしく」

やはり抑揚のない声で葵も月夜の後に続いた。

「いや自己紹介なんてどうでもいいし! それよりも俺のことわかるんですか!? 僕、何か光が見え……」

そこまで言いかけて、魁人は言葉を止めた。冷静に考えれば、知りたいと強く思った直後に手掛けりが飛び込んでくるなど都合が過ぎる。さつきは多少なり氣が動転していたから、聞き間違いだという可能性もあるだろう。

だが、月夜はうんうんと嬉しそうに頷いて、聞き間違いではなかったことを告げる。

「わかるわけじゃないけど、君が変な力を持つてるって言うのなら、私たちはそれを否定したりはしないよ。君自身は力の正体を知らないみたいだから、寧ろわかるのはこれからかな。というわけで、ちよつと訊くけど」

月夜は両肘を机の上に置いて手を組み、ふややんとした表情を少

しだけ引き締めて、囁つ。

「君は、魔術つて信じる?」

## 一章 メイザース学園生徒会（3）

「君は、魔術って信じる？」

「……はあ？」

突拍子な言葉を頭がちゃんと受け取るのに数秒かかった。  
(マジユツ? マジユツつて……魔術?)

「本来そこには存在しないもの、世界の法則、それらを自分の意思でねじ曲げ、書き換え、具現化させる。才ある者にだけ許された、奇跡や不思議を引き起こす力。それが魔術」

無表情の葵が機械のように無感情な声で魔術の定義らしきものを口にする。

「……。あー、新手のギャグか何かですか？」

「ギャグじゃないよう。次いでに言うとマンガとかゲームの話でもないし、私たちの頭がおかしいわけでもない。ちゃんと現実の話として、君は魔術を信じるかな?」

表情や口調はどこか抜けている雰囲気があるものの、月夜の目は真剣そのものだった。

「そ、そりゃあ、あつたら凄いだろうけど。でも、信じるかと言われたらその、俺は占いだって信じない方だし……」

田を反らして答える魁人に、月夜は目の真剣さを解いて、あははー、と笑う。

「やっぱり魔術師でもない人にこういふ言えば、そんな反応するのは当然のことだよね」

「ま、魔術師つて、あんたたちは一体何なんだよ」

もはや先輩への敬意など欠片もない口調。その『先輩』一人は特に魁人の口調を気にした様子はなく、

「何つて、今自分で言つたじやない」

当然のことでも語るかのようになり、生徒会長・月夜詩奈は淡々と言

葉を紡ぐ。

「魔術師。そして、このメイザース学園の生徒会だよ」

短い沈黙。その後、魁人は顔を引き攣らせて無理やりおかしそうに笑った。

「ハ、ハハハ、魔術師って、そんなの信じられるわけないじゃないか。本当にそうだとしても、何で魔術師が生徒会なんかやつてるんだよ。魔法学校じゃあるまいし」

「あははー、そこにはいろいろと事情があるんだよ。でも、そこの説明より先に私たちが魔術師ってことを信じてもらいたいかな。

だから、ちょっと乱暴なことするけど、我慢してね」

魁人とは違い本当におかしそうに笑っていた月夜の表情が再び真剣なものに変化する。彼女はポケットから小さなケースを取り出すと、その中から新品の白チョークを一本抜き出した。

> i 2 0 8 8 2 — 1 7 3 6 <

「……ツ！？」

その時、魁人は見た。月夜の中に、いつの間にか消えていたはずの透明な輝きがまたも出現し、それが先程以上に激しい炎となつて燃え出したのだ。

「白は光。深き闇を祓う清純なる輝き」

月夜が小声で唱えるように呟くと、親指と人差し指で挟んだチョークの周りにも、同じ透明な輝きがオーラのように纏つたのが見えた。刹那、そのチョークはパキリと音を立てて粉々に碎ける。

砕けたチョークは不自然に霧散し、白い粉と化したそれが魁人の周囲の床に散らばったかと思うと、それはまるで意思を持っているかのように蠢き、それぞれが集まって床に奇妙な文字を描いていく。魁人を囲むようにして描かれた文字群はまさに魔法陣のようで、そ

の文字の一つ一つが透明な輝き ではなく、汚れのない純白の光を放つている。

それは魁人にしか見えない輝きではない。魁人以外の、普通の人にも見える現実の光だった。

「我が言の葉を持つて、雄々しき獣を捕える純白の枷と為せ

」

「ちょ……」

呪文のような言葉を口にする月夜に本能的な身の危険を感じ、魁人は椅子を倒して立ち上がる。だが次の瞬間、輝きが強さを増し、陣の中心にいた魁人は自分の体に異常を感じた。

（なつ、何だ……か、体が、動かない……）

足は強力な接着剤で床に固定されたように持ち上がりわず、腕も思うように動かせない。痛みはない。息苦しくもない。ただ、動けず、倒れることも許されない。

だがよく見ると、細い糸のようないものが自分の体に絡みついているのがわかる。それは陣と同じ白い光でできているようだった。

「何だよ……これ……」

「『ルーン』ってわかるかな?」

月夜は動けない魁人を見て二コリと笑う。

「『神秘』や『秘儀』などを意味する一十四の音素文字のことだよ。一つ一つの文字を何かに刻むだけでも意味があつて、文字を組み合わせることでいろいろな効果を期待できちゃうの。あつ、今君に使つたのは 封滅の檻グレイブ・ゲル。『停滞』のルーンを中心とした私のアレンジ術なの」

「じゃあ、本当に……」

これは、魔術。

信じられない。でも、これでは認めるしかない。百聞は一見にしかずというか、実際に体験してしまっては、頭で否定したくても体がそれを許さない。

「本当に……魔術師、なのか」

だったら、凄い。

自分の常識の遙か彼方、マンガやゲームの世界にのみ存在していた者が今、目の前にいる。炎を出したわけじゃない。雷雲を呼んだわけじゃない。それでも、この陣や光の糸は『魔術』としか言いようがなかつた。ゲームの中にも補助系の魔法とかあるし。

「うんうん、信じてくれたみたいね って、あれ？」

と、何かに気づいたように月夜は立ち上がつた。そのまま魁人側に回ると、未だ動けない魁人に對してキスでもするように顔を近づけてきた。さつきほど近いわけではなかつたが、それでも心臓の運動が急加速する。

「あの、ちょっと」

戸惑う魁人の目をじっと見詰めたまま、月夜は呟く。

「……青い」

「何？」

月夜の呟きに今までずつと表情も変えずに成り行きを見守つていた葵が反応する。どうやら名前を呼ばれたと思つたらしい。

「あ、違うわよ。葵ちゃんのことじゃなくて、この子の瞳が青いつて言つたの。さつきまで普通だったのに。私が魔術を使つたからかな？」

「詩奈のせい」

「そ、そんなんじゃないわよ。 封滅の檻 にそんな副作用なんてないもの。これはたぶん……『魔眼』だと思う」

また呆然としている間に蚊帳の外にされかけていた魁人だが、今 の月夜の言葉でハッとする。

「ちょっと待て、俺の眼が青くて魔眼？ それってどういうことだよー ていうか俺はいつまでこうしてりやいいんだー？」

「あっ、そうだね」

月夜が指を鳴らした瞬間、絡みついていた糸や陣の輝きがフツと消え、ルーンが風に煽られたようにサッと崩れてチョークの粉ごと消滅する。束縛していたものがなくなつたため体が動くようになり、

魁人は何とも言えない開放感に包まれる。だがそれも一瞬のこと。  
魁人は問い合わせるように眼前の月夜に訊ねかける。

「それで、俺の目が魔眼つてのはどういう

「すみませーん。まだ終わんないんスかあー？」

魁人が言いかけたその時、部屋の外から誰かがそう言つてきた。  
すっかり忘れていたが、今は血圧検査（？）の真っ最中だったのだ。

あははー、と月夜が苦笑する。

「ちょっと長くなり過ぎたみたいね。

葵ちゃん、『血圧計の調子が悪いからもう少し待つてください』って言つてきてくれない？」

「わかった」

葵は頷いて外で順番を待つている生徒たちの下へ向かう。その後、  
向こうから『わかりました』と声が聞こえた。今ここで起こったこ  
とに気づいてないようだ。

（待てよ、何で誰も気づいてないんだ？　けつこいつ騒いだと思つた  
のに）

「『』の部屋には『結界』を張つてるの。だから、中で起こったこと  
は外からではわからなくなってるの」

魁人の疑問を読み取つたように月夜は言い、残念そうに小さく息を  
ついてから告げる。

「お話はここまでね。よかつたら放課後、またここに来ててくれる?  
そしたらいろいろと教えてあげられるから。わかる範囲だけど、  
君の眼のこと、それに私たち生徒会のこと、あと

魁人は息を呑む。

「『』のマイザース学園の秘密、とかもね」

## 一章 メイザース学園生徒会（4）

高等部第一校舎

一・二年教室棟。

隣接する職員棟よりも大きく、一階分高いその屋上に神代紗耶はいた。彼女の長く艶やかな黒髪が、屋上風に弄ばれているように踊っている。

彼女は落下防止用の柵に手をかけ、眼下、この位置から丁度見える生徒会室の方を見下ろしていた。

特に何かを考えているわけではない。ただ、学園の中核の一つである生徒会室が上から見下せるということに、自分も所属しているだけあって少し複雑な気分だった。と

「そんなところでそんな風にしていると、まるで飛び降り自殺前みたいだねえ」

落ち着いた響きの軽口が、背後からかけられた。

紗耶は特に慌てたりせず振り返り、少しだけ首を動かして声がした階段室の上を見上げる。そこに一人の男子生徒が悠然と腰かけていた。

「やあ」

背が高く、着崩したブレザーを纏い、眉目秀麗といつ言葉を具現化したような顔に爽やかな笑みを浮かべる彼は、街中で友達に会つた時みたいに気軽に手なんか振つてみせる。それだけだとただの好青年にしか見えないが、彼の頭髪はもれなく銀色に染まっていた。頭髪に関して特に指定のない学園だが、あんな髪の色をしているのは彼だけだろう。故に、紗耶は一瞬とかからず彼を認識した。

「何だ、あんたか」

つまらなそうに咳いた紗耶に、よつ、と彼は勢いよく飛び降りて歩み寄る。そしてやれやれと肩を竦めながら、軽薄な口調で言つてくる。

「先輩に向かつて『あんた』はないだろ？。僕は一応一年生なんだから。そうだなあ……『銀先輩』って呼んでくれると嬉しいな。

あー、いや待つて、昔馴染みなんだから今まで通り『銀英』って呼び捨てにされるのもそれはそれで捨て難い……」

「何言つてんのよ、馬鹿？ それより、生徒会副会長のあんたが何でこんなところで油売つてんのよ？」

彼は御門銀英。紗耶と同じく、メイザース学園高等部生徒会に所属している『魔術師』である。だからあの銀髪には魔術的意味があるわけではない。自分の名前に『銀』があるからというしょもない理由で染めているだけだ。仮にも生徒の見本たる生徒会なのに、それでいいのか疑問である。

そんな彼は紗耶の問い合わせるような視線にも全く臆せず、からかうような口調で答える。

「いやあ、『んな誰もいな』とこで油なんか売つても商売上がつたりですよ」「……、殴つていい？」

「『めん、痛そだからやめて」

拳を握った紗耶に即行で謝る銀英。しかしその表情は何の危機感も抱いておらず、爽やかだがどこか軽薄な笑みを浮かべているままである。そんな彼に真っ白な視線を向けながら、紗耶はもう一度訊ねる。

「で、結局あんたは何してるわけ？」

「生徒会室でやつてゐる会長たちの仕事を、ここで高みの見物しているので」

今度は茶化したりはせず、銀英は泰然と答えた。

「仕事？ ……ああ、あの血圧検査つて偽つた適性検査のこと。私はバスだつたからどうやってるのか知らないけど」

「はは、そりゃまあ、神代家の宝刀・蒼炎龍牙を受け継ぎし姫様に

は必要ないことだからねえ。

あれはね、血圧計型の魔道具で魔

力の素養を測つてゐるのさ。僕ら魔術師レベルの魔力を持つてゐる人間なら、一発でわかるんだ」

ふうーん、とだけ相槌を打つて、紗耶はもう一度斜め下の生徒会室に目を向ける。何やらドタバタしているみたいだが、ここからでは具体的なことはわからない。

「ん？」同じように眺めた銀英は物珍しそうに細い目を見開き、「誰か適性者がいたみたいだね。今年は紗耶だけかと思つてたけど、こりや意外だ」

「どうせ素人でしょ。ていうか銀英、あんた月夜先輩たちを手伝わなくていいの？」

腕を組んだ紗耶がジト目で問つと、銀英は頭を掻いて、気障っぽく笑つた。

「だつて面倒だし」

「このサボリ魔！」

全力で突つ込んだ紗耶だが、銀英は飄々とした態度を改めない。「紗耶こそ、どうしてここに来たんだい？　一年は健康診断を行つているはずだけど？」

「もう全部終わつたわよ。あたしは下見。今日の放課後、ここで戦るかもしれないんでしょ」

「いやあ、仕事熱心だねえ。けつこうけつこう」

飄々と言つてのけるサボリ魔。こいつは昔からこんな調子だ。

これ以上付き合つのも面倒なので、紗耶は小さく溜息をついてから、帰る、と言つて屋上を後にした。

## 一章 メイザース学園生徒会（5）

「ゴホン！ 改めまして、私はこの一年二組の担任で数学担当の猪井恵理奈です。これから一年間よろしくお願ひしますね。あつ、私の年齢は不詳なので訊いた人は地獄を見ますよ 」

そんな挨拶から始まったロングHRでは、主に委員会等を決めたりした。魁人は特に委員会には入らなかつたし入る気もなかつたが、梶川は学級委員に自ら立候補していた。もつとも、もう一人立候補した男子がいて、ジャンケンという熱いバトルの末敗北していたが……。

現在は、担任の猪井先生（推定年齢二十九）に代わって決定した男女の学級委員が残りを進行している。

だがそんなことは意識の外に迫いやり、魁人は先刻のことを考えていた。

（『魔眼』……か。信じ難いけど、そうとしか言えないな）

あの透明な光。この眼が魔眼だとすれば、一体自分は何を見ているのだろう？ 少なくとも魔術と何らかの関係があることは間違いないと思つ。

ふと、斜め前の席にいる神代紗耶を見る（人間觀察は趣味じやないが）。彼女は相変わらず他よりも強い、そう、あの月夜詩奈と同じくらいの光を持っていた。

（もしかしてあいつも、魔術師なのか？）

魔術師。彼女たち 少なくとも月夜詩奈 はそう呼べる存在だ。

あの後はなぜか血圧も測らず帰られたが、思い返すと白昼夢でも見ていた気分だ。だが、生徒会室での出来事が夢でも幻でもないことは体が覚えている。目に焼きついた光景、動けなくなつた感覚、どれも鮮明に蘇つてくる。

自分の眼、例の光、魔術師の生徒会、そして学園の秘密とやら。

知りたいことが山ほどある。

やはり、もう一度あの『魔術師』たちに会わなければならぬ。  
そう決心したところで H.R.は終わり  
そして放課後がやつてきた。

「学級委員 クラスのトップになれなくて傷ついたオレの心をケ  
アするために、レツツ・ナンパだ！ 行くぞ、魁人！」

「一人で行け」

放課後になつた途端に接触してきた梶川の誘いを魁人は打てば響  
くような速度で断つた。

今日は午前中で終わりなので、クラスの大半の生徒は部活動見学  
などに行くのだが、魁人には別途の用件がある。

第一校舎の最上階 生徒会室にもう一度行かなければならぬ。  
もちろん強制ではないし、怖いという気持ちも多少はある。が、  
それでも自分は自分の眼について知りたい。知らなければならぬ。  
「冷たいこと言つなよ。お前けつこう顔とかイケてる方だぜ。ま、  
オレ様ほどじやないけどな」

何も知らずにお氣楽なやつだ、と魁人は思つも、事情を話す気は  
毛頭ない。

「だから一人で行けつて。俺は……ちょっと用事があるんだ」

一瞬何と言えばいいか迷つたが、適当にそう言つて教室を出ること  
にした。だが、言い出したらしつこい代名詞たる梶川邦明は、逃  
すまいと金魚のフンのごとく引っついてくる。

「なあなあ、用事つて何だよ。お前は部活なんてやるようなやつじ  
やないし、バイト探しは一緒にする約束だろ。内緒にするなんて水  
臭いぜ？ オレたち親友だる。もし何かに困つてんなら助け合つべきだ」

「助け合いが必要なことじゃないし、お前には関係ないことだよ」  
「そうだ。自分とは違つて普通の人間である梶川は関係ない。だか  
ら、これから向かおうとしている常識から外れた世界に引き込むわ

けにはいかない。

次第に魁人は早足になる。多少遠回りしても巻かなければ……。

「はつ！ そうかわかつたぞ！ さてはもう女ができるんだな！

言え！ 何子さんか何美さんか何香さんなのか、一体どこのお嬢様

なのか、 さあ、この梶川お兄さんに教えなさい！」

「誰がお兄さんだ！ そんなんじやないからついてく

廊下の角を曲がろうとしたその時、ドン、と肩が誰かとぶつかった。

「ああん？」

苛立ちの混じった低い声が聞こえ、魁人は恐る恐るぶつかった相手に目を向ける。そこにいたのが両手いっぱいに資料を抱えた美少女なら、ファイクションでよくあるようなラブやコメ的な展開だつただろう。が、その声はそういう世界からはかけ離れたものだつた。

ぶつかった相手は魁人より少し背の高い恐らく上級生で、オールバックにした髪に鋭い目つき、耳にはピアスをつけ、学園内にも関わらず堂々とタバコをふかしている。梶川とは違い、彼の纏つている雰囲気が俗に言つ『不良』だと物語つている。

さらに彼を取り巻くように、同じような空気を纏つた方々が数人。視線だけで人を殺せそうな目で睨んできている。

周囲にいた他の生徒たちの注目が集まる。

「おい、あれ三年の貝崎じゃねえか」「何でここに？」 「誰か絡まれてるぞ」 「昨日も一人無一文にされた拳句ボコボコにされたらしいぜ」 「助けた方がいいのかな？」 「先生呼ぶ？」 「やめとけよ」 「今度はお前がやられるつて」 「怖い怖い」 「触らぬ不良に被害なしだ」

そんな助けようとはしない野次馬たちからの恐ろしい言葉で、魁人の血の気は一気に引いた。

「これは、何かやばいかも。

「え、えーと……、すみません」

魁人は物凄い勢いで冷や汗をかきながらとりあえず頭を下げて謝

つた。それで何事もなく済むことを望んだが、とてもともデリケートな人種である不良たちが見逃してくれるはずもなく、魁人は彼らの中心と思われるオールバックの青年　貝崎に胸座を掴まれて強く引き寄せられる。

「おい『ラ』でめえ、まさか人にぶつかつといてすみませんだけで済むと思つてんのかあ？」

「いや普通は済むかと……」

魁人はヘルプの視線と一緒にいたはずの梶川に向ける。が、彼は忽然と姿を消していた。見ると、野次馬たちの向こうにダッシュしている後姿が……。

（あんの薄情者おお！　助け合つべきだとか言つときながら自分だけ逃げやがつてええ！）

本気で縁切りを考える魁人に、貝崎はタバコをくゆらせながら楽しそうに告げる。

「丁度、今日のカモを探してたところなんだよなあ。だからお前、ちょっと俺に付き合えや」

口元を二イと歪める貝崎。この人数相手に抵抗などできるわけもなく、魁人はそのまま引きずられるように連れ去られてしまった。

## 一章 メイザース学園生徒会（6）

メイザース学園高等部には複数の建物が林立していて、ほとんどが渡り廊下で繋がっている。第一校舎が一年生、第三校舎が二年生の教室棟となっていて、いくつもある特別棟の中には恐らく一生入ることのない場所もあるだろう。

魁人が連れてこられたのは第一校舎の屋上だつた。ここは不良たちのテリトリーと化しているらしく、一般に解放されているのにも関わらず普通の生徒が近づくことは少ないと聞く。

よつて、見渡すかぎり誰もいない。魁人と、貝崎とかいう不良を除いては。

「かはつ！？」

魁人はコンクリートの床に乱暴に叩きつけられて呻いた。

「さてと、まずは有り金ぜえーんぶ出してもらおうか。痛くて怖い思いをしたくなればな」

指をポキポキと鳴らして脅してくる貝崎を、魁人は歯を強く噛み締めて睨め上げた。

これはいわゆるカツアゲとかいうものだらう。学園内で行うなど、もし教師に見つかったら最低でも停学は免れない。ただの馬鹿か、それほど余裕があるのか、見た感じ馬鹿とは思えないので恐らく後者だろう。証拠に、貝崎を取り巻いていた不良仲間は全員階段室で見張りをしている。

だから一応、今はこの不良のリーダーと一人つきり。対等に言えば一対一だ。

魁人だつて喧嘩の経験が全くないというわけではない。経験は向こうの方が上だらうが、一対一ならまだ勝ち目はある。

だが、たとえ目の前の一人を倒したとしても階段室には五人ほどいるわけで、二人ならまだしも、三人以上となると勝てる確率はゼロどころかマイナス方向に急降下である。

( どうする )

どうすれば、ここから逃げれる?

「おー、早くしろや。まさか、金持ってきてませんとか言わねえよな? そうなるとてめえをサンドバックにした後で他の奴を探すことになるが」

どうせ金を渡してもサンドバックにされるに違いない。こいつはそういうやつだろうし、さつきの野次馬たちの会話からもカモにされた者の末路は想像できる。

( こうなつたら、もうやるしかない! )

金は出さない。サンドバックにもなるつもりはない。戦う振りをして、隙をついて逃げよう。見張りの不良たちは、まあ一気に駆け抜けはあるいは逃げ切れるかもしれない。幸い、足と体力には自信がある。

魁人は立ち上がり、貝崎を睨んだまま身構えた。

「あん? 何だ、やる気か?」

「ああ、そうだよ。あんた一人くらいなら、俺にだってどうにかできる。少なくともあと二人は連れておくべきだつたな」

強気に言うも、正直勝算は低いだろう。騒いでいるうちに見張りの不良たちに気づかれたらアウトだ。その辺りを考えると、足とか今にも震えそうになる。

すると、何が面白かったのか、貝崎はいきなり笑い出した。

「ハハハハッ! あー、それならいいんだ。いや寧ろその方が面白い。元々金盗るのはついでだったからな。まだやる気のある奴に力を使ったことがなかつたんだ。今まで力モにしてきた奴らは、俺を見ただけでビビつちまつたからな。だから、できるだけ長持ちしてくれや」

「力? お前、何言って……! ?」

訝しげに眉を顰めた魁人の目の前で、貝崎がズボンのポケットから折り畳み式のポケットナイフを取り出した。丸腰かと思って覚悟を決めていたが、そううまくはいかないらしい。

「おまつ、ちよ、ナイフはなしだろ！？」

一瞬で覚悟が崩れ去り、逃げ腰になる魁人。

「フン、別にこいつで刺すわけじゃねえよ。だがまあ、刺された方がよかつたつてことになるかもしけねえがな！」

下卑た笑みを浮かべると、貝崎は手首を軽く振つてポケットナイフの刃を開くと、

刃を開く。

刹那、魁人の脇を不可視の何かが通り抜け、後ろの落下防止用のフェンスを突き破つた。

「な……」

( 何だ、今のは！？)

貝崎がナイフの刃を出した途端、ビュオッ、と見えない衝撃波のようなものが自分の横をもの凄い速さで通過した。

いや、見えないわけではなかつた。少なくとも、魁人の青く染まつた瞳はそれを捉えていた。

例の輝きだ。月夜が魔術を使った時のように、それがあのナイフと、本来見えないだろう何かに纏わりついていたのだ。しかも貝崎の中には、あの透明な炎が宿っているのが今もはつきりと見える。ということは

「お前……『魔術師』なのか？」

「はあ？」

しかし貝崎の反応は『何言つてんだこいつ馬鹿じやね？』とでも言つようなものだった。

(違うのか？ ジゃあ、俺が見ている光つて一体……！？)

「魔術師……か」貝崎はナイフを畳みながら、「ハハハ、確かにこの力は魔法みてえなもんかもな。実際俺もこの力が何なのかわからねえんだけどよ。まあ、次からそう呼ぶことにするわ」

貝崎がナイフを開くと、疑問を抱く魁人の横をもう一度あの衝撃が掠る。フェンスに二つの穴を開けたそれに、魁人はゾツとした。

「これ……『風』か」

「正解。 つーわけで、今度はあるぜ。頼むから一撃で終わってくれるなよ！」

そんなの不可能だ。風の弾丸は鉄のフェンスを突き破ったのだ。どう考へてもあたれば骨の一本や一本など簡単に砕けて下手すりや昇天するかもしれない。

（やばい、マジでこれやばい！）

再び刃が開かれる。その瞬間、やはり魁人にしか見えない輝きを纏つた風が射出される。見えるならかわせる、そんな甘い速度ではないし、貝崎との距離は五メートルと離れていない。

光纏う風の衝撃波が迫りくる。

（ああくそ！ 見えるのに何もできねえってどんだけ役立たずなんだこの『魔眼』ってのは！？）

いつそあんな光なんて見えなかつたらこんな恐怖を抱かなかつたかもしけないので。このままでは、確実に死ぬ。それは、そんなのは絶対にごめんだ。

あんな風など消え失せればいい、そう思つた刹那、魁人の両眼が強い煌めきを放つた。蒼海のごとく青い煌めきは数瞬と持たず空気には溶けたが、すぐに異変は起つた。

もう眼前まで迫つてきていた風の衝撃波の光がぐにゃりと歪み、そのまま捻じ切られるように飛散してしまつたのだ。衝撃は力を失い、後にはそよ風が魁人の体を撫でるだけである。

「「は？」」「

貝崎と魁人は同時に間抜けた声を吐いた。一体今何が起こつたのか、貝崎はもちろん魁人にもさつぱりわからなかつたのだ。

不発？

失敗？

工ネルギー切れ？

何でもいい。とにかく助かつた。だが

「おいおいおいおい！ 今てめえ何しやがつた？ まさか俺の

『魔術』ってやつを打ち消したのか？ ハハツ、いいじゃねえか。  
お前も俺と同じじつことか？』

「あれが魔術ですって？ 笑わせないでよ」

その時、どこかで聞いたことのある凛とした声が響いた。

## 一章 メイザース学園生徒会（7）

魁人と貝崎はほぼ同時に声のした階段室の方に向に視線を向ける。すると、そこには一人の少女が長い黒髪を風に靡かせて歩み寄つてきていった。

魁人はもう流石に覚えている。見間違えるはずがない。クラスメイトで、初めてあの『炎』が見えた人物

「神代……紗耶……」

（何でここに？　いやそれより、どうやつてここに？）

唯一の出入り口である階段室の中には、貝崎の不良仲間が見張つていたはずだ。それには貝崎も疑問に思つたようで、頭を搔きながら苛立ちを全面に現して口を開く。

「おいおい、あいつらは何やってんだ。誰か通しちまつたら見張りの意味がねえだろうがよ」

「あなたの仲間ならちゃんと見張りしてたわよ。襲いかかってきたもんだから、全員あたしが黙らせてあげたけどね」

「ああ？……ちょっと待てよ。五人もいてこんな女一人にやられたってか？　冗談だろ？　そりや笑い話にもならねえつて」

「事実よ。もしかしたら今頃は風紀委員に回収されてるかもね」

と、立ち止まつた紗耶がチラリと目だけ動かして魁人の方を見た。だが特に何か言うでもなく、再び貝崎に視線を戻すと、淡々とした

口調で告げる。

「貝崎豪太だつけ？　あんたが開花した力を悪用することは確認

したわ。よつて、あたしら生徒会による処分が決定。痛い思いしたくなれば大人しく投降することね」

完全に上からの言葉に、貝崎の額がピキリと変な音を立てた。

「ハツ、生徒会だか何だか知らねえが、口には気をつけろよ。俺は女だからつて手加減できるほど器用じゃねえんだ」

貝崎は畳なんだままのナイフを銃口を向けるように彼女に翳す。が、

彼女は眉一つ動かすことなく、余裕さえ感じられる表情でさうに挑発的な言葉を投げかける。

「奇遇ね。あたしも雑魚だからって容赦しないわ」

彼女の言葉に魁人はヒヤリとした。『雑魚』なんて言葉を超テリケートな不良様に言つちやうと一瞬で怒りの沸点をオーバーするといつの間に……。案の定、貝崎の額には青筋が増加していた。

「ちょ、何言つてんだよ、お前！」魁人は思わず叫んでいた。「こいつの力見てんだろ。もし俺を助けようとしてるんなら別にいいから、早く逃げろよ！」

たとえ彼女が不良五人を一度に倒してしまつほどの達人だとしても、女の子に助けてもらうというのは自分のささやかなプライドに傷がつく。

だが、紗耶はその辺に落ちている石こにこでも向けるよつな、そんなどうでもいいという視線で魁人を見ると、どこか億劫そつに口を開く。

「別にあんたを助けに来たわけじゃないわよ。生徒会の仕事のついでよ、ついで。ただの結果的なものでしかないんだから変な期待は持たないことね。それにそつちこそ離れてた方がいいわよ？ アレは雑魚だけど、あんたを戦いに巻き込まない保障はできないから」「！？」

その瞬間、彼女の中にも今朝見た時と同じ透明な炎が宿った。否、同じではない。今朝の時よりも荒々しく、猛々しく、桁違いな力強さと存在感を感じる。

わかる。アレは貝崎なんかよりもずっと、魔術師である月夜の中に見た『炎』に近い。いや、近いどころか通り越している。

「本物の、魔術師……」

確信を持つてそう思えた。それに、彼女は『生徒会』と言つていた。この学園の生徒会は魔術師だと、魁人は未だに信じられないが知っている。彼女 神代紗耶は間違いなく魔術師と呼べる者なのだろう。

彼女がどんな魔術を使うのかは知らない。だが、彼女が敗れる姿を魁人は想像できなかつた。

「さつきから人のこと雑魚雑魚つて、てめえ

既に額を青筋で埋め尽くした貝崎がナイフを持つ手に力を込め、叫ぶ。

「ざけてんじやねえぞこらああツ！」

ナイフの刃が開かれ、常人には見えないはずの衝撃波が紗耶に向かつて飛んだ。しかし、紗耶はその場を動こうとしない。

代わりに左掌を胸の辺りで立てたかと思うと、その掌と重なるよう小さな方陣が展開される。すると、陣の中心である掌から黒い棒状のものが飛び出した。彼女は右手でそれを掴むと、まるで居合でもするような構えをし

次の瞬間、彼女の前に現れた蒼い炎が衝撃を呑み消した。

貝崎は驚愕の表情をしている。魁人も何が起こったのかわからなかつた。ただわかるのは、紗耶が右手に握っている物、それが蒼い炎を刀身に纏う日本刀だということだ。

漆黒の柄に、金色に縁取りされた鍔、見事な反りの刃には銘文と思われる文字列が象嵌で施されている。元から国宝級と言われても信じてしまうほどの莊厳な業物に、蒼い煌めきを花びらのように散らす炎を纏うことで幻想的なまでに美しく見える。

「一応穩便に話し合いしてみたけど、やっぱり馬鹿相手だと無駄じやない」

どう見ても挑発してたじやないか、と思うも魁人は黙っていた。

「ハ、ハハ、こいつは面白えなあおい。アレか、今日は俺的ライバルの大量発生日か？ 他にこんな力を持つてんのは本摩の野郎だけかと思つてたがな。……いや、そうか。あいつが停学になつてんのはてめえらの仕業つてわけだな。だがな、俺は本摩のようにはいかねえぜ！」

貝崎は何度も刃の開閉を繰り返し、その動作によって生み出される風の弾丸を連射する。だが、そのこと！」とくを彼女は燃える刃で斬り伏せた。

「な、何い！？」

「あんたみたいなのとライバルになるなんて最悪。魔術師として末代までの恥だわ。いいわ、次元の違いつてのを見せてあげる」

日本刀の刀身に刻まれた文字が炎の中で金色に輝く。彼女がその日本刀を床に半円を描くように振るうと、まるで紙に描いたように蒼い炎が軌跡として残り、さらにその先端が伸びて反対側と繋がり、紗耶を中心とした真円となる。

そんな神秘的な光景に、魁人も貝崎も言葉を失つて魅入っていた。しかしそれも一瞬のことと、彼女が勝ち誇った笑みを浮かべると同時に、その魔法陣のような炎の円から、見ただけでは数えきれない量の蒼い火球が飛び出した。

それらは人魂のごとく宙に浮かび、紗耶を太陽とする惑星のように周囲を公転し始める。

「最初に言つたわよね？ 大人しくしなければ痛い目見るつて。正確には熱くて痛い目だけど」

紗耶は刀を天に突き刺すように翳す。この後、周りを飛んでいる火の玉が一体どうなるのか、容易に想像できた。

「……い、いや、待てよ、おい、やめ」

貝崎は既に先程までの余裕を失っていた。恐怖に目を見開き、顔を皺くちゃにして命乞いしようとするが、紗耶は無情にも刀を振り下ろす。

その動作で一斉に、一切の容赦もなく、圧倒的なまでの力をもつて、炎の流星群は貝崎に襲いかかつた。

「あああああああああッ！ やり過ぎやり過ぎ紗耶ちゃん待つて  
スト ップ！！」

同時に、そんな絶叫が屋上の隅々まで響き渡った。

## 一章 メイザース学園生徒会（8）

結果的に貝崎は氣絶しているものの、無傷だった。あの火球の群れは全てわざと外されており、彼が倒れている周りの床に黒い斑模様を描いただけで終わっていた。

あれが神代紗耶の『魔術』。貝崎の力と比べたら格が、いや、次元から違うほど圧倒的な強さだった。

「もう、紗耶ちゃん！　できるだけ穩便にって言つたじゃないの。

あれでも一応この学園の生徒で、私たちは生徒会なんだからね」

その炎の刀と魔術を使う神代紗耶は、現れた絶叫の主　月夜詩奈の説教をくらつていた。月夜は一人のようで、魁人が知るもう一人の生徒会メンバーである藤林葵の姿はない。

「えっと、その、今度は燃やしてないからいいかなあ……なんて思つたり」

「いいわけないでしょ。階段のところにいた人たちはみんな病院送りじゃない。ちゃんと話し合いしたの？　挑発的な言葉とかかけないわよね？」

「…………うう…………」

貝崎と対峙していた時の凛とした姿はびくべからず、図星を突かれた紗耶は月夜から田を反らして口籠る。彼女なら生徒会長ですから踏みつけてしまいそうなイメージを魁人は勝手に抱いていたが、これは意外だった。

月夜は風に揺れるウェーブの髪を手で押さえ、小さく息をつく。

「まあ、終わったことだからしようがないわね。ところで銀くんは一緒にやなかつたの？」

「一緒にないですよ、あんなやつ。どうせどうかで遊んでるに決まってるわ」

「そう、また……。銀くんは紗耶ちゃんのこと一番知ってるから任せてるのに」

月夜の言葉で嫌なことでも思い出したように紗耶は唇を尖らせる。そんな彼女たちの下へ歩み寄り、魁人は割り込みづらいと感じながらも意を決して声をかけた。

「あの、月夜先輩」

すると、こちらを向いた月夜は曇っていた表情に安堵の微笑みを咲かせる。

「あ、やっぱり魁人くんだったのね。あのね、一年生が貝崎くんに捕まつたって聞いたから、もしかしてって思って心配してたのよ。よかつた、無事で」

「え？ あ、はい、そこはまあ何とか」

本当に心の底から安堵したような笑顔を見せる月夜に少々びきまぎしつつ、魁人は倒れている貝崎と、彼を倒した紗耶を交互に見てから訊ねる。

「それより、これって一体どういうことなんですか？」

貝崎とかいう不良が使った力のこと、その貝崎を打ち倒した紗耶が言った『生徒会の仕事』とやら、冷静になつて考えれば考えるほど混乱してくる。小学生に大学の問題を解けと言つているようなものだ。

月夜は向こうで失神している貝崎を見やる。

「これが、この学園の秘密よ」

「秘密？」

「うん。このメイザース学園はね」

「ちょっと待つて」

紗耶が説明を始めようとした月夜を遮り、魁人の顔を警戒するようにキツと睨んできたかと思うと、右手に持っている日本刀 炎は消えている を突きつけてくる。

「あなたは何なのよ？ これは一般生徒が踏み込んでいいことじゃないんだけど？ ただの被害者なら何も聞かずにさつさと帰つてくれない？」

「い、いや、俺は、その……」

殺されることはないだろうが、眼前に突きつけられた日本刀には死の恐怖を覚えてしまう。加えて紗耶の殺気のような気迫がピリピリと全身に突き刺さり、うまく声を言葉にできない。

「いいのよ、紗耶ちゃん。ほら、生徒会室で言つたでしょ？ 魔眼持ちの一年生。彼がそのなのよ。だからそれ危ないから下ろして下ろして」

言葉を紡げないでいる魁人に代わって、月夜が説明してくれた。

「魔眼持ち？ こいつが？」

言われた通り紗耶は刀を下ろしたが、怪訝の混じる威圧的な視線を向けてくることは変わらない。紗耶は觀察するように魁人の普段と同じ色に戻った眼を見詰め、そして思考するように顎に左手を持つていく。

「じゃあもしかして、あの時のアレは不発だつたんじゃなくてこいつの力……」

彼女のその呟きは、聞き取れないほど小さかった。

「え？ 何か言った、紗耶ちゃん？」

「ううん、何でもないです」

紗耶は首を振ると、変らぬ視線で魁人をまっすぐ見て、訊いてくる。

「で？ あなたは何が見えんのよ？」

「ああ、えーと、うまく説明できないけど

」

魁人は自分の眼に映る透明な輝き

普段見慣れている光球型、

今日初めて見た炎型や血管のような回路状のもの、チョークやナイフ、風にすら纏っていたオーラ的なもの、この学園の『見える人』の多さ、生まれつき見えること、それら全てを包み隠さず話した。

ここまで自分の眼について吐露したことはなかつた。親以外に打ち明ける相手がいなかつたし、言つてしまえば『冗談と思われるか、最悪気持ち悪い』と昔から親に言われてわかつていたからだ。

何か、話したらちょっとスッキリした。

「人、もしくは物の中に宿る不思議な光。私たち魔術師はそれが特別強い、かあ。それって、自分にも見えたり、常に見えちゃつたりしてるので？」

「いえ、自分に見えたことはありませんし、見ようと思わないかぎりは他の人に見えません。あ、でも炎とかは突然見えたりするけど……」

言うと、月夜はしばらく何かを考え込むように、ううん、と唸り、そして考えを述べる。

「やっぱり、『魔力』じゃないかな？ 私たちが魔術を使う時は、基本的に魔力を高めてそれを術式に流し込むの。その高まつた状態の魔力に魁くんの眼が自然と反応してるんだと思う。魁くん自身の魔力は映らないみたいだけど、高められ、消費される魔力は炎に見え、そしてそこから供給される魔力が魔術回路や媒体、術自体にも見えるんだよ、きっと」

「魔力……やっぱり」

想像してなかつたわけではないが、それだとどうも釈然としないのはなぜだろう？ 違う答えを望んでいたわけではない。寧ろ納得したのだが、何か胸のもやもや感が消えない。

見えているのは魔力でいいのかもしね。でも、まだ何かが隠れている気がする。

まさか俺の『魔術』ってやつを打ち消したのか？

貝崎の言つたことが引っかかる。あれは不発じやなかつたのだろうか。

その時、紗耶が持つてゐる日本刀に蒼い炎が纏つた。その瞬間、いや直前にはもう、魁人の瞳は澄んだ青色に染まつていた。

「な、何だ、いきなり！？」

貝崎が復活したのか、と思ったがそうではなかつた。紗耶は燃える刀を携えたまま魁人と距離を縮め、生徒会室で月夜がやつたよ

うに顔を近づけてくる。まるでキスでもするかのように背伸びしているが、彼女の仏頂面や日本刀がそんな雰囲気を完全にぶち壊していた。

「本当だ。遠くからじゃわかりにくいけど、確かに青くなってるわ。  
……ちょっとキレイかも」

一瞬、本当に一瞬だが、自分を見る彼女の表情が緩んだ……よう  
に見えた。

顔を赤くした魁人は弾かれたように後ろに飛ぶ。

「は、離れるよ。あんま見んじゃねえ」

「何よ、別にいいじゃない。見てて減るもんなんて、せいぜい魔眼  
に使われる魔力くらいでしょ。それとも何？ あたしの顔が近いか  
ら照れてんの？」

「そ、そんなわけないだろ！」

確かにそれもあるが、何より刀の炎が近くにあるだけで焼けそう  
なほど熱いのだ。よくそんなものを持っていられるなと思うが、そ  
こは魔術師だからと適当に自分を納得させる。

遠回しに『魅力がない』と言われた紗耶はムツとするも、とりあえず刀の炎を消した。同時に彼女の魔力も消え、スウッと魁人の眼  
からも色が落ちる。

「フン、あんたみたいな素人が魔眼なんて宝の持ち腐れね。見える

だけで役に立たつてないんじゃないの？ 馬鹿みたい」

「何だと！ 確かに何の役にも立たないけど、もし俺に喧嘩売つて  
るなら買つてもいいぜ。ただし魔術と武器は禁止な」

「あんたに合わせる必要がどこにあるのよ？」

睨み合つ一人。互いの視線がぶつかる地点で火花が散るのを幻視  
できそうな、そんな微妙で危うい空気を和ませるよつに、月夜が明  
るく笑つた。

「あ、あははー。そ、そういうば紗耶ちゃんと魁くんって同じクラスだと思うんだけど、もう教室とかでお話したことあるの？」

「「あると思いますか？」」

しかし同時に振り向いて同じ言葉をハモらせてくる一人に、月夜の笑顔は苦笑に変わった。

「月夜先輩、俺の眼のことは、まあ一応何となくわかりました。それで」

これ以上睨み合いを続けても仕様がない。本当に魔術で焼かれるのも嫌なので、魁人は話を再開することに決めた。

「学園の秘密というの？」

月夜は苦笑から少々真剣な表情に切り替えて語り始める。「えーと、何から話そつか……うん、まず魔力ってのはね、才能と同じで先天的なものなの」

何か学園とは関係ないような気もするが、魁人は黙つて聞くことにした。紗耶も今度は口を挟んでこない。

「だからね、たとえ魔術の才能や知識があつても、自分の中に魔力がなければどんなに訓練しても魔術なんて使えない。つまり、生まれ持つた才能と魔力、それに知識と経験も加えて初めて魔術師って呼べるの」

「えーと、まさか本当にこの学園は魔法学校とかそういうのでしたつてことですか？」

「そんなわけないでしょ」

どこか馬鹿にした感じの口調で言つてくる紗耶に少しムカつくるが、ひとまず無視する。

月夜が続ける。

「あははー、確かに外国に行けば魔術学校っていうのはあるし、実は私もそこに出だつたりするんだけど、まあそれは置いといて。このマイザース学園はね、世界の魔力が循環している場所の上に建っているの」

「は？ 世界の、魔力？」

「そう。私たちはそれを、地球の生命力を『地脈』と言つのに対して『魔脈』って呼んでる。普通の場所だと内外に影響がないようには膜みたいなもので護られてるんだけど、ここは特別その膜が薄

いみたいなの。だからこの魔脈が原因で、さっき言つた先天的に魔力を持つてゐる人や、魔術とかに興味を持つてゐるような人々を自然と引き寄せてしまうわけ。魁くんは、何でこの学園に来たのかちやんと言える?」

「……」

言えない。今朝も梶川に言われて少し考えたが、そこで思いついた理由は自分を納得させるために後から決めたものだ。一人暮らししたければ他でもできる。ここより自由な学校だつていくらでもある。それなのに自分はマイザース学園を選んだ。その決定的な動機が全く思い出せない。言えるとすれば『何となく』の一言だけだ。

「でもそれだけだと、こんなに魔力を持つてゐる人たちが集まつたりはしない。魔脈の影響は私たち魔術師にとつては別に問題ないんだけど、問題があるのは、魔力を持つてない人に魔力を与えてしまうことなの。個人差はあるけど、だいたい一年もすればほとんどの人に微弱ながらも魔力が宿る。魁くんが見たのは、上級生とか中等部からの生徒たちばかりのはずよ」

魁人は思い出す。登校時はどうか知らないが、この魔眼で自分の教室を見た時、そこにいる神代紗耶の他に魔力の光を持つていた者は少なかつた。

「えーと、実際にそうとして、それに何の問題があるんですか?」「あの不良の力は見たんでしょ? あれが問題点よ。自分で気づきなさい」

答えたのは紗耶だが、説明が足りないどころか説明にすらなつていないので、月夜が改めて言い直す。

「えっとね、魔力は持つてゐるだけでいろんな能力がついたりするの中には魔術っぽいものから、超能力みたいな力を身につける人もいる。もちろん能力は魔力の強弱に比例して、大半の人はちょっと運が強くなつたり、走るのが速くなつたり、物覚えがよくなつたりと微妙な力ばかりだから、気づかず卒業しちゃつてそのまま魔力を

失う。まあ、そういう人は別にいいんだけど、貝崎くんみたいに強い能力が発現して、それに気づいた人たちが問題なのよね。ただの一般人だった人間が、突然そんな力を得たらどうなるか、大体想像つくかな？」

魁人は無言で頷く。何でもなかつた人たちがいきなり特殊能力を身につければ、『自分は特別な人間なんだ』と思って優越感に浸るだろう。そして力に溺れて何をしてかすかわかつたものじゃない。少なくとも、貝崎のように私利私欲に力を使うことは間違いないだろう。自分だって、そうならないとはかぎらない。

無言のままそんな風になつた自分を考えていると、月夜が首を傾げてくる。

「信じられないかな？」

「いえ。……確かに信じ難い話ですけど、実際に見てしまったわけですから」

それだと、貝崎の態度や魔術に関して無知だつたことも頷ける。「うんうん、すぐに信じてもらえてよかつた」月夜は嬉しそうに笑う。「でね、わかつた通り、そういう力を持つと、魔力に魅了されて悪いことを始める人が出てくるの。そんな彼らの暴走を止め、学園の秩序を魔術的に守るのが、私たち生徒会魔術師の役目つわけ」

「生徒会の、魔術師？　何でまたそんな」

「ぐおああああああああああああああああああああああああああああああああつつつ！！」

その時、空気を激しく振動させるような雄叫びが上がつた。

魁人の魔眼が青く反応する。紗耶は無言で刀を構えた。

「なつ、あいつ……」

声がした方を向くと、今まで氣絶していたはずの貝崎が立ち上がり、狼のごとく天に向かつて吠えているところだつた。

「あいつ、様子がおかしくないか？」

貝崎に理性を感じない。白目を向き、上半身は前のめりになり、まるで怨霊のように薄ら寒い嫌な気配を撒き散らしている。

「魔力が暴走してるのよ。突然力を得た素人はあたしらみたいに魔力をちゃんと制御できないから」

「マジかよ……」

やはり魔力は、魁人のような生まれつきの例外を除けば、素人にとつて相当な危険物のようだ。魁人の魔眼に映る彼の魔力の炎は、宿主を蝕む嵐ように激しく荒れている。

「月夜先輩、あんな状態でも平和的に話し合つんですか？」

紗耶は振り返らないまま皮肉げにそう訊く。彼女の表情は余裕そのもので、焦りや恐れなどなく、どこか好戦的な笑みさえ浮かんでいた。そんな彼女に、月夜はやれやれと肩を竦める。

「ああなっちゃうとしちゃうがないわ。でも殺しちゃダメよ。これは人命救助なんだから」

「わかつてます！」

紗耶が承知した瞬間、暴走する貝崎は咆哮を上げて襲いかかってきた。紗耶は刀に魔力を送り、刀身に蒼い炎を灯して魔性と化しつつある貝崎を迎撃つ。

魔力のせいか、人を軽く逸脱した獣のような動きで距離を縮めてくる貝崎。対する紗耶は炎の魔法陣を、自身を中心に描いていく。そしてその陣が完成しようとした刹那

紗耶の隣を、何か小さな白い物体がもの凄いスピードで通り過ぎた。

え？ と思うのも束の間、白い何かは猪突してくる貝崎の額に吸い寄せられるように貼りついた。それは、紙だった。神社にでもあるような、一筆書きした感じの達筆な文字が書かれている長方形の御札である。

「発ツ！」

短い声が響く。それは紗耶でも月夜でも、もちろん魁人の声でも

ない。

後方から聞こえたその声に反応したのか、貝崎に貼りついた御札が爆散した。ただ紙が切れ千切れわけではない。本当に火薬を爆破した時みたいに、熱と煙と衝撃を生み出している。

爆発をもろに受けた貝崎は体中から煙を吹いて崩れ落ち、そのまま動かなくなる。たぶん生きているだろうが、魁人はそれを確認することなく、体ごと後ろを振り向いた。

階段室のドアの前に、一人の人物が立っている。一人は血圧検査の時に会った長いポニー・テールにほつそりとした体つきの少女藤林葵で、もう一人は派手な銀髪をした背の高い男子生徒だった。彼は美形で爽やかな容貌を台無しにするニヤニヤとした笑みを浮かべ、忍術でも使う時のように胸の前で奇妙な印を結んでいる。

魔眼を持つ魁人は一目でわかった。貝崎を倒したのは、内に炎を宿している彼だ。

「銀英！」紗耶が叫ぶ。「あんた、あれはあたしの獲物　じゃなくて、仕事サボって今まで一体どこで何してどうやって遊んでたのよ！」

「いやあ、ほら、ヒーローはヒロインのピンチに華麗に参上するものじゃない？」

紗耶の怒号をそよ風の「ご」とく受け流し、銀英と呼ばれた男子生徒は葵と共にこちらへ歩み寄りながら、飄々とした口調でそう言つた。

(……こいつも生徒会、そして魔術師か)

紗耶や月夜の反応を見るに、恐らくそういうのだろう。

「銀くん、私と紗耶ちゃんのどっちが銀くんのヒロインなのかな？」「もちろん両方」

「うつさい黙れ！」こちちは主にあんたとこの魔眼持ちのせいでもっとイライラしてんのよ。だから今すぐ刀のサビにして燃やしてやるわ！」

勢いに身を任せ、紗耶は炎の消えた刀をブンブン振り回して銀英に襲いかかるが、彼はその達人級の剣捌きをヒヨイヒヨイと難なく

かわしていく。

「何であいつの苛立ちに俺も入ってるんだよ。ていうか、アレ止めなくていいのか？」

月夜と葵を見るも、一人とも彼女たちを止めるような素振りは見せない。それどころか完全に無視し、葵が月夜に抑揚の薄い口調で告げる。

「詩奈、風紀委員呼んできた。いつもの指示でよかつた？」

「うん。オーケーよ、葵ちゃん」

月夜が頷いた時、階段室から三、四人の男女が現れた。彼らはこちらに向かつて会釈すると、倒れている貝崎に駆け寄り、手慣れた手つきで彼を担架に乗せる。そしてキヨトンとする魁人の視界を横切り、彼らは担架に乗せた貝崎をどこかへと運んでしまった。

「あの、あいつらは？」

「風紀委員だよ。簡単に言えば私たちの部下ね。と言つてもみんな魔術師じゃなくつて、貝崎くんみたいにこの学園で魔力が開花した人たちから構成されてるの」

「え？ でも今日のHRで風紀委員も決めてたよな……」

「うん。だから、裏風紀委員とでも言つべきかな。貝崎くんみたいな自分の魔力に酔つた人の末路は、彼らのように風紀委員となつて生徒会のサポートに回るか、『忘却部屋』っていう魔術的処置の施された部屋で魔力を封印し、それに関わる記憶を改変するかの二択なの」

「ということは、あの貝崎も風紀委員になりそうにない。何となく、そう思う。」

「あいつは忘却部屋行き」

葵が無表情のまま結論を口にした。と、今気づいたが、彼女は両手で何かを抱きしめている。

それは背中を青い毛、腹を白い毛で覆われた、円らな赤い瞳をした子犬の……ぬいぐるみ？

「わう！」

本物だ。

何の種だろう。そもそもこんな青い毛の犬なんているのだろうか。  
突然変異とか？

「何ですか、その犬？」

とりあえず気になつたので訊いてみる。すると、葵の無表情だった顔が僅かにムツとした。

「リクは犬じやない。氷狼の魔獸。友達」

「へ？ 魔獸？」

と、リクという名前らしい子犬は彼女の腕から抜け出し、犬なのに猫のように着地すると、愛らしい動きでポカンとする魁人の方に近づいてくる。

次の瞬間、リクと葵の中に魔力の炎が生まれたのを見ると、子犬だつたりクの体が一瞬で巨大化した。

「うわっ！？」

巨大化した体長は熊ほどの大きさを持ち、ライオンのような猛々しい白い鬣が生え、円らだつた両眼は獲物を狙うハンターのように鋭く赤い輝きを放っている。

そんな元の子犬とは似ても似つかない怪物に、魁人は呆気なく押し倒された。

( 嘔われる！？)

本氣でそう思つた。全身から嫌な汗が噴き出す。死の恐怖が満ちてくる。自分の体など骨ごと碎いてしまいそうな大口が顔に近づいてくる。鋭利な牙の並んだ大口からは青紫色の舌が覗き、凍りつきそうなほど冷たい吐息が魁人の顔面を撫でる。そして

ペロッ。

冷たく湿つた、しかし『生』を感じるものが頬に触れた。見ると、怪物はその舌で魁人の頬を嘗めているではないか。尻尾なんかそれはもう嬉しそうにブンブン振つている。

「ははは、リクに好かれたみたいだね。それともそれは、新しく加わるメンバーに上下関係を示しているのかもね」

魁人が視線を怪物から反らすと、そこには愉快そうに笑う銀髪男の顔が。その向こうで微妙に息を切らした紗耶が『次こそ燃やしてやる!』とか言っている。

(新しい、メンバー? ……誰が?)

何となく嫌な予感がするその疑問を口にする前に、月夜が明るい声で言った。

「うん。とりあえずみんな揃つたから改めて自己紹介しようか。私は生徒会長の月夜詩奈。ローンの魔術師です。これからもよろしくね、魁人くん」

「僕は副会長にして符術師の御門銀英。まあよろしくってことや。あ、呼ぶ時は『銀先輩』で」

「藤林葵。会計。魔獣使い。……呼ぶ時は『葵』。この子はリク」三人がそれぞれ勝手に紹介する中、紗耶だけが腕を組んでムスッとしている。

「ほら、紗耶ちゃんも」

そんな紗耶を月夜が促し、彼女は嫌々といった様子で口を開く。

「……生徒会書記、神代紗耶よ」

彼女が一番素っ気なかつたが、とりあえずそれで自己紹介は終了したようだ。

「私たち生徒会魔術師は、魔力の開花してしまった生徒たちを管理するために学園から雇われているようなものなの。だからね、魁人くん、ものは相談なんだけど」

月夜が未だリクに嘗められ続けている魁人に向かつて言葉を紡ぐ。

「生徒会に、入ってくれないないかな?」

予想はしていた問い。魁人は既に唾液でベトベトになつた顔に何かを悟つたような表情を作り、考えるまでもなく答える。

「いや……無理つす……」

こんな生徒会になど入つたら、命がいくつあつても足りない。

## 間章（1）

「くくくくくく、できた。つうーにできましたよー。」

薄暗く湿った空気が満ちている研究室のような部屋に、男の陰険な笑い声が木霊する。

「魔力が芽生えて半年、よーへーこの段階まで上り詰めましたよー」

薄汚れた白衣を纏つたその男は、縁なし眼鏡をクイッと指で持ち上げると、傍に置いてあつた片手で持てるほどの壺状の容器を手に取る。男はその中を覗き込むと、口元に嫌らし笑みを浮かべた。「えーすが、くくく、じょーんなもので満足する私ではありますん」

壺を持ったまま椅子を引き、彼は物音一つ立てずに腰かける。声とは真逆の静かな動作が、纏っている白衣や薄暗い部屋と相まって幽靈のような存在感を滲み出している。

壺を置き、両手を乱雑に資料が散らばっている机の上で組むと、男は眼鏡の奥の目を細めた。

「さて、次はどうしましょうか？ 一度失敗したこともあります、今の私の魔力なら素材をあーなりレベルアップしても問題ないでしょ。くくく、だから、そろそろ夢の挑戦を始めましょうかねえ」

彼は散らばっている資料の中から数枚の紙を抜き取る。それには奇妙な紋様や文字などが書かれており、何かの設計図のようにも見えた。

「……幸い、この辺りは魔脈のおかげで良質な材料が豊富ですからねえ。まったく、奴らを見返すには最高な環境ですよ。この学園は眼鏡のブリッジを押さえ、白衣の男はくつくつと黙った。

## 一章 炎の退魔師（1）

「四月十三日。昼休み。

「だーかーらー、説明してるでしょーよう、魁人君」

学園内にいくつある学食の中でも一番スタンダードなメニューが置いてある食堂で、魁人は梶川と昼食をとつていた。二人とも口替わり定食を頼んでいる（今日は鶏の唐揚げ）。

今日からは午後まで授業があるのだが、大半の授業は最初ということでおrienテーション的なものでしかなく、せっそく授業中に寝ている生徒が出現するほど退屈極まりなかつた。

「はいはい、お前はあの時逃げたんじゃなくて先生を呼びに行つたという御託は聞き飽きました。その後それはもういろいろと大変だつたんですよ？」口で語るには難しそぎて面倒なため何があつたのかは以下省略」

「ちょ、何で敬語！？ ねえ何で！？ 二人の距離が毎秒光年単位で離れて行つているような気が否めないんですけど！」

「いいんですよ。結果オーライだつたから特に君に対しての問題はないんですよ。だから寛大なる魁人様は君のことを許してあげます」「ダメだ！ そんな神父さんみたいな顔で許しを貰つたら一度と元の位置に戻れなくなる！？」

まだ手をつけてない定食を脇にじけ、梶川は机に頭を擦りつけて謝り始めた。背が高く、見た目ヤンキーな梶川がほとんど土下座に近い謝りをしていることにちょっと優越感を覚えつつ、そろそろ周りにも迷惑だから許してやるうと決める。定食奢つてもらつたし、あの後あつたことを考へると、梶川を恨む気も失せるというものだ。

「わかつたわかつた。もうわかつたからその辺でやめろ」

普段の調子で言つと、梶川はすぐさま頭を上げて『魁人神様バンザイ！』とか意味不明なことをほざき、その後はいつもの彼に戻つて定食をがつつき始める。

切り替えの速いやつだ、と呆れる魁人は唐揚げを一口かじった。カリッとした食感の後に広がる肉汁のうまみに至福を感じながら、魁人は昨日のこと思い出す。正直、いろいろとありすぎて未だ混乱しているのが現状だった。

## マイザース学園生徒会。

魔脈とかいう『世界の魔力』の影響で魔力が芽生え、特殊能力を身につけた生徒たちの暴走を鎮圧し、保護・救済を行う学園から雇われた生徒の魔術師。

生徒会に入つてくれないないかな？

一晩中ずっと考えていた。いや、入る入らないのことではない。自分の日常を捨て、あんな非日常の危険がつきまとつ場所へ踏み込む気はない。魁人は『魔眼持ち』という特殊な人間だが、魔術師ではない一般人なのだ。

未だ、昨日のことは夢だったのではと思う。しかし、思った一秒後にはそれを否定している自分が出現する。この眼や光の正体は確かに知りたかったことなのだから。

月夜がこれから何の躊躇いもなく学園の秘密等を話してきたのは、魁人を生徒会に引き入れるためだ。あの場では断つて逃げるようにな帰宅したが、果たして彼ら魔術師が秘密を知っている自分をこのまま放つておくだろうか。ずっと考えていたのはそのことだ。

午前中、同じクラスにいる神代紗耶は接触してこなかつた。生徒会のメンツの中では一番積極的に行動を起こしてきそうな彼女が、まだ何もしてこないのはどういうことだろうか。

（俺の記憶どころか存在ごと抹消するような魔術の準備でもしてたらどうしよう……）

どうしてもネガティブに考えてしまう。生徒を護るのが彼女たちの仕事なのだ。最悪でも昨日の不良　　貝崎豪太と同じように記憶を弄られるくらいだろう。だが、やはりそれでも接触してきそ

うなものだが……。

(まだ俺を生徒会に引き入れることを諦めてないんだろうか)  
そうだとしても、生徒会になど絶対に入るわけにはいかない。  
常の生徒会がしている面倒そうな仕事もやっぱりあるだろうし、  
より自分の身の安全のために。

何 通

## 一章 炎の退魔師（2）

「うーん、どうしたら魁くんが生徒会に入ってくれるかな？」

古びた本やファイルといった、何らかの資料を両手に山積みにして廊下を歩く月夜詩奈は、同じように資料を運んでいる神代紗耶にそう訊ねかけた。

「あんなやつ仲間にする必要ないですよ。不良一人倒せないような弱つちいやつを入れても、足手纏いどころか鉄球の足枷をつけて海底を歩くようなものですよ」

「ミ虫以下とでも言うように、紗耶は不愉快そうな顔で答えた。「あははー、紗耶ちゃん家は実力主義だからねえ。でもそれは言い過ぎじゃないかな？」

「魔術師は強さが全てです。特にうちの家系は」

「魁くんは魔術師じゃないし、神代家の人に間でもないじゃない。それとも紗耶ちゃんは、魁くんを神代家の婿養子にしちゃつたりするつもりなのかな？」

「絶つつ対にありえないです！」

心底嫌そうに、紗耶は首を振つて全力で否定した。長い黒髪がふさあつと揺れる。

神代家は月夜が言つた通り実力主義の魔術師一族だ。主な仕事は心靈現象などの調査・解決で、何でもこの学園の理事長は神代の宗主つまり紗耶の父親と古い知り合いだつたらしい。

紗耶がメイザース学園に入学し、生徒会に入つたのは、その理事長からの頼みだつた。

魔脈の存在が明らかになつてから、このメイザース学園には多くの魔術師たちが関わってきた。年に一人はその魔術師たちの子供が中等部から入学し、生徒会に入つて高等部まで繰り上がりつてくるシステムなのだが、今年にかぎつてその繰り上がりがなかつたのだ。魔脈の影響はなぜか中等部側よりも高等部側の方が強く、生徒会

の戦力は常に充実しておくる必要がある。一応、健康診断にあやかつて新入生の中から偶然入学してきた魔術師や異能者を探したりするのだが、あの羽柴魁人のように、魔術師レベルの魔力を持つていても素人だつたりする者がほとんどで期待できない。よつて、彼女は学園からの推薦という形で入学したのだ。

それついて紗耶に後悔はない。高校なんてどこだっていいと思つていたし、普通の高校に行くよりも面白そうだつた。

「魁くんの魔眼は何としても確保しどきたいんだけどなー」

歩きながら物欲しげに天井を仰ぐ月夜。なぜそこまで彼に執着しているのか、力が全てと考えている紗耶は理解しかねていた。

「必要ないですよ」

だから、あのような弱者を迎えることは彼女にとって障害以外の何物でもない。

「そうはいかないのよ、紗耶ちゃん」

しかし、月夜はふややんとした顔を真剣にしてそう言つてくる。  
「魁くんの眼、まだ『魔力が見える』ってだけで他は何にもわかつてないのよ。そういう力を持つた魔眼自体珍しいし、一般人が生まれつき魔眼持ちなんて滅多にないケースなの。魔脈の影響で危険なものに変化しても困るじゃない？ ケルト神話の魔神・バロールみたいに見ただけで人を殺せるようになつたり、メデューサみたいに見たものを石に変える力とかを持つちやうかもしれない。だからなるべく手元に置いときたいわけ。それに『魔力が見える』ってことは私たちの仕事にもすつゞく役立つと思うの」

「それは、まあ、そうですけど……。ていうか、最後のが本音じゃないですか？」

詰問する紗耶に、月夜は『あ、バレた』とちょっと舌を出して照れ笑いした。

「まあ、何にしてもね、魔眼の名称だけでも知つときたいからこうやって資料を集めてるわけなんだけど……まだ情報が足りないのよね。だから紗耶ちゃん、同じクラスなんだから積極的に声かけて誘

つてくれないかな?」

「無理」

紗耶は月夜の頼みを光の速さで断つた。

「もう、だつたら私が直接誘惑するしかないわね。どんな手を使つても、ね。あははー」

具体的に何をする気かは知らないが、笑顔の月夜から黒い何かを感じ、紗耶は一瞬ビクリと肩を震わす。この場だけ狙われた魔眼持ちのことを氣の毒に思いながら、紗耶は昨日の屋上で見たことを思い出す。

(それにしても、魔力が見える魔眼……か)

自分は魔力を感じることしかできないが、不発だと思つた貝崎の能力を羽柴魁人が打ち消した、もしくは相殺させた可能性がある。彼自身は眼の説明の中でそのことを言つていなかつたから気づいてないのだろうが、もしそうなら、確かに調べてみた方がいいのかもしない。生徒会に入れることは反対だが……。

「あつ、そうだ、月夜先輩」

思い出したように、紗耶。月夜は『何かな?』と小首を傾げる。

「今日の放課後、あたしは生徒会に出られませんから」

それだけで、月夜には何かわかつたようだ。

「あー、そつか。うん、わかつたわ。今日は通常の生徒会の仕事だけだから、銀くんさえサボらなければ私たちだけで十分よ。そういうねー」

月夜はどこか哀れむような苦笑を浮かべ、

「紗耶ちゃんは、本職の方もあるから大変よねー」

## 一章 炎の退魔師（3）

「やあ、魁人」

魁人たちが昼食を終えて食堂から出ると、そこには見知った顔の男女がフレンドリーに声をかけてきた。正確には声をかけたのは銀髪の男の方で、女の方は無言で彼に付き添っている。

「銀先輩、葵先輩……」

爽やかで軽薄、そんな矛盾してそうな笑みを浮かべているのが生徒会副会長の御門銀英。無表情で何を考えているのかわからない少女が会計の藤林葵。他の二人はいないようで、昨日葵が連れていたリクとかいう魔獣の姿も見えない。

（ああ、ついに裁きの時か……）

彼らに会つた瞬間、魁人の中で一つの覚悟が決まった。もし昨日の記憶だけ消されるのであれば、もうそれはそれで構わない。命を消されるよりはマシだし、魔術師の一人から逃げ切れるとはとても思えなかつた。

終わつた、とでも言つように霸氣がなくなつた魁人に、銀英が不思議そうに眉を顰める。

「いやあ、そんな死人みたいな目で見られても困るなあ。僕ら何もするつもりはないんだけど、それとも魁人はソロモンの悪魔を召喚する生贊にでも使ってほしぐふあつ！？」

何か度の過ぎた冗談でも言おうとしていた様子の銀英の鳩尾に、葵が無表情のまま裏拳ぎみの拳を叩きつけた。

「……あ、あの、葵さん？」「これちょっとツッコミ、げほつ！  
さ、キツすぎない？」

鳩尾を押さえて銀英は苦しそうに問いかけるが、葵は相変わらず表情に変化はなく一言。

「普通」

そんな二人のやり取りに、どうやら本当に自分を捕らえに来たの

ではないと悟り、魁人は少しばかり安堵する。

と、葵を目にした梶川が、興奮にその目を見開いて失礼にも彼女を指差す。

「おああーつ！ あなたは血圧検査のクールビューティ様じゃないですかあーつ！！」

意味不明なことを喚くと、梶川は高速で魁人の前に回り込んで彼女の右手を両手で包むように取る。突然のことだつたが、葵は眉一つ動かさず無表情を貫いていた。

「お、オレ、梶川邦明って言います是非お近づきぶふへえっ！？」

銀英よりも汚い悲鳴を上げて梶川は魁人の隣に転がつた。見ると、葵はスカートなのにも関わらず高い位置で膝蹴りを喰らわした後の体勢だつた。やっぱり不快だつたのだろう。

「か、かひとつクン、こ、このヒホたち……ダレ？」

何か今にも死にそうながらも、どこか嬉しそうにマゾ的な笑みを浮かべている梶川。

「最初に訊けよ」魁人は呆れの溜息を吐き、「アレだ、逃げ出したどこかの誰かさんと違つて、昨日助けてくれた恩人たちですよ」

本当は神代紗耶に助けられたのだが、まあ一緒だろう。結果的に魔力が暴走して襲いかかってきた貝崎を止めたのはこの銀髪男御門銀英なのだから。

「また敬語！？ 魁人は、魁人はやつぱり俺のこと恨んでるんだ畜生おおおおおおおおおつ！！」

復活して立ち上がったかと思えば、梶川は緩んだ涙腺から液体を横に零して何処へと駆け去つてしまつた。

彼の姿が見えなくなつたのを確認し、銀英が楽しそうにニヤけた笑みを浮かべる。

「いやあ、友達の扱いがうまいねえ。僕たちから遠ざけるために、わざとあんな風に言つたんでしょう？」

「あいつが阿呆なだけですよ」

素つ気なく答え、魁人は真剣な表情を作つて銀英とまつすぐ向か

い合ひ。

「で、俺に何の用ですか？」

「警告」

答えは、葵の方から返つてきた。

「へ？」

（警告つて……やっぱ俺を始末しに来たつてことなのか？）

だが、鉄仮面の裏にどんな感情が渦巻いているのかわからない葵はともかく、へらへらと氣の抜け切つた笑みの銀英に敵意や殺意を感じない。それが彼の仮面なのかもしれないが、魔術を使おうとするならその前にこの眼が反応するからわかる。しかし、その様子もない。

「あー、そんな身を固くしなくてもいいよ。そういうことじやないからせ」

魁人の思つていることを理解しているように、銀英は前もってそう断つた。そして緊張の緩んだ顔のまま周囲の人気を確認し、少し声のボリュームを小さくして言葉を続ける。

「まあ、はつきり言つけど、その魔眼はまだ謎なんだよねえ。もしかしたら危険なものかもしねれないし、そうでなかつたとしても、魔脈の影響でどうなるかわからない。僕らの魔術で取つ払えればいいんだけど、君みたいな先天的に根づいている魔力や力を消すなんて所業、それこそ世界でもトップクラスの魔術師だつて骨を何本も折ることになるほど難しいんだ。というか、魔眼を消すなんてもつたいないし」

「……」

言つていることは理解できている。この眼は危険かもしれないけど、しかも取り除くこともできない。葵が言つた警告とは、『魔力が見えるだけだからって安心するな』ということだらつ。

「それで、俺にどうしろと言つんですか？」

「簡単な話さ。生徒会に入ればいい」

「お断りします」

魁人は即答した。

「はは、やっぱそうきたか。生徒会に入れれば、学園に雇われることになるんだけどなあ。学費免除になつたり、学園内に創設された魔術機関の出入りを許可されたり、何より魁人自身の眼を役立てることができるんだけど?」

それにちょっとお給料も出るよー、と銀英はニヤケながら付け足すように耳元で囁いた。

「……無理、ですよ。俺にはあんな場所、荷が重すぎます」  
学費免除と眼を役立てるということにグラリと搖らいだが、昨日の戦闘を思い出して自分でも後ろ向きとわかっている決意を改める。自分の眼のことは自分が一番よくわかつていい、なんてことは言わないし、言えない。ただ、この眼が危険だという不確定要素のために命を投げ出したくはない。

謎だといつても、もう自分が知りたかつた眼の謎は解けているのだ。これ以上魔術なんてものに関わつたら、この先もう一度と今まで生きてきた日常に戻れなくなる気がする。

そうなることが、あるとも知れない眼の危険なんかよりも怖かつた。

「じゃあ、ここでもう一つ警告。僕らは君を引き入れることを諦めないよ。特にうちの会長は、魁人のことを大層お気に召しているようだからさ。どうしても生徒会に入りたくないのなら、常にその眼を全開にしておくことだね」

最後に意味深なことをいい、脅しをかけるように銀英の魔力が高ぶつた。しかしすぐにその高ぶりは收まり、彼は『じゃあね』と言つて立ち去つていく。葵はやはり無表情のまま軽く会釈し、彼の後についていった。

「……何なんだよ、一体。眼を、全開にする?」

約一時間後、その意味は形となつて魁人に襲いかかることになる。

## 二章 炎の退魔師（4）

放課後。

帰り支度を済ませた魁人は 校舎内の廊下を全力疾走していた。他の生徒たちを押しのけ、何かから逃げるようではなく、本当に逃げていた。

走りながら、青く染まつた魔眼で床、壁、天井に目を凝らす。そのところどころに、透明な魔力の輝きが見て取れた。正体は、ルーンの文字。それが廊下のいたるところに白チョークで刻まれている。傍から見れば単なる落書きだが、魁人はこれが魔術だと知っている。

銀英の警告はこのことだらう。ルーンは、生徒会長の月夜詩奈が扱う魔術である。

他の生徒たちは気づいていない。それどころか、だんだんと人気が少なくなっているような気がする。

それに、異常はもう一つあつた。

「ていうか、ここどこだよ！？」

魁人は今、自分がどこを走っているのか把握できていなかつた。確かに校舎内は広く複雑なところもあるが、それでも魁人は方向音痴ではない。まっすぐ昇降口へ向かつたはずなのに、一向に辿り着けない。

わかっていることは、すぐそここの教室が物置的になつていてことと、ここが二階だということだ。知らず知らずの内に、数ある特別棟の中のどこかにでも誘導されたのかもしれない。

そう考えた時、魁人は立ち止まつた。いつの間にか、人気が全くなくなつていたのだ。

シン

静寂が場を支配する。こういう無音時には、ピーという変な電波でも拾つてゐるんじゃないかという音だけが耳の奥で鳴つている。

「あははー。逃げても無駄だよ、魁人くん」

その静寂を破るように、背後からそんな声と靴音が魁人以外誰もいなくなつた廊下に響く。

「月夜……先輩……」

ゆっくりと振り返り、魁人はそこに存在するウェーブの少女の名を呟いた。

「これ、一体何がしたいんですか？」

廊下の床から天井までに刻まれたルーン。ここに来て、その数は見ただけでは計りきれないほど増えていた。

人はいなくなるし、階段を昇ろうが降りようが一向に抜け出せない無限迷路。まるで異界だ。恐らくルーンを一つずつ消していくばこの魔術は解けるかもしれないが、どれだけ量があるのか皆目見当がつかない。一体チョークを何本犠牲にしたらこれだけのものが書けるだろう。

月夜の狙いは、本当はわかっている。

「うん。私はただ、魁人くんに生徒会に入つてもらいたいだけだよ」  
そういうことだ。自分を引き入れるために、ここまでのことを行つてのけるとは、向こうもそれなりに本気なのだろう。  
だが、こっちだつて本気だ。

「それは無理ですって、昨日断つたじゃないですか」

「でもね、魁人くんの魔眼は危険かもしれないの。私たちが近くにいれば、もしもの時の対処ができるから」

「それは銀先輩から聞きました。『危険かもしれない』ってことは『大丈夫かもしれない』ってことです。それに生徒会に入つたところで、四六時中一緒にいるわけじゃないんでしょ？ 先輩は、ただ俺の眼がほしいだけじゃないんですか？」

銀英のもつたない発言はそういう意味なのだろう。それはどうやら当たついたらしく、うつ、と月夜は一瞬だけ怯んだ。

「魁くんは、その眼を役立てたいとかって思わないの？」

「役に立つのならそうしたいですよ。でも、我が身かわいさが優先です」

「魁くんに戦いまで要求しないよう」

「それでも、とばっちりを受けるかもしれない」

あー言えばこー返す魁人に、月夜は子供のように頬を膨らます。そして、おもむろに大きく膨らんだブレザーの胸ポケットから四つ折りにした紙を取り出すと、それを広げ、突きつけるように魁人に見せる。

「あまりこういうのは好きじゃないんだけど、この書類にサインしさえすれば、魁くんはもう生徒会のもの……じゃなくて、仲間になるんだよ」

言い直したのが微妙に気になるが、魁人は冷めた口調ではつきりと告げる。

「サインなんてしませんし、無理やりさせられても生徒会になんて行きませんよ」

「来ざる得なくなるの」

「なつ！？」

(ということは、あれはサインした人を洗脳したり何かしたりする魔術的な何か……)

魁人には『何か』としか表現できないが、知識がないのだから仕様がない。それでも死守すべきことは理解できる。あれにサインをしてはいけない。

魁人は周囲に視線を泳がす。魔眼で見ているため宇宙空間みたいキラキラしている廊下だが、どこかに抜け出せる『穴』があるかもしない。

と、そんな魁人の様子に気づいたのか、月夜が勝ち誇った笑みを口元に浮かべる。

「逃げようとしてもダメよ。この擬似的無限迷宮は、この廊下のあらゆる出入り口の空間を歪めてるから、階段を昇ろうが降りようが、

どこかの教室内に隠れようとしても、ここへ戻つてくる仕組みになつてゐる。この術式を構成しているルーンを全部消せば流石に解けちゃうけど、人を寄せつけないようにするルーンも混ぜてるから、魔術の知識がない魁くんは、結局これ全部消さないといけなくなるわけ」

つまりこの星の数ほどあるルーン全てが同じ術を作つているものではないが、見分ける知識を魁人は持ち合わせていないため結局は全部同じものとして考えるしかないということか。

全てを消そうと思えば時間を食い、その間に月夜に捕まつてサンさせられる。これは絶体絶命とかいうやつではないだろうか。

(いや、待てよ……)

魁人は眼を凝らす。銀英に言われた通り、意識を全開で魔眼に注ぎ込む。

( わかる! )

見えた。魔力の輝きに微妙な強弱がある。それもきっと二種類の強さだ。

『人払い』と『空間歪曲』、知識のない魁人が考へてもどちらが力を喰うか簡単に想像できた。圧倒的に多い、弱い光を放つている方が『人払い』だ。

魁人は月夜を一時無視して全体を見回す。その行動を怪訝に思つた月夜が首を傾げているが、今は気にならない。

廊下の角や教室の入口、ここからでは見えないが、たぶん階段のところにも多く強いルーンが刻まれているだろう。

魁人は月夜に背を向けて走り出した。弱いルーンのところなら抜けられるはずだ。それを探すしかない。

「うーん、諦めてないみたいだけど、私は魁くんに時間をあげるわけにはいかないんだよね」

月夜は胸ポケットに引っかけていた黒い外装のペンを手に取る。どうもそれはペンライトのようで、尻部を押すとペン先が強く光つた。

(何をする気だ？)

魁人は足を止めずに首だけ振り返る。と、彼女はライトグラフィティをするようにペンライトの光で宙空にローンを刻んだ。

瞬間、光線のような何かが文字通り光速で魁人が走る前方の床に着弾する。魁人は思わず足を止めた。床には弾丸や弾痕などはなく、少し焦げたような痕だけが残っている。

「これも、ローンの魔術ですか？」

焦燥の色を隠せないが、しかしどうできるだけ落ち着こうとする表情で魁人は月夜を振り向く。

「うん、そうよ。光の残像でローンを刻む方法。すぐに消えちゃうから持続的な術は使えないけど、その分スピードのある術ができるのよ。こんな風にね」

「！？」

言つと、月夜は再びローンの残像を宙空に刻む。それが三つ、時間差を開けて三つの光弾が飛び、魁人の足を容赦なく貫くことはなかつた。

どれも周りの床を焦がしただけだったのだ。

彼女からは殺氣は感じられない。当てる気は最初からないのであるが、それともただ単に外しただけなのか。前者であることを願いたい。

「あはっ　何かこういうのって映画とかのワンシーンみたいだよねー。ん？　あれ？　ってことは私が悪役！？」

自分がヒーローだとでも思っていたのか、何か少なからずショックを受けている様子の月夜。だがそんな彼女に構つてている暇はない。魁人は辺りを見回し、そして気づく。

(窓側は、全部弱い光だ！)

しかしここは一階といつてもけつこうな高さがある。飛び降りるにはめちゃくちゃ勇気がいるし、無事に着地できるかわからない。が、今はそんな悠長なことを言つてられない。

(じうなつたら、仕方ない！)

「え？」

次に魁人が起こした行動に、月夜は呆けた声を出した。

窓の方に近づいたと思えば、そこに刻んであつたルーンを手で拭き取り、窓を開け、足をかけ、そして

何の躊躇いもなく飛び降りた。

窓の外には都合よく木が生えており、魁人は落下中にその枝をうまく利用して重力加速を減らし、まさに猿のように着地まで無事に決めたのだ。木を植えているため下が土だつたことも救いだつただろう。

着地した魁人は窓から覗き込んでいる月夜を見上げ、軽く手なんか上げてこう言つた。

「残念ですけど、俺には魔術師と渡り合つていける自信も力もありません。だから俺のことは諦めてください」

そして、魁人は走り去つてしまつた。

残された月夜は、開かれた窓枠に体を預けて苦笑する。

「あははー、フランチヤつた。まさか飛び降りるなんて……それにしても、私つたらちょっと魔眼を甘く見てたみたい」

既に遠くなつている影に視線を向け、彼女はもう一つ、呟く。

「自信も力もない……か。あははー、十分魔術師と渡り合つてるじゃない、魁人くん。これはやつぱり、まだ諦めるわけにはいかないわね」

でも今回のはちょっとやり過ぎだったかな、と少し反省する月夜だつた。

……この時、魁人も月夜も気づかなかつた。  
上履きのまま外を駆け去つていく魁人とすれ違つた白衣の男が、何かを企む狂氣めいた笑みを浮かべていたということに。

## 一章 炎の退魔師（5）

那緑市の繁華街はマイザース学園から徒歩十分ほど離れた近場にある。

そのため放課になると、この辺りでは一番規模も生徒数も多いマイザースの制服が目立つてくる。

魁人もその中の一人として風景に溶け込み、夕刻の繁華街を宛てもなく歩いていた。

魁人は学生寮ではなく、学園からほどよく近い安アパートを借りている。理由は寮よりも一人暮らししているという実感が湧くし、寮は相部屋しか開いてなかつたからだ。

しかし、今は帰る気にはなれない。自分を襲ってきた（と判断してもいいだろう）のが月夜だけだつたことを考えると、他のメンツが家で待ち伏せしていないとかぎらない。

だからこの繁華街で適当に時間を潰そうと考へたのだが、よくよく考へれば一人で来たのは初めてだ。ゲーセンとか本屋とかでどうにかするしかないだろう。そういうえば昨日は水曜日。いろいろあって恒例の立ち読みをしてなかつた。まずはコンビニに行こう、そう決める。

「まったく、梶川がいればこんなに考へなくても時間潰せるんだけどなあ。あの魔術師のせいではぐれちまつたし」

「ま、魔術師！？」

「そうそう、魔術師魔術師。あいつらもう何でもありなんじやないのって感じで……！？」

弾かれたように魁人は後ろを振り向く。独り言に返事が返つてくるわけがない。一瞬蹲をすれば梶川かと思つたが、今のは百歩譲つても女性の声だ。

魁人が振り返つたのと同時に、そこにいた少女の肩が驚いたようにビクウと跳ねた。

肩にかかる程度に伸ばした髪、その前髪は緑色の可愛らしいデザインのヘアピンが留めてあり、大人しそうな作りの顔にクリツとした双眸が踊っている。背は百六十センチに届くか届かないかで、自分と同じメイザース学園高等部の制服が彼女の華奢な体を包んでいた。

追っ手かと思いきや、そうではなかつたようだ。振り返つた魁人の顔が余程怖かつたのか、彼女は妙にオドオドとしている。それに、魁人は彼女を知つていた。

「えつと……鈴瀬、さんだつけ？」

「あ、はい」

彼女は魁人のクラスメイトで、梶川に一年の美少女の名前を連ねさせたら必ず上位にくる女子生徒 鈴瀬明穂である。

昨日の朝まで名前も知らず、同じクラスという接点以外何もなく、あいさつすらしたこともない彼女がなぜ自分の後をつけるようにいや、そこは偶然かもしれないが、自分の独り言に言葉を返してきた意味がわからない。

見た感じ彼女は積極的に他人と交流を持つようなタイプではなさうだし、休み時間は大抵自分の机で本を読んでいるイメージしかない。

そんな彼女が、上目遣いで遠慮がちに訊いてくる。

「あ、あの、その、は、羽柴君は、その、ここで何をしてるの、ですか？」

触れれば崩れてしまいそうなほどビクビクしている。恐らく本当は話しかけるつもりはなかつたが、そこに『魔術師』なんて単語が出たから、思わず声を出してしまったのだろう。

生徒会の手先 裏風紀委員か何かかもしれないと思ったが、彼女を見ても魔力はなかつた。だから安心して話ができる。

「俺はまあ、ちょっとブラブラして時間潰してるだけだけど。鈴瀬こそ、こんなところに一人で何してるんだ？」

質問し返すと、彼女は顔を真っ赤に染め、恥ずかしそうにさらりに

俯き加減を増した。

「あの、えつと、本を買いに来たのだけど、わ、私、この辺り初めてで、その、友達もまだいなくて、その……」

「迷子？」

「はうつ！？」

核心を突くと、彼女は面白いくらいに真っ赤にした顔を跳ね上げる。人見知りが激しいというか、極度の上がり症というか、はたまた男性が苦手なのか、その全てに当てはまりそうだ。

魁人は小さく息をつき、あまり刺激しないように言葉をかける。

「それで、何でわざわざこんなチャレンジを？ 行き慣れたどこに行けばよかつたじゃないか」

「えっと、私の知っているところにはなくって、この辺りの方が、大きい本屋さんがあると思ったから……」

なかつたのなら注文すればいいじゃないか、と言おうとしたが、やめた。彼女の性格から考えて、それにはけつこうな、それも校舎二階の窓から飛び降りるくらいの勇気は必要だろう。

ちなみに魁人の足はまだ微妙にヒリヒリしていたりする。

「本は……買えてるみたいだな」

彼女が両手で抱くようにして本屋の袋を持っているため、魁人はそう判断する。中身は、休み時間に呼んでいるような文庫本の類と勝手に想像する。

「はい。でも、その後道がわからなくなつて、彷徨つてたら、羽柴君を見つけて、その、知つてる人だつたから」

「後をつけてきた、と」

「うう……」

何か一人ぼっちになつたウサギのような感じがする鈴瀬。困つているのに失礼かもしれないが、そこがちょっと可愛く思える。少なくとも、あの生意氣な神代紗耶よりは断然。

ふう、と魁人は彼女にわからないように息を吐く。

「鈴瀬の家つてどこ？ もしかして寮？」

「あ、いえ、柿内町、です。あの、私、マンションで一人暮らしだから……。寮は、その、相部屋しかなかつたから、嫌だつたというか……」

柿内町は市内の町だが、繁華街とは逆の方向だ。というか、彼女は『マンション』で自分は『安アパート』。単語を聞くだけでも雲泥の差を感じる。

魁人はやれやれと肩を竦めた。

「わかつた。どうせ時間潰してゐほど暇だし、どこまで送れば帰れる?」

すると、鈴瀬の表情がパツと輝いた。

「あの、できれば学園まで。その、ごめんなさい、私、方向音痴で……」

「あー」

学園までと言われると迷う。そこは自分のアパートよりも、今はまだ近づきたくない場所だ。

「ダメ……ですか?」

「あー、いや、いいよいよ。全然オーケー」

困っている女の子を、このまま放つておくわけにもいかないだろう。学園までといつても、中まで入るわけではないのだ。  
(大丈夫、大丈夫)

そう自分に言い聞かせ、魁人は来た道を戻ることとなつた。

## 一章 炎の退魔師（6）

歩きながら適当に話していると、鈴瀬も次第にオドオドしなくなつてきた。

意外にも、彼女は少年漫画を読んだりテレビゲームをしたりするらしい。一人いる弟の影響だと彼女は言つていた。

とにかく共通の話題ができたことは救いだつた。一緒に歩いていて、話すことがないなんて気まず過ぎる。顔も知らない鈴瀬の弟に感謝する魁人だつた。

街をオレンジ色に染めていた太陽が段々と落ちていく。あと少しで繁華街を抜けたところまで差しかかつたその時

「オイてめえ、昨日貝崎さんと戦り合つたつづうガキだな」

そんな野太い声がかけられた。横で鈴瀬が、ひい、と短く小さな悲鳴を上げている。

振り向くと、そこにはスキンヘッドやドレッドヘアといった、いかにも『不良です』と主張しているような青年たちが五人。殺氣立つた目で魁人を睨めつけていた。

「……いえ、人違ひです」

そんな視線を向けられているにも関わらず、魁人は落ち着いた口調でそう返した。貝崎の名前が出たということは、彼らはあいつの仲間で、自分に報復しに来たといつたところだろう。

魁人が自分でも驚くほど冷静でいるのは、不良たちを見た瞬間に意識を眼に持つていき、全員に魔力がないことを確認して安堵したためだ。

もはや自分と関わる人間全てを、一度この魔眼でスキヤンしておかなければ気が済まなくなつていて。そして魔力のないただの人間だとわかると、見た目や言動がどれだけ恐ろしかろうが、今の魁人

に大した恐怖を植えつけることはできない。

だからといって、魁人は自分が優勢だと勘違いするほど愚かではない。相手は五人、喧嘩となれば、どう頑張ったところで勝ち目はない。

向こうも、『人違ひです』と言つて『はいそですか』と引き下がるほど馬鹿ではなかつた。

「しらばっくれてんじやねえぞゴラア！ こつちはてめえだつてわかつてんだよ。こいつの証言でな！」

スキンヘッドが、一番離れたところから事を見守るようにしている少年を指す。彼は昨日、貝崎を取り巻いていた不良たちの一人だつた。

（くそつ、神代のやつ、一人逃がしてるじゃないか）

だつたらなぜ神代紗耶ではなく自分を狙つてきたのだろうか。そう思つたが、紗耶には勝てないと彼が悟つていたとすれば、この報復行為は領けないこともない。

「テメエのせいだ貝崎さんは全治一ヶ月の大怪我負つて入院してんだよ！ この落とし前、どうつてくれんだあ、ああん？」

スキンヘッドがいかつい顔を近づけてくる。見開いた目から充血した眼球が覗いている。

「それは俺のせいじゃ……いや、言つても無駄か」

この場での選択肢は二つ。戦うか、逃げるかだ。どちらを選ぶかなんて言つまでもなかつたのだが

「おーおーおー、こいついい女連れてやがるぜえ！」

「！？」

ドレッドヘアが魁人の背に隠れるようにして震えていた鈴瀬に目をつけたのだ。彼女はまた短い悲鳴を上げて体を縮める。

（今逃げたら、鈴瀬が……）

彼女はこの容姿だ。捕まつて凌辱されるのは目に見えている。自分で逃げるわけにはいかない。

「ほーら、お嬢さん。このガキはどうせ死ぬから放つといて、俺ら

といいことしよう」

ドレッドが下卑た笑みを浮かべて鈴瀬に伸ばした腕を、魁人は手刀で思いつ切り弾いた。

「ぐあっ！ 痛つてえええーーー！」

「横場さんーーー？」「てめえ、やりやがったなーーー」「ぶつ殺せーーー」「

海に沈めんぞゴラアーーー！」

不良たちが一斉に殺氣立つ。魁人は振り返り、涙目になつている鈴瀬に告げる。

「鈴瀬、お前は先に逃げろーーー！」

「で、でもーーー！」

「俺なら大丈夫。昔空手やつてたことがあるから、こんな奴ら敵じゃねえよ」

もちろん嘘だ。空手の経験はあるにはあるのだが、それは小学生のころに少しかじつただけ。

「おい聞いたか？ 俺らに向かつて『敵じゃねえ』ってよ。笑つてやれ。ハハハハハハ！」

不良たちに笑われるのは無視し、魁人はまだ動こうとしない鈴瀬を突き離すように叫ぶ。

「早くーーー！」

彼女はビクリとし、竦んだ足を必死に動かして走った。そして一度振り返り、

「は、羽柴君！ す、すぐにお巡りさん連れてくるからーーー！」

「ハハハ、逃がすかよ がつーーー！」

追いかけようとした不良の一人を、魁人は足を引っかけて転倒させた。スキンヘッドが首をゴキリと鳴らす。

「てめえ、本当に一人でやる気か？ ハハハ、いい度胸じゃねえか」「しょうがないだろ。俺は他人を傷つけてまで自分を護りたいとは思つてないんだ」

だから、もし生徒会の連中が人質なんか取つてきたら、魁人は生徒会に入らざる得なくなるだろう。が、彼女たちがそんな関係ない

者を巻き込む卑怯な人種ではないことは知っている。

(さて……どうしよう)

周囲からの助けは期待できない。行き交う人々は、全員我関せずを決め込んでいる。中には警察を呼んでくれている人がいるかもしれないが、まだ喧嘩は起こっていないのでその可能性は低い。

「んじゃ、本当にオマワリサンに来てもらっちゃあ困るんで、俺らのパラダイス『RONIURA』まで移動してもらおうか」

流石に公衆の面前で喧嘩を始めるつもりはないらしい。否、喧嘩ではなく一方的なリンチになるのは間違いないのだが……。

「さあ、来やがれ」

逃がさないよう不良たちが周囲を囮む。そしてそのまま近くの路地裏へ移ろうとした瞬間、

突如として現れた黒い影が

一瞬で不良たちを宙に舞い上げた。

それは本当に一瞬の出来事だった。

五人いた不良の内、ドレッドたち三人が現れた黒い影に昏倒させられたのだ。

彼らを倒したのは一人の少女。腰よりも長い艶やかな黒髪に、対照的な肌の色は雪。背は低く、手足は小枝のごとく細い。

そんな華奢な少女 神代紗耶の姿を、昏倒させられた不良たちは確認することもできなかつただろう。

「うわああああっ！？ こ、こいつは昨日の…？」

ただ一人彼女を知っていた不良は、彼女を見ただけで腰を抜かしている。もう一人、この不良たちのリーダー的存在であるスキンヘッドは、次第に何が起つたのか理解し、額に青筋を浮かべて彼女に手を伸ばす。

「てめえ！ 何しやが

しかし、言葉は最後まで出せなかつた。スキンヘッドが伸ばした

ごつい手を紗耶が掴み、グキリ、と嫌な音を立てたかと思えば、次の瞬間には痛みに顔を歪ませたスキンヘッドの顎を思いつ切り蹴り上げていたのだ。スカートの中身が見えていただろうが、この状況でそこに目が行くことは流石になかった。

顎を蹴られてどれだけ脳が揺さぶられたのか知らないが、彼は弓反に宙に浮き、白目を剥き、口から何本か歯を血と一緒に零しながら、背中から地面に叩きつけられて動かなくなる。

魁人にはその瞬間がまるでスローモーションのように見えていた。腰を抜かしていた不良にはさらに遅く感じていたに違いない。彼は紗耶に睨まれると、情けない悲鳴を上げて全力で逃げていった。

魁人は確信する。魔術や武器なしの戦いでも、自分はこの少女には絶対に手も足も出せないと。昨日あのままバトルにならなくて本当によかった。

と、彼女がこちらを向き、その白く細い手で魁人の手を取つてき

た。

まさか自分もやられるのでは、と割と本気で思った魁人だが、どうもそうではなかった。彼女は『来て』と言呟くと、たった今不良たちに連れて行かれそうになつた路地裏へ、魁人の手を引いて駆け入つていつた。

## 一章 炎の退魔師（7）

「放せ！ 何なんだいきなり！」

通路と呼べるか怪しい薄暗い路地裏に連れ込まれた魁人はハツとすると、彼女の手を振り解いて立ち止まつた。

「何よ！ それが恩人に対しての態度？」

紗耶も足を止め、あからさまに不機嫌な顔をして魁人と向き合う。

「タスケテクレテドウモアリガトウゴザイマシタ」

「全然心が籠つてない！」

ほとんど棒読みの魁人に、紗耶の怒りのボルテージが跳ね上がる。フー、と威嚇する猫のように彼女はしばらく魁人を睨んだが、結局手を出そうとはしなかつた。

その彼女が落ち着いたのを認め、今度はちゃんと心を籠めて礼を言つ。

「いや、マジで助かったよ。俺一人じゃ、どうにもならなかつた。ありがとう」

そんな魁人の態度に紗耶は一瞬目を丸くするが、

「フン、別にいいわよ。どうせ今回もついでだつたんだし、月夜先輩たちはあんたを必要としてるみたいだから、死なせちゃまずいかなつて思つただけよ」

魁人の眉根がピクリと動く。

「じゃあ何か？ お前も俺を生徒会に入れようとするのかよ。俺はそんなの『ごめんだぜ』

すると、紗耶は腕を組んで言い返す。

「あたしだって、あんたみたいなゾウリムシを入れたいって思つてないわよ」

「ぞ、ゾウリ……つておい、ちょっとは言い方つてものがあるだろ」

「じゃあ、アオニドロ」

「植物かよ！？」

やつぱり、こいつは何かムカつく。が、助けてもらつたのは事実。ここまで連れて来てくれたのもそうだ。もしあの場に残つていたら、警察が来た時下手すればこちらが加害者と思われることになつたかもしれない。

まあ何にしても、彼女が自分を生徒会に引き込むことに反対していることはわかつた。それだけで彼女はもう敵ではない。寧ろ味方と思つていい。

紗耶は、フン、とそっぽを向くと、持つていた学生カバンを開けて一枚の御札を取り出した。そしてそれを、横に建つ薄汚れたビルの壁に貼りつけ始めた。

「……何やつてんだ？」

疑問に思い、訊ぐ。と、彼女は御札がしつかり貼りつけようつに擦りながら、

「見てわかんないの？ 結界張つてんのよ。これと同じのをあと三ヶ所に貼つて路地裏を囲つてるの。まあもつとも、この護符はあたしんじやなくつて、仕事に必要だつたんで銀英から奪つ……貰つてきたものだけだね」

銀英は商売道具を引つたくられたようである。

「仕事つて……生徒会のか？」

「違うわよ」

瞬間、魁人の魔眼が発動する。護符を貼り終えて立ち上がつた紗耶が、その内の魔力を一気に炎上させたからだ。

高ぶる魔力は、肌にもチクチクと刺すような威圧感を与える。紗耶の左掌に方陣が展開。そこからあの日本刀が取り出された。紗耶は具合を確かめるようにそれを一振りすると、高めた魔力を流し込んで刀身に蒼炎を咲かせ、言つ。

「あたしの本職 退魔師の仕事よ」

## 一章 炎の退魔師（8）

マイザース学園 生徒会室。

「そろそろやつてることかなあ、紗耶ちゃん」

校長室から引っ張ってきたような高価な執務机に向かい、月夜は昼休みに集めた資料の本をめぐりながら物思いにふけるようにそう呟いた。

紗耶の家 神代家は退魔を生業とする魔術師の一族である。だが陰陽道や神道のようなものとは違い、それらを基盤とした独自の術式を持つて魔を狩っているのが彼女たちだ。

神代家が扱うのは、主に五行思想でいう『火』である。五行思想とは、古代中国の自然哲学的思想で、万物は五種類の元素 木・火・土・金・水 から成るという説のことである。

『火』という特性上、神代家の術式は攻撃のためだけに存在する破壊力抜群なものがほとんどで、術者本人の戦闘能力も非常に優れていると聞く。それは紗耶本人を見れば明らかだ。

正直なところ、生徒会の裏仕事は彼女にとって簡単なようで難しいだろう。戦力としては申し分ないが、普通彼女たち退魔師が人を相手にすることは滅多にないし（憑かれている場合は別）、完全滅殺が常なので『殺さず』の加減をする必要がない。従って、悪霊に憑かれているわけでもない人間を、殺さずに抑え込むことには不慣れなのだ。

しかも彼女は、何でも力づくで片づけようとする嫌いがある。常時加減が必要な生徒会の仕事だけだと、ストレスが溜ること間違いない。

だから彼女は、学園にいる間は本業の方で適度にストレスを発散していくつもりだろう。

ガチャリ、と生徒会室のドアがノックもなしに開く。月夜は思考を中断して顔を上げた。

「銀、捕まえてきた」

「いやあ、ははは……」

入ってきたのは藤林葵と、熊並みの体を持つ氷狼の魔獣 リクに襟首を銜えられているという滑稽な姿をした御門銀英だった。彼がまたサボっていたので、葵とリクに捕獲を頼んでいたのだ。

「うん。ありがとう、葵ちゃん。さてさて銀くん。戻ってきたからには副会長らしくビシバシ働いてもらつわよー！」

「会長は人使い荒いなあ。うちにも有給休暇つてのがほしいよ。年に三百六十八日ほど」

「一年越えるわよ。サボってる銀くんが悪いんだから、本当なら三日ほど縛りつけて」

その時、机の端に置いてある電話が鳴った。それは生徒会魔術師のサポートをしている、この学園で魔力が開花した者たち 風紀委員からの連絡用のものである。

月夜は銀英に対する言葉攻めを止めると、受話器をとつて耳に近づけ

表情を僅かに曇らせた。

「何かあつたのかい？」

リクに銜えられたままの銀英が問う。受話器を戻し、月夜は釈然としない様子で口を開く。

「うん、まだよくわからないのだけど、とにかく行ってみるわ。だから一人とも来て」

銀英と葵は同時に頷き、そのまま三人と一匹は生徒会室を後にした。

## 一章 炎の退魔師（9）

薄暗い路地裏に咲く、幻想的な蒼い火の粉を散らす刀を携えし少女。『退魔師』と名乗った彼女がそこに存在するだけで、この路地裏が異世界へと変貌したような錯覚に陥る。

実際に結界を張ったと言っていたから、外とは隔離された空間になつていることは素人の魁人にも何となく理解できていた。

「タイマシ？ タイマシって、『魔』を『退』ぞくつて書くあの退魔師か？」

魁人の疑問というよりは確認といった問いに、紗耶は素っ気なく訊き返す。

「それ以外何があるのよ？」

「いや、『大麻』……とか」

ピキリ、と彼女の額から変な音が聞こえた。そしてヤクザも裸足で逃げ出しそうな形相で睨んできたので、とりあえず頭を下げて謝る魁人。

「えーと、てことは、その刀は退魔師の武器つてやつか？」

「フン、そうよ。これは千年近い歴史を誇る神代家に、代々伝わつてゐる神宝・蒼炎龍牙。強力な火靈が込められた唯一無二の破魔刀であたしはその七代目の『鞘』となつた継承者。ふふ、どう？ 少しはあたしを崇める気になった？」

何か誇らしげに胸を反らす紗耶。

「……七代目の、『サヤ』？ 何だそれ、お前つて偽名だったのか？」

「違うわよ馬鹿！ 蒼炎龍牙は術者の体の一部と同化してんの。あたしの場合は左腕。つまり人間自身が刀の『鞘』になるつてことよ。まあでも、蒼炎龍牙を收められるほどの魔力を持つた人はそうはないわ。だから千年経つても七人しかいないの。わかった？」

わかつたようで、それでもなかつたりする。言葉の意味は理解で

きるが、感覚的にはさっぱりだ。とりあえず彼女は凄いってこと。

「お前、何か今日はやたら親切に教えてくれるな」

昨日は月夜に全部任せていたからかもしれないが、魁人は彼女に

無愛想で不親切なイメージを勝手に抱いていた。

言われて気づいたように、紗耶は顔を背けて言い訳がましく開口する。

「て、敵が出てくるまで暇なだけよ。あたしは退屈が嫌いなの。あと弱虫と銀英と胡麻豆腐も大っ嫌い」

さりげなく個人名称が聞こえたような気もするが、今の状況と彼女の言った『敵』という意味、それらをよくよく噛み締めるとそんなことに突つ込んでいる場合ではなかつた。

「てか待ておい！ 敵つて、ここに何か出るのかよ！？」

「出るわよ？ 魔獣が」

何を今さらというように彼女は首を傾げた。

「な、何でそんなものがこんなところにいるんだよ！」

「魔脈に惹かれるのは何も人間だけじゃないってことよ。あたしは学園の理事長から那緑市に巣食つた魔獣や悪霊の駆除も依頼されてんの」

それが本当なら、彼女は生徒会の仕事だけを学園に雇われたわけじゃないってことか。しかしそんなことは魁人には関係ない。激情に任せ、叫ぶ。

「ふ、ふざけんな！ まだ人間の方がマジじゃないか！ 何で俺を巻き込んだんだ！？」

耳を塞いでその声を凌いでいた紗耶は、苛立たしげに眉を吊り上げる。

「あーもう、うつさい！ 成り行きよ、成り行き。それにあんたが生徒会にとつてどれだけ使えないか見る必要があつたし、あたしもあんたの眼に気になることが……！？」

「 ッ！？」

その時、ゾワッとした薄気味悪い感覚を魁人は覚えた。全身に鳥

肌が立つのを感じる。

紗耶はバツと振り返り、路地裏の奥に視線を這わす。

魁人も見ると、奥の暗がりの地面に黒ペンキでも零したような直径一メートルほどの水溜りができていた。この禍々しい気配は、あの水溜りの中から感じられる。

「来るわ！」

紗耶が蒼炎龍牙を構えた瞬間、水溜りの中から何か巨大なものが飛び出した。

影が物質化したような黒い塊は、五メートルはあるうかという長い胴体に無数の足を生やし、四つの赤い目が鈍く光つてこちらを獲物と認識している。

強烈な嫌悪感と吐き気を催しそうな姿をしたそれは、まさに大百足。

「な、な、な」

魁人は自然と後ずさっていた。魔獣というから葵の使い魔である狼みたいなものを想像していたが、あれは魁人の想像など遙かに凌駕する妖怪じみた姿をしている。

脳内に警戒音が響く。魔術師や魔獣の存在を知らなかつた昨日の朝までの自分なら、間違いなく腰を抜かしてしたことだろう。

そして、これは魁人だから見えているのだが、大百足の全身に透明な光 魔力が血管のように張り巡らされ、その根源には例の炎が確認できる。

「死にたくなければそこを動かないことね」

告げると、紗耶は大百足に向かつて疾走する。それに反応した大百足は、迫りくる紗耶に向かつて口から緑色の粘着質な液体を吐き出した。

だがその液体が何なのか知る前に、紗耶は振り払うように蒼炎龍牙を一閃。蒼い炎で液体を瞬時に蒸発させる。

紗耶は常人離れした脚力で高く跳躍すると、三メートルほどの高さにある大百足の脳天に蒼き炎纏う破魔刀を大上段から叩きつけ

『 キイイイイイイ 』 と百足とは思えない鳴き声を発しながら襲いかかる。

魁人に。

「は？」

ものの凄いスピードで眼前に這い迫る黒長い異形。魔眼のせいでは  
らに輪をかけておぞましく見えるその怪物を前に、魁人は悲鳴の代  
わりに間抜けた声が漏れた。

状況を理解するのに数瞬かかった。逃げねば、と脳が全を開いた時に既に遅いところまで怪物が迫ってきていた。

う選択肢は端から存在していないし、そんなことすれば一秒と持たずにある世行きだ。

自分が持つている唯一のオカルト的な力  
見えるだけのこの眼に何ができるかと問われれば、何もできないと  
即答できる。今回は月夜から逃げた時とはわけが違う。相手が魔術  
ならどこかに『穴』を探せばいいかもしけない。だが、大百足に見  
える魔力は、種も仕掛けもないただ純粹に『死』を与える生ける暴  
力だ。

そんなもの、見えたところで何を看破しろというのか。今の状況をわかりやすく三文字で表現すると、『死んだ』である。

そんなもの、見えたところで何を看破しろというのか。今の状況をわかりやすく三文字で表現すると、『死んだ』である。（くそつ！ 学園に来てから九死イベントが勃発しそぎじやないか畜生！ 死んだら化けて出て俺を巻き込んだあの馬鹿女を呪つてやるツ！！）

退魔師に対し返り討にされることを考慮せず、心でそんな絶叫を上げる涙目の魁人。確実な『死』との距離が残り一メートルを切

大百足が、何か見えない壁にでもぶつかったように弾かれた。

「……、へ？」

呆けた声を上げ、魁人は思い出す。そこは一度、紗耶が結界を作ったための護符を貼った境界線だった。

死にたくなければそこを動かないことね

「そういうことかよ……」

魁人の眼は護符に込められた魔力は見えても、結界までは映さない。だからそこに壁ができていたなんて気づかなかつた。というか、紗耶が普通に出入りできていたことを考えると、効果があるのは魔獸だけなのだろう。

と、仰向けに倒れた魔獸の体を蒼い炎が包む。断末魔の叫びを上げ、炎の中でクネクネと気持ち悪くもがく大百足の横を、燃える退魔の刀 蒼炎龍牙を握った紗耶が歩いてくる。彼女は左掌に方陣を生み、本当に鞘に納めるような動作で蒼炎龍牙を仕舞つた。

(やつた……倒した)

刀を納めた彼女と動かなくなる魔獸を見て安心し、『死ぬかと思つたじゃないか！』と結界を越えて彼女に駆け寄り叫ぼうとする魁人。だがその前に、彼女が不服そうに口を開く。

「やっぱあんた使えないわ。あの不良の不発だつた力は、もしかしたらあんたが相殺したんじゃないかつて思つてたけど、あたしの思ひ過ごしだつたようね」

「な!? ジゃあ、お前、わざと魔獸に俺を襲わせたのかよ!?

「そうよ。この紗耶様が一撃で仕留められないわけないじゃない。」

基本、この手の魔獸は本能的に自分より強いと感じたものとは戦いたがらないから、初手でそう感じさせたら、面白いくらい簡単にあんたの方へ向かつて行つたわ

「て、てめえ……」

沸き上がる怒りに拳を握る魁人。何か、何か一つでもこいつをギヤフンと言わせるものはないだろうか。しかしながら付き合いの短い魁人には紗耶の弱点など思い当たらず、

(今度こいつの弁当の中身を胡麻豆腐でいっぱいにしてやろうが…)

そんな『その後』のことを一切考へていない作戦しか思い浮かばない（そもそも彼女が自作弁当派なのかもわからない）。

と

「！」

魁人の眼が、燃えている大百足の魔力の光が活発になつたのを映す。

「文句があるならどうぞ御自由に」紗耶はまるで気づいていない。

「虫ケラに何を言われようが、この紗耶様は動じな

「避けろ馬鹿！」

紗耶を突き飛ばすようにして魁人は飛んだ。一瞬遅れて大百足の頭が燃えながら一人のいた場所を空振りし、その先の壁に衝突する。どうやらそれが最後の悪足掻きだつたらしく、大百足はその場に崩れて燃え尽きると、黒い灰となつて風に流されるように消えていった。

それを見届け、魁人は安堵の息を吐く。

「ふう、今度こそ終わつたみたいだな ん？」

何か『あわあわ』という声が聞こえて下を見ると、リンゴのよう

に顔を真っ赤にした紗耶が口をパクパクさせていた。傍から見れば、魁人が彼女を押し倒している絵になつてている。

「あ、あの、えーと……」

「さつさと、どけえッ！－！」

「へふあつ－？」

顔面に頭突きをくらいい、魁人は強制的に跳ね除けられた。

## 一章 炎の退魔師（10）

約三十秒後。

「あんた、よく今のわかつたわね」

制服の汚れを叩いた後、紗耶は結界を形成していた護符を剥がしながら感心したようにそう言つた。その向こうで、地面に腰をつけている魁人は片手で鼻を押さえながら答える。

「み、見えたんだよ。その、魔力の動きみたいなのが」

（見えたですって？　こいつの眼……あたしが感知できない魔力まで見えてるの？）

彼が力を発現していらない人間の、あるかどうかわからない魔力まで見えていたことを思い出し、もしかして凄いのでは？　という考えが浮かぶが、すぐに取り消す。こいつは自分の嫌いな弱虫なのだ。だから

「……礼は言わないわよ」

「いや言えよ」

「あたしを押し倒して鼻血出してるやつに礼なんて言いたくない」「ばつ、これはお前の頭突きのせいだらうが！　興奮とピーナッツで鼻血が出ると思つくなよ！」

尻餅をついて鼻を押さえるという滑稽な姿で吠えてくる魁人。しかし紗耶は彼の喚きなど黙殺して結界の護符をカバンに片づける。「まあいいや」魁人は諦めたように息をつき、「ていうか、魔獸つていつも葵先輩の犬とは全然違つたよな。姿はいろんなのがあるとしても、何かこう、纏つっている空氣とかそんなのが自然じやないつていうか」

「当たり前よ。『使い魔』つてのは基本的に邪氣を祓つてるもの。そうしないと主人が喰い殺されることになるから」

「へ、へえ、そう……」

そんな場面でも想像したのか、魁斗の顔色が青くなる。その時、

スカートのポケットから携帯電話の着信音が鳴った。すぐに紗耶は携帯を取る。

月夜詩奈からだつた。

『あつ、紗耶ちゃん？ そつちはもう終わつたかな？』

「はい、たつた今終わりましたよ」

先輩にはしつかり敬語を使う紗耶（銀英は例外）。生徒会には出られないと言つておいたはずだが、一体何の用だらうか。

流石に電話中のマナーは守るらしく、魁人は無言で立ち上がり制服の汚れを落としている。

『あははー、よかつた。じゃあ、すぐに学園まで戻つてほしんだけど、いいかな？』

『？』紗耶は首を傾げ、「別にいいですけど、何かあつたんですか？』

『うん、ちょっと厄介そなことがね。さつき葵ちゃんとリクちゃんを迎えに行かせたから、詳しいことはこっちに来てからで、あつ！ ちょっと銀くんあそこ見て！ 紗耶ちゃんごめん、とにかく一旦切るね プツ』

どこかただ事ではない様子で電話を切つた月夜。一体何が起こつてゐるのだろうか。

すると、電話が切れたタイミングを見計らつたように天から巨大な青い物体が降つてくる。それは紗耶と魁人の間に、トス、というやけに軽い音を立てて着地したと思えば、グルル、と唸り声を発した。魁人が『うわっ』と驚いたような声を発している。

恐らく横のビルの屋上から飛び降りてきたと思われるそれは、熊ほどの体格に白い鬚と青い体毛を持つ狼 リクである。

『紗耶、迎えにきた。乗つて』

その氷狼の魔獸に、白馬の王子様よろしく跨つたボニーテールの少女 藤林葵は、紗耶を視界に捉えるなり抑揚のない口調でそう言つてきた。

『月夜先輩から聞きました。緊急事態みたいですね』

「そう。だから、紗耶も来てほしい」

紗耶は素直に頷いた。葵はとても緊急事態とは思えないほど無表情だが、とにかく月夜の電話からして由々しき事態なのは確かだろう。と

「お、おい、何かあつたのかよ」

一人置いてけぼりにされていた弱虫、もとい魁人が訊いてくる。

紗耶は無視しようとしたが、葵が彼にも言葉を振った。

「魁人も来る？」

その言葉に、紗耶はリクに跨りながらチラリと魁人の反応を伺う。一緒に来てほしいなんて砂粒ほども思ってないが、もしかしたら役に立つのではと考えている自分が……、

（あーあーあー！ あんなやつが一緒にいても邪魔になるだけ。さつきのは偶然！ 何考えてんのよあたしは！）

そんな彼女の願い通り（？）、魁人は表情を曇らし、それを見せないよう僅かに俯いた。

「いや、いいです。俺は、ただの一般人ですから」

仮にも先程自分を助けた魁人の言い草に、紗耶は自分でもわからぬままどこかムカツとした気持ちになつた。

「ホント、ただの一般人だから……」

まるで自分にも言い聞かせるように、魁人はもう一度同じことを呟いた。

## 一章 炎の退魔師（11）

既に夜の帳が下りた中、魁人と別れた紗耶がリクに乗つて連れてこられた場所は、メイザース学園の中心を分断するようにして存在する常緑樹や桜の樹が繁つた公園。その中にある全部で四面のテニスコートだつた。

広くて設備が充実し、森と芝生の広場に囲まれ、都会の中心なのに大自然の中にあるような感覚が双方のテニス部員だけでなく一般生徒にも人気で、中等部テニス部・高等部テニス部・一般開放と日によつてローテーションしている場所である。今日は高等部のテニス部が使用していただはずだつた。

何でも、練習中だつたテニス部員が次々と倒れたそうだ。現時点では六人の男女が原因不明の昏睡状態ということで公園の入口まで運ばれ、そこで救急車に乗せられているところだつた。

表向きはまだ原因不明だが、月夜たち生徒会魔術師は彼らを診て一つの可能性を出している。それは

「呪術？」

紗耶は月夜詩奈から聞かされた可能性を鸚鵡返しに呟いた。

今は自分たちと忙しなく何らかの作業を行つてゐる風紀委員が数人いるだけで、関係のない人間は全て追い払つてゐる。よつて、本来の氷狼の姿をしたリクを見て驚いてゐる者はいない。

「呪術つて、類感呪術とかですか？」

類感呪術とは、『形の似た物は互いに影響を及ぼし合つ』という概念の下で呪法をかける魔術である。簡単な例としては丑の刻参り藁人形に五寸釘を打つアレだ。

月夜はこめかみを指で押さえながら困つたように『うん』と唸り、

「そこはまだよくわかつてないんだよ。でも呪術なのは十中八九、間違いないわね。その呪術の種類がわかれれば解く方法も見つかると

は思つんだけぢ……あはは、私は専門外だからあまり詳しくないのよね

苦笑する月夜を見て、紗耶はふと思つ。

「……あいつだったら、何か見えたりしたのかな？」

思わず呟いてから、ハッとする。自分はあの弱虫に何を期待しているというのか。

（さつきだつてそうよ。せつかく葵先輩が誘つてくれたのに、気になつたんならついて来いつてのつて違うそうじやない！だから何考えてんのよ、あたしは…）

なぜか、先程から妙に意識してしまつ。

（あいつが凄いのはあの眼だけ。そうあの眼だけよ…）

妄想を振り払うように首を振る。本来なら、ただ見えるだけで何の攻撃的な力もない魔眼に紗耶が興味を持つことはないのだが、今はそう自分に言い聞かせないと何か落ち着かない。

「詩奈、銀は？」

リクの頭を撫でながら葵が周囲を見回して訊く。そういうえば、来た時から銀英の姿が見えない。電話から聞こえた感じでは月夜の傍にいたような気もしたが。

「そうそう、それがね

「

月夜が手がかりでも見つけていようつた笑みを浮かべたその瞬間、

森の方から軽快な爆発音が響き渡つた。

## 一章 炎の退魔師（1-2）

「いやあ、参ったね、これ」  
鬱葱と茂る森の中、綺麗に整備されている石畳の道に立ち、生徒会副会長・御門銀英はとても参っているとは思えない気の抜けた声でそう言つた。

学園内にあるとはいへ、日が落ちると肝試しをするには絶好の雰囲気を醸し出しているこの森だが、生徒会の魔術師であり、陰陽道に連なつた護符を専門に扱う符術師の銀英にはいつも通りの爽やか且つへらへらとした笑みを浮かべる余裕が当然あつた。

「まさか犯人っぽい人追いかけ、こんなことになるとはねえ」

月夜が紗耶と連絡を取つていた時、白衣のようなものを纏つた明らかな部外者が隠れるようにして自分たちを覗き見ていたのだ。月夜に発見されると逃げ出したので追いかけたが、あまり予想しない事態になつてしまつた。

突然、無数の影が白衣を護るように草陰から飛び出し、一瞬で銀英を包囲してしまつたのだ。

最初、反射的に発破符を起爆して影の一部を吹き飛ばしたのだが、それで数が減つたとは思えなかつた。パツと見、まだ二十はいる。

両手に三枚ずつの護符を構え、何か合図的なものがあれば一斉に襲いかかってきそうな緊迫状態の周囲を眼球運動だけで見回す。

ギチギチと蠢く影の正体は、小型犬ほどの大きさをした蟲だつた。五本の触覚に、硬そうな外皮に包まれた平たく紡錘形の体は灰色。眼は潰れているのでは思つほどの小さなレンズが一対あるだけで、本当に見えているのかは本人に訊かねばわかるまい。毛の生えたバッタのような足が六本あることから昆虫に部類してもよさそうだが、果たしてこれほどの大ささをした昆虫が日本、いや世界にいるだろうか？

「？、いや蚩？……違つた、白っぽいから蚩かな？」

そう、まるで風をベースにそれらを全部混ぜ合わせたような姿。一体一体から強烈な呪力を感じる。魔獣、のような感じもするが、恐らく違う。

「呪い……蟲……もしかすると !?」

閃きかけたその時、大風の一匹が緊迫状態に耐えかねたように飛びかってきた。普通の風ではありえない、蚤のように後先を考えていらない天に向かっての大跳躍。こんな大きさになると、貼りつけたら血を吸われるどころの話ではないだろう。

しかもその一匹を引き金に、他の大風たちも一斉に飛び跳ねる。だが、銀英の表情から余裕が消えることはなかつた。構えていた六枚の発破符 火の属性が練り込まれた爆発を起こす護符 を投擲。そして素早く宙空で九字を切り、両手で印を結ぶ。

「 発ツ！」

六枚の護符が、空中で同時に起爆した。六つの花火が、巻き込んだ大風の破片を辺りに汚らしく撒き散らす。だが当然、この一撃だけで全てを迎撃できるわけがない。銀英は空きのできた後方にバックステップしてその場を離れると、再び九字を切る。

ドカドカと、先程まで銀英がいた場所に大風たちが降り積もるよう着地。氣色悪く蠢く小山が完成する。

「蟲だから火に弱いかなあつて思うんだけど、それは紗耶の専売特許だからねえ。僕は僕で、一番得意な土行符を使わしてもらうさ」

ニイ、と唇を斜に構える銀英。いつの間に設置したのか、大風が山となつている場所を中心に十数枚の護符がばら撒かれていた。

銀英が発破符とはまた違つた印を結ぶ。

瞬間、全ての符から岩塊が出現。内側に向かつて隆起するそれが、山積みになつてギチギチと軋めく大風を押し潰し、または串刺しにした。

「殲滅は完了。でも、逃げられちゃつたな。会長に怒られないとい

「いけど」

銀英は困ったように肩を竦めると、石塊に押し潰されて全滅している大風の群れに近づく。

蟲の死骸からは血といつよりは体液といつたものが飛び散り、ただでさえ吐きそうなほどグロテクスな絵に拍車をかけている。

銀英はそんなことなど全く気にする様子もなくその場にしゃがむと、転がっているビニの部分ともわからない破片を観察するように眺めた。

そして、ふうん、と呟くと満足げに唇を緩めて立ち上がり、白衣が逃げていったと思われる通路の先に視線を這わす。

(こつちつて確か……)

「うわっ！？ 何よこれ……蟲塚？ 汚いわね。ていうか悪趣味。あたしはこれの掃除なんて絶対やらないわよ！」

そんな銀英の思考を妨害するかのような声が背中から聞こえた。振り向くと、生徒会の女性陣があからさまな嫌悪感を全身で表現しているところだった（若干一名を除く）。

## 一章 炎の退魔師（13）

「それで銀くん、犯人は？」

「逃げられた」

当然のような月夜の質問に、銀英は悪びれることなく笑顔で答えたものだった。

「はあ？ 何やつてんのよあんた！ サボりすぎて腕鈍つてんじゃないの？ このまま副会長の座をあたしか葵先輩カリクに譲ることね」

「……、ドジ」

リクの背中をさすりながら、葵も一言罵倒した。

「たははは……いやあ、何か耳が痛いなあ。こんなのが邪魔してきたんだからしようがない、つてことにしてくれない？」

銀英は未だピクピクと動いている部分もある大虱の蟲塚を指差してそう言った。しかしそんなことは紗耶には言い訳にしか聞こえない。

「だつたら結界くらい張りなさいよ。人が集まつたら面倒になるじゃない」

「誰かさんが僕の結界符を強奪してなかつたらそうしたさ」

「……あ」

そこは言い返されて口籠る紗耶。まさか四枚で全部だとは思わなかつた。一枚は今も所持しているが、残り三ヶ所に貼つたものは後で回収しなければならない。もつとも、今は結界として成り立つていないから放つておいても別に構わないが。

「ねえ、銀くん。この気持ち悪い虫の魔獸は何な ひやつ！？」

月夜が岩塊に組み込まれている蟲の死骸に近づいて問あうとしたその瞬間、ピュツと白い体液が狙いましたかのように飛び、彼女は可愛い悲鳴を上げて間一髪それを避ける。

「会長、それは魔獸じゃなくて『蠱』だよ」

そんな月夜を面白がるように見ながら、銀英はさうりと答えた。

紗耶が首を傾げる。

「口？　ああ、『蠱毒』のこと？　あのいろんな毒虫を共食いさせて、生き残ったのを呪術に使うってやつ？」

蠱毒を生み出す蠱術とは、犬神や厭魅と並んで日本古来より存在する原始的な呪術である。共食いは皿などの上で行わせ、生き残った蠱は磨り潰して主に毒として使われていたらしい。まさに読んで字のごとくである。もつとも、毒以外にも蠱に相手を喰わせたり、取り憑かせて呪殺したりなどの用途がある。共食いさせるのも蜘蛛や蛇、蛇のような毒虫だけではなく、犬や狼などの様々な動物まで使っていたとか。

「でも待つて、類感呪術ならまだしも、蠱術なんて素人にできるわけないじゃない？」

「素人じやないとすれば？」

「！　まさか本物の呪術師がいるつて言つのー？」

魔脈の影響で魔力を得、それによって偶然呪いが成功したような素人ではなく、本物の呪術師。蠱術は生贊による『生』のエネルギーを扱う分、生半可なことでは扱えないのだ。しかし、ここにその蠱が確かに在る以上、本物がいることで得心がいく。

「えっと、とりあえず銀くん、みんなの呪いを解く方法はわかるの話の論点を変更し、月夜が訊く。

「そうだねえ、今のところ方法は一つかな。まず『毒を以て毒を制す』。つまり相反する蠱を使って呪いを中和する方法さ。もつとも、これはどこかの巫蠱術を扱ってる術者を捜すところから始めないといけないし、薬となる蠱も一から作らないといけないからそれはもう時間かかるよ。でき上るころには呪殺は完了してるんじゃない？」

他人事のように平氣で最悪の事態を口にする銀英。しかし、その辺のことも考慮しておかねば呪いをかけられた者を救うことはできないということだろう。

「呪殺か……うちのテニス部ってそんなに恨まれることしてんの?」  
世間の評判は普通。強くもないし弱くもない。どこか別の学校にいた呪術師が試合で負けた腹いせにってわけでもないだろう。となるとやはり、内部犯か。

紗耶の疑問に月夜が唸る。

「うーん、顧問い合わせりが凄かつたって聞いてるわね。でもそれ一年くらい前のことだから。それよりも、もう一つの方法は?」

「術者 蟲主を殺す。もしくは見つけ出して呪いを解かせる。単純明快なやり方だね。僕はこっちの方を推選するよ」

「ていうか、もうそれしかないじゃない」

呆れ気味に、紗耶。まあ、確かにその方が簡単でわかりやすいし、自分好みではあるのだが。

「蟲主は銀が逃がした。どうやって捜す?」

痛いところを突いてきた葵に、ははは、と苦笑する銀英。そんな彼を横目で睨み、紗耶は一つ自信満々に提案する。

「リクに臭いを追わせるってのはどうですか? ほら、一応魔犬に部類するわけだし」

「臭いの元がない」

「これらは?」

紗耶はその辺に散らばっている蟲の残骸を指す。葵が手近に転がっている破片の臭いをリクに嗅がせるが、クーン、とう情けない鳴き声が返ってきた。

「無理。臭いが分散してわからないだつて」

「葵先輩、リクの言葉わかるんですか?」

「コクリ、と頷く葵。流石は魔獣使い。リンクしているのは魔力だけじゃなく心もか、と紗耶は感心する。

「呪いを受けた人間にミョウガの根を煎じて飲ませると、呪いも解けて術者も判明万々歳……って言われることもあるけど、そんな上手い方法が本当にあるわけないからねえ」

陰陽道をかじっている分、一番こじらう呪術に詳しいはずの銀英

がこの様子では、彼からいい案は出ないだろう。

「あーもう！ 逃がしたのは銀英なんだから徹夜しても捜してきなさいよ。」

え

「えーって言うな！ じゃあもう切腹よ、切腹！ 介錯はあたしがやるから安心しなさい！」

噛みつきやつな勢いで紗

やはり変わらない。

案を口にする。

その時の紗耶は、嫌そうな、しかしそうした方がいいような、そんな微妙な顔をしていた。

ちなみに、銀英が倒した蠱 大虱の死骸の山は、結局のところ紗耶が全部燃やして処分することになった。

間章(2)

薄暗い研究室の扉に焼れかかり、白衣の呪術師は息を荒げていた。

で  
る

「生徒会。学園に雇われた魔術師。くく、あくまで私の邪魔をするつもりですねえ。しかあーし、そおーはさせませんよう。障害は多い方が楽しめるというもの。一人ずつ私の可愛い靈の餌にしましょうかあ。それとも、呪術師らしく呪つてあげましょうかねえ」

と少し思考し、彼は閃いたよう」「やりと口元を歪める。

「いや……そおーですねえ。舞台が整い次第、彼らも私の実験へ組み込んであげるというのも面白そうです。魔術師を使つ……、なるほど、これは新鮮ですねえ」

る。

「となると、あの神代の御令嬢が一番使えそーですねえ」と言つて、彼は白衣を翻して研究室の奥へ消えていった。

## 三章 呪術的実験（1）

登校してから朝のHRが始まるまでの時間は、どのクラスもだいたい似たような雰囲気だ。

入学してから五日目ともなれば、気の合う者たちで構成されるグループの一つや二つ、三つや四つは当たり前のようにできる。しかしまだ初番、構成メンバーは中学の時から仲のよかつた者たちが中心となっている。まあ、それも次第に変化していくことだろう。とにかくこの朝の時間は、挨拶を済ませた仲間同士で集まり、昨日見たテレビ番組のことや、新作ゲームの話、土田の過ごし方など、それぞれがくだらないと思える話題で賑わっていた。

その中で一番多く話題として取り上げられていることは 昨日学園のテニス部で起こった謎の昏睡事件だった。何でも、練習中に部員が六人も同時に倒れたのだが、彼らのどこにも外傷はなく、ガス等が漏れていたようなこともなかつたと聞いている。食中毒でもなければ、新手のウイルスの線も薄い。なるほど、『謎』だ。

しかし魁人には、そのことに関して少し思い当たる節があつたりする。

（魔術……なのか？）

他に考えられない。昨日の様子から、生徒会の魔術師も動いているようだし。

「呪いだつて、絶対に呪いだつて！ テニス部に恨みを持った金髪巨乳美女が毎晩部員の名前が書かれた藁人形に釘をカンカンとだな」魁人の机にしな垂れかかるようにして、梶川邦明が妙に恍惚とした感じで言つてきた。魔脈のせいで魔術に興味関心のある者が集まっているためか、梶川と同じような噂をしているグループもちらほら見かけてはいる。だが

「何で金髪巨乳美女なんだよ？」

「オレの妄想」

「お前、やっぱ変った趣味してるな」

「いやいや、オレは美女であれば変な電波拾つてようがゴキブリつて美味しいよねって言われようが返り血まみれで絶叫しながら包丁振り回してようがオールオッケーだ！」

「……せめて最後のはやめとけよ」

魁人は額に手をあて、これ以上ないほどわかりやすく溜息をついた。ちなみに梶川との関係はこの通り回復済みである。

「あ、あの、羽柴君」

そんな時、横から遠慮がち且つ消え入りそうな声がかけられた。額から手を外して顔を向ける。と、そこには鈴瀬明穂の姿が。

「ああ、鈴瀬か……つて、どうしたんだその隈！？」

魁人は目を丸くする。彼女の目の下には、それはもうペンか何かで描いたような陰影ができていたのだ。しかも足元がおぼつかないようにふらふらし、今すぐ倒れてしまいそうな危うい感じがする。「その、私、羽柴君が心配で……。あの後、酷いことされたんじやないかって思つたら、その、一睡もできなくて……」

「あつ……」

そういえば彼女のことすっかり忘れていた。様子からして一応家には帰れたようだが、遅くまで街を駆け回り、必死に自分のことを搜している姿が一瞬目に浮かんだ（妄想だが）。

「いや、まあいろいろあつたけど……。ほら、この通り俺は無傷だからさ。心配してくれてありがとう、鈴瀬」

軽く腕を回しながら柔らかく微笑んで言うと、彼女は『よかつた』と安堵の表情を見せる。心なしか、少し隈が薄くなつたような気がした。と

「ちょいちょいちょいちょい待つてくださいよ魁人君！」焦ったように、梶川。「アナタはオレを差し置いて我がアイドル・鈴瀬さんと昨日一体どんなステキイベントを繰り広げたつて言つんでもぐつ！？」

飛びかかりそうな勢いだつた梶川は魁人に頭部を掴まれ机に叩き

伏せられた。

「今の話聞いて何でそう思えるんだ、お前は。その耳はアレか？」

「取り外し可能なレプリカか？」

「ふあ（だ）、ふあつふえふふへはんほふあはほはほうはんふあほん（だつて鈴瀬さんと仲よさそつなんだもん）」

「机とキスしてた状態で喋っても何言つてるかわからないぞ、梶川」  
そんな風に押さえつけているのは自分なのだけれど。

「悪い、鈴瀬。こいつの言動は一々気にしなくていいから」

「う、うん。でも、梶川君、そろそろ……」

見ると、梶川がギブギブというように机を叩き始めていたので、魁人は仕方なく押さえつけていた手を放してやつた。すると梶川は、ふはあ、と平泳ぎの息継ぎをするように顔を起こす。

「あー、いや、まあ、うん。これでオレが鈴瀬さんとお付き合いできるかもしれない繋がりができるたつてわけだ。グッジョブ、魁人！」  
「えつと、ごめんなさい」

「フランタ！？」

丁寧に頭を下げて断られた梶川は、がはつ、と起き上がったばかりなのに再び机に突つ伏した。彼の何かが崩壊したような幻聴まで聞こえた気がする。とりあえず、哀れみの視線を送りつつ心の中で揉んでやつた。

これも梶川にとつていい教訓になるのでは、と適当に思いながら、魁人は鈴瀬に顔を向ける。自分なんかを心配したせいだ一睡もしていい彼女を、どうにか休ませてあげるべきだ。

「鈴瀬、なんだつたら保険室で寝てこいよ。先生には俺から言つといで」

しかし、魁人の言葉は最後まで紡がれることはなかつた。  
言葉の途中で鈴瀬がふらついたと思つと、

彼女は全身の力が抜けたようにゆくぐりと倒れた。

最初は、安心して眠気が最頂点にまで達したのかも、と思った。だが、違った。倒れた彼女は苦しそうに胸を押されて喘ぎ、次第にその声も弱くなつて、消えた。胸を押させていた手は力なく垂れ、表情はまるで悪夢でも見ているような、そんな苦渋に満ちたものだつた。

不幸中の幸いは、倒れたところが机と机の間だつたということくらいか。

「おい鈴瀬！ 鈴瀬！」

梶川も含めた教室中の誰もが呆然としている中、一早く我に返つて状況を理解した魁人が彼女を抱き起こす。その際、ガシャーン、と椅子が倒れたが、気にしている場合ではない。

彼女の呼吸は死人のように静かだが、止まつてゐるわけではない。胸も僅かに上下してゐるし、心臓がまだ力強く鼓動してゐるのを抱き起こした手を通じて感じる。

やがて誰かが悲鳴に近い声を上げるが、魁人の耳には入らない。

「お、おい魁人、鈴瀬さん、一体どうしたんだよ」

梶川が不安げに覗き込んでくる。どうしたのかなんて、こっちが聞きたいくらいだ。

### テニス部の昏睡事件

そのフレーズが脳裏を過る。まさかと思い、意識を眼に持つていく。

魁人の眼は魔眼。その力は視界の範囲内に在るあらゆる魔力を映すこと　と今は納得してゐる。この眼で鈴瀬を見れば、あるいは何かがわかるかもしねりない。

「　ツ！？」

見たくなかった。見えなければいいと思っていた。そうだったら、彼女は魔術とは関係ない、過労か何かで倒れたのだろうと考えることができた。

でも、見えてしまつた。昨日までは彼女になかつた光

魔力を。

場所は彼女が押さえていた胸の辺り。形は、豆電球でも炎でもない。これは

(蜘蛛?)

種類で言えば、ハエトリグモに近い形状と大きさをした光だ。それに

(これ、動いている)

揺らめきでも明滅でもなく、まるで生きているように八本の足が動作している。

とり憑かれている。よくわからないが、もしかするとこれはそういうものなのかもしれない。

魔獣か悪霊に偶然とり憑かれたのかもしれないが、もしかこれが誰かが作為的にやつたもので、テニス部の昏睡事件も同じだとすれば……。

(許せるかよ!)

くそっ、と毒づき、魁人は拳を強く握った。知り合って間もないが、鈴瀬は確かに本気で、それも一睡もできなかつたほど、自分のことを心配してくれていた。そんな優しい彼女が一体何をした? 何もしていなはずだ。

怒りが湧く。自分の命は惜しいが、知り合いをこんなにされて黙つていられるほど、魁人はチキン野郎ではない。犯人がいるならば、必ずぶん殴つてやる!

たとえ相手が、魔術師だったとしても……。

その時、バン、と教室のドアが勢いよく開かれた。

教室中の視線が集う。入ってきた少女は、腰よりも長い綺麗な黒髪を揺らしながら、まっすぐ魁人たちの方へと歩み寄る。

少女は昏睡した鈴瀬を一瞥すると、忌々しげに舌打ちし、

「あんた、その子を連れて生徒会室まで来なさい」

彼女は 生徒会魔術師である神代紗耶は、凜とした声でそう言

つ  
て  
き  
た。

## 三章 呪術的実験（2）

第一校舎最上階 生徒会室。

「彼女で七人目。昨日の六人と合わせたら、これで十三人」室内に敷かれた布団の上に鈴瀬を寝かせ、生徒会長・月夜詩奈は表情を曇らしてそう言つた。

月夜の言葉通り、鈴瀬の隣には六人の男女が同じように寝かされていた。彼らも鈴瀬と同じように苦しそうな表情をしている。

保健室ではなくここに連れてきたのは、やはり魔術が関わっているからだ。教室一個分の広さはある生徒会室だが、流石に七人も寝かせていては周囲の家具もあるだけに狭く感じる。

その家具に関してなのだが、魁人は入室した途端に自分の目を疑つていた。家具そのものや配置が、前に一度入った時とは大幅に違つっていたからだ。

資料や本が詰め込まれている棚、エアコンや天井の電灯はそのままだが、長机だったものは大きめのガラステーブルに代わり、それを挟むようにパイプ椅子がグレーのソファーベッドへと進化し、フローリングの床には豪奢な絨毯が敷かれ、奥にあるどこかの社長室から奪つてきたような執務机の上には最新型のデスクトップパソコンまで設置されている。ついでに小さめの冷蔵庫らしき白い物体も隅つこに見つけた。

そして、棚と棚の間にある扉の向こうがシャワー室だということを考えると そんな普通に人が住めそうな環境は、魁人のボロアパートなんかよりも百倍は至れり尽くせりである。普段ならツッコミの一つも入れたいところだが、今はそんな心の余裕はない。

「本当にこれ、呪いだつたのか」

鈴瀬を抱いでここまで来る途中、紗耶からだいたいの事情は聞かされている。蟲術とか言われてもピンとこないが、蟲を使った呪いだということは理解した。寝かされている他の生徒を魔眼で確認し、

鈴瀬の中にもいたあの蜘蛛がレントゲン写真のよう見えたから間違いない。

「そう」

月夜が魁人と対面するソファーに腰を下ろす。彼女の隣には銀英が、魁人の隣には紗耶が座り、行き詰った会議のような重たい空気を作り出している。ちなみに葵は他に倒れた者がいないカリクと共に見回りをしているらしい。

「これは歴とした呪術。昨日の時点ではテニス部だけだつたんだけど、この通り、今朝からは無差別になつてきてるみたいな」

ここに運ばれた被害者は、野球部の朝練中だつた者や、美術室でコンクールの絵を仕上げていた者、鈴瀬に至つては何の部活や同好会にも属していない。学年も性別もバラバラ。無理やり共通点を挙げるとすれば、この学園の生徒ということくらいだ。もつとも、学園外で同じようなことが起こつていないともかぎらないが……。

「だつたら、さつさとその呪いの犯人を捕まえてくださいよ」

「それができたらとつぶにやつてるわよ。それに今回の相手は素人じゃなくつて本物の呪術師。一筋縄じやいかないのよ」

自分がスカートを穿いていることなど全く気にせず紗耶は足を組み、ついでに腕も組んで不機嫌そうにそう言った。彼女が不機嫌なのは、自分が目を光らせていたにも関わらず、さらに七人も被害者を出してしまつたからだ、と銀英がこつそり教えてくれた。

「まだ犯人もわかつてないから、危険だからつて生徒たちを帰すわけにもいかないのよね」

月夜は困つたように頬に手をやる。彼女の言つてることはわかる。帰した生徒の中に犯人の呪術師がいるかもしれないということだろう。

「犯人の特徴は白衣を着た恐らく男。でもそんな情報、着替えられたら意味なくなるからねえ」

「？ 銀先輩、何でそんなことわかつてるんですか？」

魁人の疑問には月夜が答える。

「昨日、ちょっと犯人と接触したのよ。暗かったから顔はわからなかつたんだけどね。白衣を着てるだけじゃ、生徒か先生かもわからないし」

「銀英が逃がすからこんな面倒なことになつたのよ  
「いやもうそこは引つ張らないでほしいな」

紗耶に睨まれ苦笑する銀英。昨日紗耶と別れてから何があつたのか、大まかにわかつたような気がする。

魁人は呪いを受けた生徒たちを見やる。

「どうにかその……『蠱』ってやつを取り除けないんですか？」  
できることならとつぐにやってくる、そんなことはわかつているのだが、本当に苦しそうな皆の顔を見ていると、訊かずにはいられなかつた。

「残念だけど、犯人を捕まえないことには無理なのよ

試行錯誤したが、もうそれしか方法がない。月夜の表情は、そう語つていた。

「無差別に人を呪う犯人の目的は何なんですか？」

「それも捕まえてみないことにはわからないさ」銀英も真剣な顔で、「まあ、魔脈の上に建つてあるこの学園をものにしたい魔術師は少なくないから、外部の線も考えた方がいいかもね。可能性は薄いけど」

学園を この土地を奪うには、十人ちょっとを呪つたくらいでは意味がない。それこそ百人単位で呪いをかけないことに、学園の上層部は重い腰を上げないだろう。銀英は、そのようなことを後で付け足した。

「鈴瀬らは、もじづつとのままだつたら、その、どうなるんですか？」

「死ぬわね」

それには紗耶が、非情とも言えるほど素つ気なく答えた。

「お前、何で平気な顔でそんなこと言えるんだよ」

「フン、あんただつて頭ではわかつてゐるんでしょ？ はつきり言つ

てあげたんだから文句言わないでよ

「だからってそんなストレートに言つことでも

」

「あーもうー うつさい！ すぐに殺さないってことはそれなりに意味があるんじゃないの？ まあ、術者が悪趣味なだけかもしけないけど」

「はいはいー一人とも落ち着いて

月夜が宥めるように言つた時、ガチャリ、と廊下側のドアが開いて葵が戻ってきた。彼女の腕には、愛らしい子犬の姿のリクがぬいぐるみのように抱かれている。

「詩奈、他に倒れた生徒はいない

彼女はドアを閉める前に、月夜に向かつてそう報告する。

「そう。ありがとう、葵ちゃん。でも蟲が潜伏してるだけって可能性もあるから、まだ気をつけとかないとね」

月夜は彼女を労うように優しく微笑んだが、同時にまだ安心できないことも告げた。と、葵が今気づいたように無表情な顔を魁人に向ける。

「魁人、来てる

「わう！」

葵が呟くと、リクがいやいやをするように体を捻り、彼女の腕から抜け出して尻尾を振りながらてこてこと魁人に駆け寄る。瞬間、魁人の脳裏に初めてリクと会つた時の出来事がフラッシュバックされる。

「うわっ！ こいつまたか！？」

反射的に身を引いてしまい、横に座っていた紗耶と背中が密着する。

「ちょ、ちょっと寄らないでよ！」

「おやおやあ、天下の紗耶お嬢様がお顔赤らめてらつしゃいますねえ。いやあ、顔から火が出るとはこのことかな？ もしかして紗耶は魁人のことを

からかうように言つてきた銀英に、紗耶はさらに顔を真っ赤にし

て手近にあつたクッショוןをプロ野球選手もビックリの剛速球で投げた。だが、彼はそれを首だけの動きでいとも簡単にヒヨイツとかわしてしまつ。クッショൺは彼の背後にあつた棚にぶつかり、一体どんな力で投げたのか、軽快な音を立てて破裂した。羽毛が飛び散る。

「紗耶ちゃん……」

舌打ちする紗耶に月夜が笑顔を向ける。その何か黒いオーラのようなものが具現化して見えそうな優しげで怖い笑みに、紗耶の肩がビクウツと跳ねた。

「後で、掃除してね」

「……は、はい」

あの紗耶が縮こまつてゐるのは滑稽だつたが、魁人はもつとおかしな状態になつていた。

飛びかかつてじゅれつく子犬に押し倒されている、そんな情けない絵である。

「『』、これちょっとどうにかしてくださいよー。噛む、噛まれる!？」

「大丈夫。リク、気に入つた相手は噛まない」

葵がそう言つうと、銀英が面白いものでも見るよう二ヤけた笑みを浮かべて立ち上がり、『そいつ』と相槌を打ちながら魁人たちの方に回つてくる。

「僕みたいに懐かれると、リクつてけつこう可愛いんだよねえ。

ほーらリク、お手「手がぶりつ!

「痛い!?

「銀は嫌いだから噛む

「ええつ!?

そこに呪いをかけられた生徒たちが並んでいるというのに、魔術師らにはまるで緊張感というものがない。いや、初めの重たい空気を考えると、そうでもないのかもしれないが……。

(「どうかこいつら、生徒なんてどうでもいいって思つてるんじやないだろうな？」)

魁人がそんな風に思つた時、月夜がタイミングを見計らつたように咳払いをした。

「……えっと、話を戻すけど、いいかな？」

言つた刹那、場の空気が深刻モードに戻つた。……気がする。魁人にじやれかかっていたリクは再び葵に抱えられ、銀英は苦笑しながら歯形のできた手を押さえて月夜の隣に戻る。魁人が慌てて姿勢を正すと、心なしか少し頬を紅潮させた紗耶が魁人との距離を一つ空けて座り直した。

皆の様子に月夜は、うん、と頷き、小さく息を吐いてから言葉を紡ぐ。

「まずはやっぱり、犯人の呪術師を見つけないとにはどうにもならないってことは確かね。一応、風紀委員にも調べてもらつてはいるんだけど、相手は本物。私たちが動いてもすぐには見つからないわ。でも、ゆっくり搜している時間もない。彼らは刻一刻と魁くんが見た蜘蛛の蠱に蝕まれているわけだから」

手掛かりとなるものは非常に少ない。学園の秩序を魔術的に守る魔術師がこの場に四人もいるというのに、月夜の言葉はまるで絶望的なもののように聞こえる。

しかし、月夜は諦めてはいなかつた。彼女の瞳に宿る光　　言つ

なれば、希望の光が彼女には見えている。

そしてその光は、魁人に向けられた。

「だからお願ひ、魁人くん！　君の眼なら、呪術師を見分けられると思うの。生徒会に入つてとまでは言わないから、今回だけは力を貸してほしいの！」

月夜は頼んだ。

何の魔術も使はず、体術もよくて人並みで、魔力を見ることだけが取り柄の自分に

下がった頭の上で両手を合わせ、ただ純粋に生徒たちを助けたいと

いう気持ちを表し、その生徒会長は、一般生徒たる自分に頼み込んだ。

「……何ですか」

そんな彼女、いや、彼女たちを見て、魁人は思った。

「何で先輩たちは、学園や生徒のためにそこまでするんですか？命を落とすことになるかもしれないんですよ？」

月夜は顔を上げると、につこりと、微笑んだ。

「魁くんは、知ってる？ 私たち魔術師はね、一度交わした契約は絶対に破らないの。悪魔や精霊とかとの契約を破るってことは、術者が死ぬということ。それは人間でも同じ。命まではなくならいいかもしないけど、魔術師としての信頼は確実に失うわ。それにね、魁くん」

彼女は僅かに首を傾げ、どこかからかいの混じった口調で言つてくる。

「君はもしかして、私がただ雇われただけで生徒会長なんてやってると思つてるのかな？」

「…」

魁人は微かに目を見開く。そこにある天使のように優しげな微笑みは、とても『魔』術師なんて呼ばれる存在だとは思えなかつた。  
「銀くんも葵ちゃんも紗耶ちゃんも、それぞれに理由があつて生徒会に身を置いてるんだよ」

魁人は他の三人を一人ずつ見ていく。銀英は爽やかに微笑み、葵は無表情、紗耶に至つては目を反らされたが、誰も月夜の言葉を否定しようとはしなかつた。

一度目を閉じ、ゆっくりと息を吐いて心を落ち着ける。そして月夜をまつすぐ見、答える。

「わかりました。今回は、俺も他人事ではありませんし。それに

「

魁人はチラッと苦しそうに眠っている鈴瀬を見る。まだ彼女とは知り合つて間もない浅い関係だが、自分を心配してくれるような人のために動くことに理由なんていらない。

「俺は最初から、そのつもりだったんですから」

そう告げた瞬間、月夜はパアッと満面の笑顔を咲かせた。

「ありがとう、魁くん！ よかつたよ、もしも断られたりなんかしたら」

「あの紙に無理やりサインさせて俺を洗脳するつもりですか？」

魁人は昨日強引な手を使ってきた月夜のことを思い出す。だが、

彼女はすまなさそうに、

「あ、あははー。『ごめんね、あれはただの契約書なの』

「は？ でも、来ざる得なくなるって……」

「正式な生徒会のメンバーになれば、魁くんを強制連行することもできるから」

……今この状態、もし自分が協力する気などなかつたら強制連行になるのではないか。そう考えたりもしたが、現実は自分の意志で来ているわけだからいいか。

「えーと、まあ、とりあえず、俺の眼を使って犯人の呪術師を捜すということはわかりますが、高等部の生徒だけでも千人近くいるのに、どうやって捜すんですか？」

「あははー、そこをどうにかするのが私たち生徒会の仕事だよ、月夜は、どこか含んだような笑みを浮かべてそう言った。

### 二章 呪術的実験（3）

作戦会議が終わり、指示を受けた魁人と紗耶が去った後の生徒会室。

「それにしても、あれだけ僕たちと関わるのを嫌がってたのに、よく協力する気になったものだよねえ」

銀英はガラステーブルに護符を並べながら、月夜に向かつてそう言つた。その月夜は、蠱術の被害者たちの周りに『治癒』のローンが彫り込まれた金属板を囲うように並べている最中だつた。薄い円盤状のそれは『ブラックテアート』と呼ばれ、ローンを彫る他には中世のドイツなどで通貨として発行されていた物である。

だが、呪いに対して治癒魔術など無意味に等しい。月夜だつてそんなことは知つてゐるが、何もしないよりはやつた方がいいとのことだ。

ちなみに彼らだつて紛れもなく学園の生徒。それぞれの教室では滞りなく授業が行われてゐるのだが、生徒会は仕事を優先させるために授業をパスすることができたりする。

月夜は治癒の作業を続けながら、唇の端を少し緩めた。

「魁くんは、基本的には友達想いの優しい子なんだよ

「おやおや、会長も魁人にホの字かい？」

からかうように、銀英。しかし月夜は少しも動じず、

「あははー、そうだね。少なくとも銀くんよりはねー」

「あれ？ もしかして僕みんなから嫌われてない？」

リクに噛まれた右手はまだ歯形が残つて痛いし、葵からは氷の視線で見られるし（彼女はそれが常だが）、紗耶は……言うまでもなく。

「そんなことないよ。銀くんは頼りになる私たちの仲間だもん。サボらなければもっと素敵」

彼女に逆にからかわれた感がして、銀英は苦笑しつつ頭を搔いた。

月夜詩奈。

恐らく学園で一番生徒や教師の身を案じているだろう魔術師。魔術は大勢の人を救うために在る、それが彼女の考え方だ。だから、彼女の術式には人を直接傷つけるようなものは少ない。

どんな経緯でそんな考えを持ったのかは知らないが、目の前に呪いで倒れた生徒たちがいても、彼女はこの通り普段通りの対応ができる気丈さも備えている。

(本当は、すぐにでも呪術師を捜しに駆け出したいんだろうけどね)無駄と知りつつ行っている治癒術は、生徒たちの苦しみを少しでも和らげられるようにという願いの優しさだ。

とても真似はできないな、と無駄なことはしない主義の銀英は思う。

「さて、今回は僕もサボってはいられないねえ」

テーブルの上に並んだ何十枚という護符一枚一枚に魔力を込めながら、銀英は呟いた。そして対面のソファーでリクと戯れている葵を見やる。彼女の氷のような無表情は、あのよう自分を使い魔であるリクと過ごす時間だけ少し雪解けを見せている。

「葵、僕の作業が終わったら少し付き合ってくれないかい？ ちょっと気になることがあるんだ」

葵はリクとの戯れを止め、瞬間に元に戻った顔を銀英に向ける。

「どこまで？」

彼女の膝の上にいる子犬リクも、同じことを聞くよつこ『わん』と鳴く。

「西の旧校舎。今思えば、あの白衣はそっちの方に逃げていったから」

言つと、葵は『わかった』の一言だけで頷いた。

## 二章 呪術的実験（4）

『昼休み。大勢の生徒や先生たちが、高等部で最も広い空間のある第一体育館へと集っていた。

「臨時集会か。なるほど、これならみんな集まるよな」

そういうことである。月夜が理事長に掛け合い、事情を説明して協力を仰いだのだ。この集会自体は言わばカモフラージュだが、来週ある創立者際のことやダイレクトにテニス部のことなど、意外と話すネタはあつたらしい。

魁人と紗耶は、体育館の陰に隠れて集まつてくる人々を覗き見るよつに眺めていた。

『昼休みに生徒会で集会を開くから、魁くんは集まつた人たちの中に呪術師がいないか魔眼で見てほしいの。一応紗耶ちゃんは、戦えない魁くんのボディーガードね』

それが月夜から魁人と紗耶に与えられた指示である。この第一体育館は、校舎が立ち並ぶ区域とはグラウンドを挟んで存在しているため通路が一本しかない。つまり全ての生徒や先生はグラウンドを横切るが、その通路を通らないことには体育館に辿り着けないのだ。この位置からならその両方が見える。まあ、わざわざ靴を履き替えてグラウンドを横切るようなやつはないが……。

「なあ、神代」

集まつてくる人々に視線を這わしながら、魁人は後ろの紗耶に話しかける。

「『紗耶』でいいわよ、面倒くさい」

「いや、でも……まあいいや」

同年代の女の子を下の名前で呼び捨てにするのは少々抵抗があつたりするが、彼女の場合は何かどうでもいい感じがしてきた。

「じゃあ紗耶、本当にこうやって見てるだけで、犯人が見つかるのか？」

「さあね。はむ……あ、美味しい。あなたのその眼、高まつた魔力が『炎』に見えるんでしょ？　あむ……呪術師が人を呪つてる以上、常時魔力を高めてないといけないから、んぐ……見かけた時に一発でわかるはずよ。ま、あたしらが感知できればてつとり早いんだけど、むぐ……小さすぎてわかんないからあんたに頼むことになつたのよ、仕方なく」

「そんなもんなんのか。　　つて、こんな時に食うなよ！　何だそ

の袋いいっぱいのフルーツサンドは！」

「うつさいわね。昼ごはんよ、昼ごはん。好きなの、フルーツサンド。それよりこっち向かない！　今見逃した中に犯人がいたらどうすんのよ！」

「どうか、見逃している人間なんてけつこういる。先生も含めれば千人以上の人間が一つの通路を使ってやつて来るのだ。全員見ろというのは無理がある。この魔眼は、人間の体に宿る魔力は見えても、透視能力ではないので障害物越しには見えない。そしてその障害物には、人間も当然含まれる。つまり、一人の人間に魔力が見えても、その向こうにいる人間には見えないということだ（どうも衣服は人間の一部と同じ扱いになつているらしい）。

呪術師探しの本番は、整列が終わつて集会が始まつた後である。無論、犯人が来ないという可能性もあるが、その場合はいなかつた人間を調べた後（事務や警備の人たちはこれまでの休み時間に調査済み）、中等部でも同じことをすることになる。

それでも、こうやって学園の人々を見ていると魔脈の上という環境を実感してしまつ。小さな魔力の光はここからでは離れていて見えないが、何かの能力が発現していそうなほどの魔力を持ついる人をちらほら見かける。だが今のところ、魔術師レベルの者はいない。

「本当にこの中にいるのかよ。この学園つて、生徒や先生以外にも

魔術師がいるんだろ?』

メイザース学園の内部

主に森の中

には、結界で隠された

魔術機関がある。そこには多くの魔術師がいるらしいのだが、彼らは犯人ではないという。なぜなら、彼らは魔脈を研究するため『学園』と協力関係にあるらしく、『学園』を害するメリットがないからだ。

『学園』から様々な支援を受ける代わりに、魔術師たちは『学園』を護る。そんな何かの生物の共存関係みたいなものが成立しているわけだが、当の魔術師たちは施設に引き籠っているため外のことにはほとんど無関心。そこで彼らは子供を入学させ、『雇う』という形で魔力の開花した者や引き寄せられる魔獣から『学園』を護ることになった。それが、生徒会魔術師である。

そんなことを月夜から聞いているが、正直、魁人は信用していない。

「月夜先輩が言つてたでしょ？ 私たち魔術師は、はむ……契約は絶対に破らないわ」

そうは言つが、魁人の知る魔術師は生徒会の四人だけなのだ。チラツと紗耶を見る。あれだけあつたフルーツサンドはもうなくなりかけていた。食べている最中は幸せそうな顔をしていて、魔術師でも何でもない普通の、年相応かそれ以下の少女として変わりない。

「ちょっと訊いていいか？」  
「何？」

紗耶は最後の一欠片を口に放り込み、惜しむようによく味わつてから飲み込む。それを待つてから、魁人は訊ねた。

「最初から思つてたんだけど、何で生徒会なんだ？ 魔術師を雇うにしても、他の組織とか作ればいいじゃないか。普通の生徒の中に生徒会に入りたいやつだつているだろ」と答えると、紗耶は呆れたように長い溜息をついてから億劫そうに答える。

「まったく、あんたってホント何にもわかつてないわね。いい？ 例えはその辺の素人が生徒会長になつたとする。で、そいつは魔脈によつて魔力が開花、変な特殊能力を發揮し始めるわけ。魔力を完璧に制御できないから力に溺れてしまい、私利私欲で力を振り回す。生徒会長である自分の方針に少しでも賛同できない人を皆殺しにするとかね」

「……」

「だから、学園の中核である生徒会には魔力をきちんと制御できる人間がいた方がいいの」

わかつた？ と紗耶は確認してくるが、まだ魁人には得心がいかない点がある。

「生徒会選挙とかはないんだろう？ 勝手に決められるって、それで他の生徒が納得するのか？」

「納得しないなら、させるだけよ。魔術的にね」

さらりと危なそうなことを口にする紗耶。一体どんなことをするのだろう。例の『忘却部屋』とかいう部屋で記憶を弄られるとか……。ここは聞かないが勝ちだと判断する魁人である。

「まあ、この学園に生徒会選挙がないのはパンフレットにも書いてあることよ。『生徒会の後継者は生徒会が決める』って感じになつてたと思うけど？」

「あー……」

そういうえば、梶川にパンフレットを見せてもらつた時、隅の方にそんなことが書かれてあつたような、なかつたような。当時の魁人は生徒会になど微塵も興味がなかつたので、その辺の記憶は吹けば消し飛ぶほど薄い。

「もう一つ訊いていいか？ 『つづく』とはあまり訊くべきじゃないかもしないけど……」

「何よ？ スリーサイズなら教えないわよ」

紗耶のスリーサイズ。梶川に言えば飛びつくだろうなあ、というくだらない妄想は一瞬で地平線の彼方まで吹き飛ばす。

「いやそうじゃねえよ。えーと、月夜先輩が『ただ雇われているだけじゃない』って言つてたけど、紗耶も何か理由あつて生徒会に入つてるんだよな。それって

「仕事よ」

「……は？」

即答した紗耶の言葉に、魁人は耳を疑つた。

「あたしは『ただ雇われてるだけ』って言つたの」「え、じゃあ何での時そう言わなかつたんだ？」

「そんなこと言える空氣じやなかつたでしょ。あたしだつて空氣は読めるわよ。それに」

「それに？」

「『仕事』つてのが、あたしにとつて重要な理由になんのよ。契約を破れば魔術師の信用を失うつて言つてたでしょ。あたしたち退魔師は、人の世に仇なす『魔』を滅することが使命。だからこそ、その『信用』が大事なの」

紗耶の言つたことは、わからないでもない。除霊とかそういう仕事を、普通の人には見えない分、依頼主との強い信頼関係が必要……つてことなのだろう。

「そんなことよりもあんた、話してばっかだけじやんと見てんの？」

「見てるよ。魔力がある人はちらほら見かけるから、魔術師レベルで炎に見えてるやつがいればすぐに教えるつて」

まあ、全員を見れているわけではないのだけれど。

「フン、ならいいのよ。でもそろそろみんな揃うだらうから、あたしたちも中に入つて」「

「そこで何をしていいのです？」

ゾワ、と背後から人のことを讃め回すような男の声がかけられた。紗耶の肩に何かが置かれる。それは、骨の上に直接皮を被せたよ

うな、細くゴツゴツした真っ白い手だった。

魁人も紗耶も、声の主から離れるように、しかしその姿を逸早く視界に捉えようとするように、振り返りながら前に飛んだ。

体育館裏の、雑草が生え放題になつてゐる中にいたのは、着なれていない感じで紺色のスーツを纏つてゐる男。三十代前半くらいだろうが、白髪と黒髪と丁度半分ずつの割合になつた頭髪に、頬骨の目立つ細い輪郭。縁なしの眼鏡をかけ、漂白剤でも使つてゐるのではという真っ白な肌は、痩せこけた体と合わせてまるで骸骨が服を着て立つてゐるようである。

そんな彼の名を、魁人は思い出した。

「巳堂、先生」

### 二章 呪術的実験（5）

第一体育館の舞台裏から、月夜は整列しつつある生徒たちを眺めていた。

貴重な昼休みの時間を割かれたことに文句を垂れる生徒もいれば、学園のアイドル的存在でもある生徒会長が登場するのを、コンサートに集まつたファンさながらに首を長くして待つてゐる者が多数。そんな彼らの熱烈なアピールを鎮圧するために、教師たちが忙しく静かにするよう働きかけている。

（紗耶ちゃんと魁人くん、まだ来てないみたい）

集会が始まれば魁人が上から魔眼で呪術師を捜す。その際に気配を隠蔽し、『そこに誰もいない』と一般人に誤認させるルーンを刻んだお守りを手渡すことになっているのだが、一向に一人は姿を現さない。

（もうすぐ始まるのに、どうしたのかな？）

銀英か葵に搜索を頼みたいが、彼らは気になることがあると言つて高等部の旧校舎へ出向いたまま。集会が始まるまでには戻ると言つていたが、彼らにも何かあつたのだろうか。

急激に不安になる月夜。

そしてそれは解消されることなく、カモフラージュのはずだった集会は始まりを迎える。

## 二章 呪術的実験（6）

巳堂遊作。  
みとうゆうさく

生物教諭で、魁人たちのクラスの理科総合も担当している先生である。まだ一度しか授業を受けておらず、その授業も今一ぱつとしないものだったが、彼の骸骨みたいな容姿から一部の生徒に『スケルトン先生』なんてあだ名されていたのによく覚えている。

「気づかなかつた」

ぼそり、と忌々しげに紗耶が呟く。確かに、彼が近づいてくる気配はまるでなかつた。話をしていたから、ではない。自分はともかく、話しながらも常に気を張り巡らしていた紗耶は気づくはずだ。

「一人とも、集会が始まるというのにこんなところにいはいけませんよ」

言つてていることは教師のものだ。だが、その麻薬中毒者を思わせる顔には怖氣を誘う薄い笑みが貼りついていた。

「一年三組の、神代紗耶さんと……えーと……あれ？ すみませんね、あなたの方は名前が出てきません」

いや、そんな笑みなどどうでもいい。魁人の眼が、魔力を『見る』青い魔眼が、眼前の男にあるものを映し出していた。反射的に身構え、叫ぶ。

「紗耶！ こいつだ！」

瞬間、紗耶は左掌から退魔の日本刀 蒼炎龍牙を抜き出した。

魔力が込められた刀は刀身に蒼く美しい炎を咲かせる。人体から燃える日本刀が現れるという、普通なら腰を抜かしかねないどんでも事態なのにも関わらず、巳堂は眉を僅かに歪めるだけで驚いた様子はない。

紗耶は田の前の『敵』から田を離さず、確認するように問いかける。

「見えたの？」

「ああ、バツチリ」

巴堂に見えた魔力の光。紗耶と比べると少し小さめに見えるが、高まつた状態である『炎』だった。といつても、光球の上部辺りがチロチロと燃えているくらいの微妙なものである。

本当にそれだけで決めつけるのはどうかと思っていたが、そんなことよりもずっと決定的なものが魁人には見えていた。

「氣をつける、紗耶。こいつの体、蟲だらけだ」

そう、背広やズボンはあるか靴の中まで、全身の肌が見えない部分には夥しい数の小さな光点が蠢いていたのだ。それはよくよく見ると蜘蛛の形をしており、鈴瀬たち被害者の中にいたものと同類と思われる。

と、巴堂が狂ったように笑い出した。

「くくく、はははははははは！ どおーしてでしょ？ どおりしてバレてしまつたんでしょうがねえ。生徒会にはまだ白衣くらいしか情報はないーいと思ってたんですが、これはこれは不思議です」

妙なところで妙に間を伸ばす、妙な喋り方。はつきり言つて気持ち悪い。

「教える義理はないわよ。呪術師のあんたさえ見つけ出せればこっちのもの。まさかそつちから接触してくるとは思わなかつたわ」

紗耶は蒼炎龍牙を突きつけ、口元をニヤリと好戦的な笑みで歪める。

「さあ、このあたしに燃やされるか、大人しく生徒会に投降するか、

五秒で決めなさい」

一、と紗耶はカウントを始める。完全に上からの言葉だ。普段先生にもしつかり敬語は使つてている紗耶だが、相手を『敵』と認識した途端、『敬い』という文字を奈落の底へと放り捨てたかのように言葉遣いが変わつている。

だが、巴堂はそんな紗耶のことなど歯牙にもかけず、後ろで構えている魁人を眼鏡の奥の目を細めて觀察するように見詰め、紗耶の

カウントが『二』になつたのと同時に口を開く。

「あー、なるほど。その眼、魔眼ですか。何の魔眼かは知りませんが、とにかく私のことを見破るような力なのですね」

「五……、火線術式展開」

刹那、紗耶は突きつけていた刀の先端から何の躊躇いもなく炎を火炎放射器のごとく射出。蒼く細い炎の線が空中にペンを走らせるように描かれ、複雑な軌道を変えて曲がり、くねり、繋がり、余裕にもポケットに手を入れていた巳堂の周囲を取り囲む。まるで炎の檻のようだが、奇妙な紋様にも見えるそれは、魁人には立体的な魔法陣のように思えた。

そしてそれは正解だった。

「燃える！」

紗耶が短く唱えるように言つた瞬間、立体陣の内側で蒼い爆発が起ころ。凄まじい爆光だが、音は少なく、煙については一切上がっていない。代わりに全てを灰燼と化すような炎が燃え上がり、立体陣の内部に煉獄を作り出している。

幻想的な蒼い劫火。力強く燃えるそれを、魁人は美しいと感じた。が

「いやちよつとやり過ぎじゃないのかこれ！？」

あの炎に包まれれば灰、もしくは溶解しているかもしれない現実に、魁人は冷や汗をかいだ。術者を殺すことも皆の呪いを解く方法だと聞いているが、それはあくまで最後の手段のはずだ。

「大丈夫よ」

しかし紗耶は、そんな魁人に落ち着いた声でそう告げる。炎で作られた立体陣と、その中の煉獄がまるで夢か幻だったように消え失せる。

「ツ！？」

そこには灰となつた ではなく、スーツに焦げ目一つすらついていない巳堂の姿が。彼はポケットに手を突っ込んだまま、余裕の笑みさえ浮かべていた。

「あいつ、咄嗟に靈で結界を張つたっぽいから。ムカつくわね」

紗耶は苛立たしげに巳堂を睨めつける。

「む、蟲でそんなこともできるのか？」

「できたんだからできるんでしょう。それよりあいつの靈はどうなつてゐる？」

言われ、魁人は巳堂を『見る』。

「……減つてゐる。それも、ほとんど」

巳堂のスーツの内側に無数と言えるほどいたはずの蜘蛛が、もう両手で数えられるくらいしか残つていない。視線を下に向けると、巳堂の周囲の地面には黒い灰みたいなものが積もつていた。何の魔力も見えないが、あれはたぶん巳堂の盾となつた蜘蛛たちの残骸。「くくく、酷いですねえ、死ぬかと思いましたよ」巳堂はしゃあしゃあと、「ですが、彼の神代家に伝わる破魔の炎、蒼炎を間近で見られたのはラッキーと言うべきですかねえ。私の可愛い子供たちをほとんど生贊にする羽目になりましたが」

「つまり、これであんたを護るものはいなくなつたわけね」紗耶の言つ通りだが、何かがおかしい。なぜ、巳堂はあんなにも余裕に笑つていられる。

(まだ何かを、隠しているのか?)

魁人は慎重に魔眼で巳堂を注視する。誰かの魔力が高まつてゐるかぎり、この魔眼は意識を集中しなくてもオートで発動しつぱなしになる。それは普段意識して『見る』よりもずっと楽だった。

「今度こそ観念することね。あんたが何でこんなことしてるのかは、後でゆづくり聞いてあげるから」

「そおーは行きませんよ。私にはまだまだやり残した実験がありますからねえ」

巳堂は数歩後ずさり、スーツのポケットから手を出した。そこにはビール瓶のような褐色をした小瓶が握られており、その口の部分には御札のように文字が書かれた紙が巻かれている。

「何をする気?」

「くくく、もう少しだけあなたと遊んであげますよ」

巳堂は言つと、瓶に巻かれていた紙を破るように剥がす。次の瞬間、瓶の口から紫色の靄みたいなものが噴き上がつた。瘴気のように嫌な気配を感じさせるそれが巳堂と紗耶の間に収束したかと思えば、一匹の蟲の形を　否、蟲そのものへと変化した。

「なつ！？」

魁人は驚愕する。その蟲は、率直に言つと『蝠蠅』だった。緑色の全体的に細長い体に六本の足、その内一本は先端の赤みがかつた鎌状になっている。

ただ普通の『カマキリ』と違つのは、体長が軽く人の倍はあるとということだ。

「これは私の蟲を保存しておく瓶です。言つなれば、『蟲瓶』です  
かねえ」

白慢げに巳堂は中身の抜けた小瓶を振る。

「で？」

しかし、魔獸じみた体型と全身から強い呪力を漂わせている大蝠蠅を見ても、紗耶は微塵も動搖しない。彼女は退魔師だ。魁人とは違い、あの程度の異形は見慣れていることだろう。よく考えれば、昨日の百足の方が何倍もおぞましい姿だった。

「遊ぶとか言つてるけど、そんなんじゃ十秒も持たないわよー！」

紗耶は跳躍するように駆けた。対する大蝠蠅は、黒髪を躍らせて迫りくる少女を逆三角形の頭部についた大きな複眼で捉え、その刺々しい大鎌を彼女に向かつて振り下ろす。普通のサイズならばチクリと痛いだけだが、あれはそんな程度では済まない。まともに受けねば、紗耶の華奢な体など本物の刃で斬られるように引き裂かれるだろう。

だが、舞うように一閃された蒼炎龍牙の刃が、その大鎌を足<sup>アシ</sup>だと斬り落とした。

切斷面に破魔の炎が引火し、苦しそうにのたうつ大蝠蠅。それでも紗耶を討ち取ろうともう片方の大鎌を振る。が、それも蒼炎の刃

で受け止められ、まるで綿豆腐でも切つていゆかのよつて競り合つことすら許されず切断された。

両鎌を失つた大蠍螂だが、それを嘆くような暇など『えられない。紗耶がすぐさま体を捻り、蒼く閃いた刃によつて大蠍螂の胴体は真つ一ひに斬り捨てられた。

さらに一瞬にして蒼炎が大蠍螂の体を侵食し尽くし、完全滅殺の完了を告げる。

「 ほう 」

自分の蠱が簡単に滅ぼされたといつのに、口堂はそんな感心した声を洩らした。

「さあーすがは神代家の御令嬢。私の自信作をこよーもあつさりと倒してしまつとはあ。くくく、いやはや素晴らしいですねえ」

パチパチと手なんか叩いてみせる口堂。紗耶は苛立しげに眉を吊り上げ、

「遊びが終わりなら、今度はあなたの番よ。あなたはあたしたち生徒会を嘲笑うように次々と呪いをかけていつた。つまりあたしたちの『信用』に泥を塗つたつてことよ。いつちは『殺さず』つてことになつてるけど、ハ割くらい殺しても口が利けたら別にいいよね?」  
自分たちのプライドのために戦つてゐるよう聞こえるが、本当は紗耶だつて被害者たちのことを気にかけていた。人を守ることこそが、退魔師なのだから。

「そおーですねえ。こちらも、ここであなたを殺すわけにはこまませんからねえ」

「は? 何言つてんのよ。あんたまだあたしに勝てる氣でいるわけ?

「くくく、忘れたのですか? 私が、一度あなたに触れているといつ」とを

「え?」

ドクン

キヨトンとしたのも束の間、心臓発作でも起こしたような痛みが紗耶を襲つた。

「…………ああ……」

痛みに呻き、顔を引き攣らせる。思わず左手で胸を齧掴みにするように押さえ、倒れそうになった身体は、蒼炎龍牙を地面に突き刺してどうにか持ち堪える。

「紗耶！？」

彼女の異常に氣づいた魁人が叫んでいるが、遠くを走っている救急車のサイレンのようにぼんやりとしか聞こえない。

視界が揺らぐ。体が、全身の細胞が溶けているかのように熱い。そう、まるで、毒でも盛られたみたいに……。

「あんた…………まさか…………」

滝のように冷や汗をかきながら、紗耶は苦しげな表情で口堂を睨む。嫌らしく唇の端を吊り上げる口堂に、紗耶の予想は確信に変わる。

だがその瞬間、張り裂けるような痛みが全身に進つた。

「…………ツ！？」

悲鳴は声にならず、プツリ、と糸が切れた人形のよう、紗耶は力なくその場に崩れた。

### 三章 呪術的実験（7）

「紗耶ッ！！」

蒼炎龍牙を地面に突き刺したまま、膝を折つて崩れる紗耶に魁人は駆け寄つた。

彼女が意識を失つたことで魔力の供給が断ち切られ、蒼炎龍牙の炎は陽炎のように揺らめきながら消えていく。

紗耶の体を仰向けに抱き起こす。予想通りというか、彼女の状態は呪いを受けた被害者たちと同じだった。表情は苦渋に歪み、呼吸は小さい。体内には、彼女の弱つた魔力の光に紛れるように、例の蜘蛛が寄生している。

ただその蜘蛛は、他よりも強く光つていて、一回りほど大きかつたが。

「彼女には特別強力な蠱を憑けました。魔術師相手ではそのくらいでないと効果は期待できませんからねえ。その蠱が取り憑いた者はまず強烈な痛みが」

魁人は紗耶をそつと寝かせると、楽しそうに解説なんかしている巳堂を睨む。そしてゆっくりと立ち上がって対峙し、淒みを利かせて言い放つ。

「今すぐ取れよ！」

巳堂の解説がピタリと止まるが、別段魁人に臆したわけではない。くつくつと嗤い、両腕を小さくクロスさせてバツテンを作る。

「ノウですよノウ！ 駄目ですねえ。彼女は私の実験の要になるんですよ、羽柴魁人君。ええ、思い出しました。思い出しましたとも。最近生徒会と関わりを持ってきたあなたの名前をねえ

「……実験つて、何のことだ？」

「実験は実験ですよ。あなたも組み込むことが今決定しました。光榮に思いなさい。魔眼持ち、いやいや面白い」

巳堂の態度に魁人は拳を握る。相手は魔術師。それも蟲を使った

呪術師。今は紗耶のおかげでその蟲はほとんど消滅しているが、さつきの大蠍蟻のような隠し玉をまだ所持していないともかぎらない。魁人の魔眼には、瓶の中までは映らなかつたのだ。

紗耶はこの通り動けない。この状況において、選択肢の最前線に来るのは『逃げる』だ。しかし、巴堂は紗耶を狙つてゐるようなことを言つていた。すぐそこの体育館には味方がいる。だが、呼びに行くにしても、この場を離れなければならない。紗耶を置いてはいけないし、彼女を担いでだとすぐに捕まってしまう。

「ホント、何で俺がこんなことになつてるんだろうな」

魁人は自分が馬鹿みたいに思えて苦笑した。答えなんて、決まつている。

「とりあえず一発ぶん殴つて、紗耶や鈴瀬たちの蜘蛛を取り除いてもらうぜ」

助けたい人たちがいる、その思いを拳に込め、魁人は巴堂に向かつて疾走する。

## 二章 呪術的実験（8）

旧校舎といつもののは、当然のようだに学園の立ち入り禁止区域に指定されている。

マイザース学園の立ち入り禁止区域の多くは魔脈を研究する魔術機関で、立ち入りを禁止しているだけではなく幾重にも張られた結界で護られている。よつて、一般人はあらか魔脈の情報を狙つてくるような魔術師だつてそう易々と侵入できない。

学園の西側にポツンと存在するこの旧校舎は、そんな魔術機関とは一切関係はなかつた。

校舎といつても資料館的なものだつたらしく、ゴシック様式でシンメトリーな建物はどこぞの教会堂みたいな雰囲気を醸し出している。もつとも、今やすっかり寂れてしまつていて、一昔前にタイムスリップしないことには美しかつたころの姿を拝められないのだけれど。

普段は厳重に施錠されている旧校舎、もとい旧資料館の観音開きの扉だが、現在は全開となつていて。

その一步中に入ると眼前に広がる開放的なホールは　氷結地獄と化していた。

辺り一面、氷、氷、氷。左右の階段やフロント、天井から下げられたもうつくことのない照明に至るまで、全てが氷漬けにされる。水浸しにした室内を南極に瞬間移動させたらこんな風になるかもしれない。

そして小型犬くらいの大きさをした虱といつ、明らかに不自然な物体もそこら中で凍結していた。

そんな中、ホールの中心に凍つていらない存在がいた。長い髪をボニー・テールに結つたスレンダーな少女　生徒会会計・藤林葵とその使い魔、氷狼の魔獣・リクである。

「リク、上」

葵が指示を出すと、熊ほどの大きさに立派な白い鬚をしたリクは『ガルル』と唸り、上を見上げて高く跳躍する。そのルビー色の両眼が捉えているものは、唯一凍つていな面 天井を這っていた

他よりも一回り大きい一匹の大虱である。

ピヨーン、と天井を蹴つて大虱は飛び上がつたリクに向かつて急降下する。が、寄生する前に前足で弾かれ、そのまま凍りついた床に墜落する。しかし、虱とは思えない硬い外皮に包まれているそれにはまだ生存反応があつた。

#### 「絶氷の息吹」

葵がまたも呟くように指示を出す。本当に小声だが、リクの聴覚は彼女の指示を漏らさず聞き取つていた。自由落下が始まつたのと同時にリクは牙の並んだ大口を開け、そこから白い霧状の吐息がまるで光線のように放出された。

大虱にそれを避ける暇はない。直撃を受けた大虱は、液体窒素を被せられたように瞬間凍結して動かなくなつた。その際に大気中の水分も凍り、ダイヤモンドダストとなつて美しく輝く。

だがまだ終わつてはいない。葵はブレザーの裏側に隠し持つていた短刀を抜き、凍つて動かない大虱に向けて投擲。短刀は刺さることはなかつたが、カイン、と聰明な音を立てて大虱の体を崩壊させた。刹那、その大虱と周囲で凍つっていた他の大虱たちが、一斉に紫色の靄となつて消え失せた。

しかしそんなことは眼中にないといった感じで短刀を回収する葵に、リクがじやれるように鼻を押しつけてくる。彼女は少し緩んだ表情になつて『いい子いい子』とリクの頭を撫でた。

> i 2 1 4 0 6 — 1 7 3 6 <

「うん、やっぱり『親』を殺せば『子供』も消えたね」と、銀英が地下へ続く階段からそんなことを口にしながら登つてきた。彼は何かの資料と思しき用紙の束を丸めて握っている。葵は

瞬時に今の緩んだ表情を氷結させた。

「銀、説明して」

「あー、はいはい」銀英は面倒そう、「えーとだね、蟲主が一人でこれだけの数の蟲を操っているとしたら、そいつは超一流か、またはリーダー的存在を間に置いているかのどちらかつてことになるのさ。つまりそのリーダーを潰せば、今のように残りも全部消え去るわけだよ」

つまるところ、リーダーである『親』が死なないかぎり『子供』は死骸になつても残るが、『親』が死ねばたとえ生きていたとしても『子供』も消滅してしまうということだ。

「……」

「えーと、葵さん？　今ので理解できた？」

説明を聞いても無反応だった葵に問うと、彼女はコクリと頷いた。

「せめて相槌くらい打つてほしいんだけど」

まあそこは『葵だから』という理由で片づけ、銀英は腕時計の時間確認する。

「それにしても参ったね。もう集会始まってるころだ。蟲の邪魔が入らなければ、もつとスクーズに行つたのになあ。ところでの巨大冷凍庫なんだけど、非常に寒くない？」

「別に。……それで、どうだった？」

余計な話はするなど言つように、葵が結論を急がせる。銀英は、ふう、と小さく息を漏らしてから報告する。

「予想通りさ。この旧校舎は呪術師の本拠地。地下には改造された研究室みたいな部屋もあつたよ。まあもつとも、作りかけや作り置きの蟲はなかつたけどね。蛻の殻なのは当然として、もう放棄した後つて感じだつた

でも、と付け足して銀英は丸めている用紙の束を広げ、それを眺めるように見る。

「こいつの通り、面白いことが判明したよ。いや、面白くはないか。

寧ろ不愉快だね」

彼にしては珍しい嫌悪感に満ちた表情を作る。

「靈術を人間でやろうとしてるなんてさ」

### 三章 呪術的実験（9）

「私はですね。巫蠱術を扱う一族に生まれながら、魔力の才がなかったのです」

何の前置きもなく、巳堂は自分の過去について語り始めた。  
いや、確かに前置きはなかつたが、魁人が無抵抗になつたことが話を始めた大きな理由なのかもしれない。

「ぐ……」

魁人は殴りかかった右手を掴まれて捻り上げられ、そのまま口反になるよう手首や肘の関節を極められていたのだ。

死に体をさらす魁人に抵抗は許されず、ギリギリと軋むような痛みに呻くことしかできない。

骸骨みたいに痩せ細っているからといって巳堂を甘く見ていた。人を見かけで判断していた。魔術師＝体術の達人、というわけでは流石にないだろうが、少なくとも巳堂は自分よりも強い。（やっぱり俺じゅ、勝てないのか）

歯痒い。自分は非力な一般人だということを思い知らされた。だがそれでも、歯痒いと感じるだけ諦めてはいられない。ここで諦めるくらいなら、自分はさつき逃げていた。

「魔術師の一族で魔力がなかつたらどおーなるか、わあーかりますか？ 簡単です。追放されたのですよ」

半端な気持ちで魔術師と戦うことを選んだわけじゃない。まずはこの体勢をどうにかして、そして一矢報いてやる。

「ですが、私を追放したのは単に魔力がなかつたからだけではありません。私の蠱術に対する考え方を、奴らは危険だと判断したのでしょうか。禁忌をあえて犯そおーとする私の考えをねえ」

「き、禁忌？」

耳に入ってきた言葉を、思わず訊き返してしまった。返事があつたことに巳堂は愉快そうな顔をする。

「そううー！ 蛇に蛙、犬や猫、狸や狐、蠱術は蟲以外でもできるのです。それはつうーまり、人間や魔獸を使ってもできるということですねえ」

「なつー？」

蠱術というものの説明を受けている魁人は、すぐに巳堂が何をしたいのか理解した。蠱術とは蟲を共食いさせる呪術。それを人間でやるということは、殺し合いをさせるということだ。

「くくく、理解の速い子は好きですよ。おーです。人間を使うのです」

「てめえ、人の命を何だと……」

とつくりにしていることだが、こいつはもう『先生』だとは思わない方がいい。

「そもそも、どうやって殺し合いをさせるつもりだ！」

「おやあ？ あなたは私が何の意味もなく生徒に蟲を憑依させたと思っているのですかあ？」

「それってどう

どういうことだ？」と訊こうとした魁人だが、答えは視覚から入ってきた。

蟲を体内に入れられ、その呪いによって意識を失っていたはずの紗耶が立ち上がったのだ。

「紗耶……！？」

一瞬、彼女が復活したと歓喜したが、そうではないことを、彼女の虚ろで淀んだ瞳を見て思い知る。

光を失い、まるで意思を感じない曇った瞳の紗耶は、ゆっくりと巳堂に捕まっている魁人へと歩み寄ってくる。

場の魔力の高まりがなくなつたことで発動が止まっていた魔眼が再び青く染まる。紗耶の中に見える蟲が、活動を始めたかのようにな強く魔力の光を放っていた。

( まさか、操られてるのか！？)

そうとしか、いや、絶対にそうだ。あの蜘蛛が、紗耶の意識を乗つ取つて体を支配している。巳堂が呪った生徒を殺していないのは、あとで操つて殺し合ひをさせるためだったのか。

虚ろな紗耶が、魁人の目の前で立ち止まる。と、巳堂が急に間接を決めていた手を放して魁人を開放した。

「さあて、少しテストしてみましょう」

「ツ！？」

なぜ巳堂が自分を放したのかを考える間もなく、魁人の体は真横に吹き飛んだ。体育館の壁に背中を強打し、一瞬麻痺した感覚に激痛の波が押し寄せる。

「 あツ！？」

声にならない悲鳴。思いつ切り叫べば、あるいは体育館の中にいる月夜に届くかもしれない。だが、この位置は体育倉庫などの裏手、多少の物音では気づかれない。あえてこのような場所を選んで犯人探しをしていたことが仇となってしまった。

ずるり、と魁人は崩れる。全身が痛い。もしかしたら骨が折れているかもしれない。手足に動けと命ずるも、自分の体なのに言つことを聞いてくれない。

落ちかけた瞼を開いて前方を見る。そこには、回し蹴りをした後の体勢の紗耶と、嫌らしく、そして愉快そうに騒つている巳堂が見える。

その巳堂の口が動く。

「あなたには他の生徒会魔術師への連絡係となつてもらいましょうか。『私は今日の放課後、この第一体育館にて人間の靈術を行います。阻止したければどおーぞ御勝手に』と伝えてくださいねえ」

言つと、巳堂は踵を返して立ち去つていく。朦朧とする意識の中、その彼に付き従つよう、操られた紗耶も魁人の視界から消えていつた。

「く……そつ……」

ぼやける視界は完全に見えなくなり、魁人の意識は闇へと墮ちる。

### 間章（3）

あの日。

あの日、幼かつた自分は、両親に向かつて訊いていた。  
「おとうさん、そのひかつてるの、なに？」

幼稚園児の頃の記憶なんてほとんど残っていないが、この光景は  
間違いなくあの日。幼い自分が自分の眼の異常さを知った日。  
「光つてるの？」

父は首を傾げ、隣の母と顔を見合させた。幼い自分が指差したと  
ころに光り物などないことに気づくと、二人とも途端に不安げな顔  
になつた。

「何もない……わよね？」  
と母。

「魁人には、見えるのかい？ 父さんの中にある光が」  
父は本当に不安そうにしている母に適当なことを言つて席を外さ  
せ、幼い自分をまっすぐに見詰めてくる。そして、優しく告げた。  
「いいかい、魁人。それは他の誰にも言つてはいけないよ。魁人に  
は見えていても、他の人に見えないものなんだ。変な人と思われ  
るのは、嫌だろう？」

幼い自分は大きく何度も頷いた。

「でもね、魁人。他の人とは違うからって、自分の眼を嫌いになつ  
てはいけないよ。それは凄い眼なんだ。悪い魔法使いを倒せるほど  
にね」

幼かつた自分には、父の言つていることの意味がわからなくて

## 四章 悪魔の視力（1）

温かい光に包まれるような感覚に、魁人の意識は覚醒した。ゆっくりと目を開く。その奥の瞳は、青色のままだつた。

ぼんやりとした視界が鮮明になつていく。最初に映つたのは、心配そうに覗き込んでいる生徒会長・月夜詩奈の顔だった。

「あはっ、気がついたみたいね。よかつたあ」

安堵の笑顔を満面に、月夜は胸を撫で下ろす。魁人は自分の状況が理解できず、寝ている状態から首だけを動かして見える範囲から情報を得る。

場所は見覚えのあり過ぎる高級マンション的な部屋 生徒会室。そしてどうやら自分はそのソファーアに寝かされていたようだ。

「いやあ、意識がなくても魔眼つて発動するもんなんだねえ」

感心するような声が聞こえたので見ると、ガラステーブルを挟んだ対面のソファーで、副会長の御門銀英が二へラと美形を台無しにしそうな笑みを浮かべていた。彼の隣には会計の藤林葵が座り、彼女の膝の上に子犬化したリクが撫でられながら大人しく眠っている。「魁人、会長には礼を言つべきだよ。付きつきりで治癒魔術をかけてたんだからさ」「治癒魔術？」

上体を起こしてもつと辺りを見回す。すると、ソファーの周りを囲うように、ローンの文字が刻まれたメダルのような金属板が並べられているのが見えた。なるほど、あの温かな感覚はこの魔術によるものらしい。

「えっと、ありがとうございます、月夜先輩」

頭を下げて心から感謝するように礼を言つと、月夜は『どういたしまして』とこやかに笑つてくれた。

そのままローンの金属板を片づけ始める月夜に、魔眼の色の消えた魁人は申し訳なさそうに頭を搔く。

「すみません、俺、ちょっと夢を見てました」

「魁くん、それはどんな夢かな？」

「昔の夢ですよ。たいしたものじゃありません」

今思えば、父はこの眼のこと、見える光のことを知っていたのではないだろうか。確認しようも、父は仕事で海外を飛び回っているためもう何年も会っていない。連絡はなぜかいつも取れず、時々向こうからの手紙が一方的に送られてくるくらいだった。

父が魔術師だとは思えない。それほど強い光ではなかつたと記憶している。

「でも、気になることを思い出しました。父さんが言つてたんです。この眼は、『悪い魔法使いを倒せるほど凄い』って……」

「！」

冗談に等しい軽い気持ちで言つたつもりだったが、月夜と銀英は目を丸くして顔を見合せる。魁人は氣づかなかつたが、実は葵も眉根が少し動いていた。

「葵ちゃん、魔眼の資料持つてきて」

「わかった」

葵が了解した瞬間にリクが飛び起る。彼女はソファーから立ち上がると、ちょこちょこと可愛らしい小走りをするリクと共に棚の方へと歩いていく。

「いやそんな過剰に反応されても、その辺の記憶は曖昧ですから本当は違う言葉だつたかもしませんよ」

「でもでも、それが本当だつたら凄いよ、魁くん」

「危険な可能性は跳ね上がつたけどね。時に二人とも」

興奮気味の生徒会長に対し、銀英が落ち着いた口調で告げる。

「今は夢や魔眼のことを話している場合じやないんじやない?」

「!?

言われてから魁人は氣づく。電撃が走つたように氣を失つ前のこ

とを思い出す。

それを悟つたように、銀英は真剣な表情になつて訊ねてくる。

「さて魁人、体育館裏で何があったのか、紗耶はどこに行つたのか、記憶を失つてないのならその辺の説明をお願いできるかい？」

「……わかりました」

慌てず、叫びたい衝動を無理やり抑えつけて、魁人は情報を整理する。そしてそれが現実だつたことを再確認し、必要なところだけを握り込んで語り始めた。

## 四章 悪魔の視力（2）

「……そう、呪術師は巴堂先生だったの」

一通り魁人の説明を聞き終えた月夜は、どこか感慨深げにそう呟いた。彼女にはそれなりの接点があつたのかもしれない。

「それに紗耶ちゃんが彼の手に落ちたなんて……信じ難いけど、魁くんが言うなら間違いないよね」

困ったように頬に手をあて、彼女は小さな溜息を洩らす。何か凄く信頼されているみたいだが、自分が幻覚でも見ていたのでなければそこに嘘はない。

「蟲ではなく、人を使つた蠱術。まさか本当にやるつもりだつたなんてね。禁忌に手を出すとは、本当にあの人が巫蠱術を扱う一族なのか怪しいところだよ」

「銀先輩、その禁忌つてやつぱり……」

「ああ、そうさ」銀英は少し忌々しげに、「人間は倫理的に問題があり、魔獸は絶対に制御できない。だからその二つは蠱術において禁止事項なんだ」

巴堂は知つていてなおその禁忌に手を出している。一族追放の原因はそれにあると本人は語つていたが、禁忌と聞いてどうも魁人には腑に落ちない点がある。

「呪術に禁忌つて、何か変じやないですか？ 呪いなんだから、何してもよさそうなのに」

魔獸はまあいいとしても、元から倫理を問うようなものじゃないだろう。すると、銀英は顔の横で右手を軽く振る。

「いやいやそうでもないさ。呪術つて言えば悪いイメージがあるかもしれないけど、影響を与えるつてことならいい意味にだつて使えるんだ。例えば類感呪術。『形の似た物は相互に影響を及ぼし合つ』ってやつなんだけど、まあ『丑の刻参り』だよ」

それは確か藁人形に釘を打つやつだ。そのくらいなら魁人だつて

知っている。

「それは悪い影響だけど、類感呪術にはいい面の影響もちゃんとある。ライオンとかの強い動物のボディアートをすることで俊足や馬鹿力を得たり、海藻を食べることで髪が黒くなったり。一番わかりやすいところで言えばそつだなあ……てるてる坊主かな。あれは太陽の象徴だからね」<sup>レガリア</sup>

もちろんやるには魔力がいるけど、と銀英は付け足した。

「じゃあ、蟲術ってのも？」

「蟲はうまくすれば薬になつたりするからねえ。まあ、漢方薬みたいに感じと思えばいいさ」

銀英がそこまで説明したところで、葵が大量の本やファイルを塔のように積み重ねて絶妙なバランスを保ちながら戻ってきた。重量にしてもそうとう重いだろうに、細身の彼女は顔色一つ変わらない。

「詩奈、魔眼の資料」

「あっ、ごめんね、葵ちゃん。えっと、そこに置いといて」

葵は「クリ」と頷くと、月夜が指した窓際の奥、社長室にでもありそうな机の上に資料を置き、倒れないように整理していく。何も口に出ししてこないが、たぶん彼女はこちらの話もしっかりと聞いていることだろう。

葵が資料を置いたのを認めてから、月夜が魁人に確認するように問う。

「えっと、魁くん、巴堂先生は魔力がないから追放されたって言つたのよね？」

「はい、まあ一応」

禁忌と魔力、どちらが重大な理由なのかは魁人にはわからないけれど。

「ということは、巴堂先生はこの学園が魔脈の上に立つてつて知つてたのかもしれない。魔脈そのものには興味ない感じだから、魔力を得るために教師として潜り込んだってところかな？ えっと、

確かに赴任してきたのつて一昨年だつたっけ？

「僕が高等部に入った時にはいたよ。僕的には好きじやない先生だつたね」

それには葵も共感するように向こうで頷いていた。銀英は何かを思い出すように顎に手を持つていく。

「というか、巳堂つて一年前はテニス部の副顧問してなかつた？」

「あつ！ そういえば……。じゃあ、最初にテニス部員を呪つたのは顧問いびりの恨みから？」

「だろうねえ。あれは根に持つようなタイプだよ。普段は根暗な先生だつたし」

二人が話している過去のことなど、魁人には知つたことではない。「俺はあいつを、『先生』だなんて思つてません」

巳堂は鈴瀬や関係ない人を大勢、現在進行形で苦しめている。魔力を制御できない一般人が精神を汚染されてやつてしまつたことはなく、意図的に、それも『実験』セルモットなんて言つて。

巳堂の目は、人を物かそれこそ実験動物くらいにしか思つていな目だつた。

彼の授業は何の特徴もない普通なものだつた。でもそれは、それは学園に居続けるために作つた表の顔だつたつてことだ。偽りの教師。最悪だ。

「学園に来た時点では魔術師じゃなかつたから、警戒されることもなかつたのね。そして、いつからかわからないけど魔力が開花しついにこんなことを始めた。魔力に魅了されたつて理由も多少はあるだろうけど、魁くんの話を聞くかぎり、彼は最初からこのことを計画してたみたいね」

「魔力はなくても、魔術の才能はあつた。元が魔術師の家系だから知識も豊富。そりやあ素人とは違うわけだよ。でも、禁忌を犯そうとしてるんだ、プロつてわけでもない。ずっと僕らに見つからなかつたことだけは驚嘆に値するかな」

巳堂遊作という呪術師を分析していく月夜と銀英。魁人はそれを

黙つて聞くしかない。

「とにかく、巳堂先生の蠱術は絶対に阻止しないといけないわ」

「問題は、操られているとはいえ紗耶が向こう側についてることだね。たぶん巳堂は、紗耶を蠱にするつもりだろうし」

「紗耶以外にも、操られてる人はいる」

葵が整理を終えて戻る。やはり話は全部聞いていたようだ。

「そうよね。もし盾なんかに使われたら手が出せなくなっちゃうわ」あれから増えていなければ、テニス部員六人に今朝の被害者が七人、そこに紗耶を加えて十四人の生徒を巳堂は蠱で操ることができる。

だが、テニス部員は巳堂の手元ではなく病院にいると聞いている。鈴瀬ら七人も、この生徒会室で保護している。

(そうだ。ここにいるかぎり鈴瀬たちは安心だ。この生徒会室に……?)

月夜たちの言葉と部屋の様子に違和感を覚え、魁人は改めて周囲を見回す。スペースを空けて敷かれている敷布団。そこで寝かされていた鈴瀬を含む七人の生徒たちが……いない！？

「月夜先輩、鈴瀬たちはどこに？」

嫌な予感がした。残念そうな表情になる月夜から答えを聞く前に全身の血の気が引き、ミイラ化するんじゃないかと思つほどの冷や汗が流れる。

月夜は言いづらそうに、そして自分たちの失敗を悔いるように、「……それがね、集会から戻つてきたら、みんないなくなつてたの

「！？」

魁人は絶句する。思わず叫びたかったが、絶句する。月夜たちだつて、保護していた被害者がいなくなつたのを見て最初はそうなつたはずだ。

(じゃあもう、鈴瀬たちは巳堂の手に……)

そう考えた途端、今の今まで頭から抜けていた言葉が蘇つてくる。意識を失いかけていたあの時の巳堂が言つた言葉。

私は今日の放課後、この第一体育館にて人間の靈術を行います。阻止したければどおーぞ御勝手に

(今日の放課後……！？)

「今何時ですか！？」

「え？」

ハツとし、ほとんど叫ぶ形で訊ねる魁人に、キヨトンとした月夜が壁にかけているアンティークな時計を見て答える。

「……、夕方の五時二十分くらいだけど」

「……ツ！？」

驚愕し、勢いよくソファーから立ち上がった魁人を生徒会の面々は訝しげに、そして不安げに見詰める。

「やばい。巳堂が靈術をするのは今日の放課後なんです！ 場所は、第一体育館」

告げた瞬間、緊迫した空気が場を支配した。常に無表情の葵すら目を見開いていたのだから大変だ。

笑いごとではない事態に、銀英が冷静に現状を呟いた。

「……それ、今から行つて間に合つのかい？」

放課後になつて、既に一時間近く経過している。

## 四章 悪魔の視力（3）

マイザース学園・第一体育館。

照明はつけず、沈みかけた太陽のオレンジ色だけが屋内を不気味に照らしている。普段のこの時間ならバスケット部員やバレー部員たちが忙しくボールを弾ませているはずなのだが、今日にかぎり静寂。まるで妖気が満ちているような異質な空気が体育館全体を覆い、一般人が近づくことを拒絶する一種の結界のような役目を果たしていた。魔術師でなくとも、これほど呪力が濃密に張り巡らされていれば、生物としての生存本能が働いて近づこうとは思わなくなるのだ。

もつともそれは、これから行われる呪術の副作用みたいなものだつたが。

蠱術を扱う呪術師 巴堂遊作は、スーツの上から白衣を纏い、ステージの中央に立つて体育館に集まつた者たちを眺めていた。

病院から抜け出してきたような患者服を纏つた男女が六人、今朝生徒会に保護されていた者が七人、そして放課後この体育館を使用していた二十人強の生徒にも蠱を仕込んで黙らせている。普通なら顧問の教師もいそうだが、職員会議などで巴堂が来た時にはまだいなかつた。

「まあー、このくらいの人数が限度でしょう。あまりおおー過ぎますと完成した蠱を制御できなくなつてしましますからねえ。くくく、少々欲張り過ぎた気もしますが、今の私ならこのくらい大丈夫でしょう」

聞く者を陰鬱にさせるような笑い声を発しつつ、巴堂は従者のようになら立っている生徒会の魔術師 神代紗耶へと体を向ける。体内に入れられた蠱によって体の支配権を奪われている彼女は、この場に集つた他の生徒同様、意思のない空っぽな瞳をしている。その手には、彼女の退魔武器である蒼炎龍牙がしっかりと握られている。

た（炎は出でないが）。

「どおーです？ 見えますか？ よおーやく全員の体に蟲が馴染みましたよ」

飛び立つ寸前の鳥のように両腕を大きく広げ、巳堂は虚ろな紗耶へと言葉をかける。しかし、意識のない紗耶に反応はなく、大の人人が等身大の人形遊びをしているようにしか見えない。

そんなことは気にもせず、巳堂はさらに言葉を連ねる。

「しかあーし、まだです！ まだパーツは揃っていませんよ。あなたのお仲間が来るのを、私は待たなくてはいけません。最初は思いつきませんでしたが、魔術師を使えばより強力な蟲が作れそうですからねえ。くくくくく！」

巳堂は紗耶の顎に手をやり、自分と田線が合ひよつクイッと上を向かせる。

「その蟲にはあなたがなるんですよ、神代紗耶さん。術の開始をもつて、あなたはその刀でこの場にいる私以外の人間全てを斬り殺すのです。そおーすれば、殺された者の負の念が呪いとなつてあなたに吸収されます。全員分の呪いを得た時、あなたは最高の蟲として生まれ変わるのです！ くく、はははははは、素晴らしい！ 素晴らしい！」

高らかに狂笑する巳堂。紗耶が正常であれば、『じにいつ壊れてる』とか呟いたことだろう。

巳堂は確かに壊れている。だがそれは彼自身も知悉していること。自覚ある変人。それが巳堂遊作だった。

「私は究極の蟲を作り出し、そおーして私を追放した奴らに思い知らせてあげるのです。倫理なーどに縛られていては進歩しない。至高の作品は完成しないとねえ！」

段々とヒートアップしてくる巳堂は、直立する紗耶の周囲を踊るように回り始める。気持ち悪い、もじこの場に集まつた者たちが意識を取り戻したならそう思うだろう変な動き。

「まあーもつとも、思い知るこころには生きてはいないでしょーがね。

くくははははつはあ！」

楽しげに、愉しげに囁う。両腕を広げ、縮め、拳を握り、開き、時にはセクハラ上司よろしく紗耶の肩に手を置いたりして、巴堂はステージの上で妙ちきりんにダンスする。

「いいーですか？ 魔術師とは探究を怠つてはいいーけないのですよ！ たとえ太極や神に到達してもです！ 追求に終わりというものは存在しなあーいんですから！」

姿もそうだが、どこかの研究者みたいな考え方を持つてゐる巴堂である。と

「んー？」

巴堂の変な踊りがピタリと止まる。

顔を体育館の入口に向け、ニイヤリと口元を歪める。

「どおーやら、來たみたいですねえ。意外と遅かったじゃあないですか」

白衣を翻し、巴堂はステージの先端まで歩く。彼の従順なる僕にして殺戮人形となる予定の紗耶が隣に並んだのを認め、巴堂は愉快げに独りごちる。

「さあーて、黄昏の舞踏会を開始しましょうか」

## 四章 悪魔の視力（4）

体育館の正面玄関の前に立ち、魁人は息を呑んだ。

全身に浴びせられる嫌な感じとその原因 建物全体を覆うよう  
に張り巡らされた無色透明の光を見たからだ。

普通は『感じる』ことしかできない魔力を、魁人は『見る』こと  
ができる。だから余計に恐怖を覚えてしまう。寒を感じるのは、  
魔力に込められた呪いによるものらしい。

銀英がその魔力を感じ取るよう目に目を閉じる。

「……どうやら、まだ始まつてないみたいだね」

「罷？」

ぼそり、と呟くように葵が訊く。銀英は細く目を開き、  
「かもね。巳堂の言葉から考えると、余程邪魔されない自信がある  
のか、それとも僕たちすら蠱術の生贊にしようと企んでいるのか。  
どちらにせよ、甘く見られたものだ」

「罷でも何でも、行かないことには紗耶や鈴瀬たちを助けられませ  
んよ」

「この中に生贊にされる人たちがいる。皆を救えるのは自分たちだけだ。  
けだ。

魁人は今一度魔力の渦巻く体育館を見上げる。

自分にだけ映る恐ろしい風景。体が震え上がりそうになる。しかし、決意は揺るがない。と、横の月夜が心配そうに声をかけてくる。  
「魁人くん、ここからは私たち生徒会魔術師の仕事だから、無理してついてこなくともいいんだよ？」

引き返すなら今のうちだろ。だが、魁人は首を横に振った。

「いえ、俺も行かせてください」

「わかつてるのかい？」と銀英。「あそこに一步でも踏み入れたら  
戦場なんだ。僕たちが魁人を守れるという保証はできない。君はこ  
ういうことが一番嫌だつたはずだろ？」

魁人は口籠る。だが、それは一瞬だった。

「……嫌ですよ。死ぬのだつて怖いですよ。俺が行つても役に立たないかもしれないことだつてわかつてます。でも、それでも、俺はあの外道に一矢報いたいんです。それに」

生徒会の三人は黙つて魁人に視線を集中させる。

「鈴瀬の中に蜘蛛を見た時、気づいたんです。俺は、この眼を持つている俺は、こっちの世界からは逃げられないんだと。だけどこの魔眼は自分自身、潰してしまいたいほど嫌いになれるわけありますよ。逃げられないのなら、立ち向かう。そう決めたんです。

幸い、同じ世界にいる先輩たちはいい人ですし」

魁人は三人と一匹の顔を順に見ていく。こんな時に緩んだ表情をしている者は一人としていないが、それは魁人の話を真剣に聞いてくれていたことの証である。

「それにここまで関わつといて、俺だけ逃げるなんてできません」自分がちゃんとしていれば、紗耶だつて操られなかつたかもしれない。彼女を、彼女たちを助けるのは自分の手でやりたい。何をするべきいいかはわからないけれど……。

「自分で決めて命を落とすのなら、まあしあうがないよねえ」

直球の言葉だが、銀英の唇は綻んでいた。理解してくれたのだろう。

「死なせない。魁人は仲間」

葵が言った。本当にそう思つてくれているのかどうかは相変わらずの無表情と感情のない声からはわからないけれど。そして巨大化しているリクが『がうつ』と吠える。それは主人と同じことを言ったように魁人には思えた。

「あははー、じゃあ魁くんは、今だけ仮生徒会役員つてことにしよっか」

一度だけ微笑んだ月夜だが、すぐに表情を引き締めて正面玄関を向く。

「それじゃあみんな、行くわよ」

各自で返事をし、魁人たち生徒会は戦場へと赴く。

## 四章 悪魔の視力（5）

正面玄関の扉を開けて中に入った。

逃げ出したくてたまらない自分がいるのに、それよりも圧倒的に強い力を持つて敵に立ち向かおうとする自分もいる。RPGの主人公がラストダンジョンに突入する直前はこうじう気持ちなのだろうか。

もつとも、ゲームと違つて負ければ終わりだし、自分が勇者だとは思わない。そして扉の向こうはダンジョンなどではなく、即行でラスボスだった。

「やあーっと来てくれましたねえ。待ちくたびれましたよう。退屈すぎて一人虚しくお話していたくらいです」

「巴堂……」

ステージの上にいる白衣を睨みつけ、魁人は憎しみの籠つたような低い声で唸つた。

「くくく、よおーーこそ、生徒会の魔術師諸君。わざわざ贅となりに来てくれたことをかあーんしゃしますよ！」

マイクなど使つていないのでさいくらいのボリュームで喋る巴堂に、銀英がステージまで届くように声を投げかける。

「ということは、僕たちは障害ではなく、蠱術の道具としか見ていなかつたたつてことかな？」

「ああーたり前のこと訊くんですねえ、御門銀英君。そおーですよ。あなたたちは所詮この彼らと同じ道具なんですよ」

魁人たちの前方、体育館の中央辺りに、軽く三十人は超えている生徒たちが城を守る兵士のように並び立っていた。皆、死人のよう虚ろな目をしている。

そんな彼らの中に、魁人は見知った顔を見つけた。

「鈴瀬！ 待つてろ、すぐに助けてやるから！」

魁人は叫んだが、やはりその声は届いていない。月夜が患者服を

着た少年少女を指差す。

「見て、あの子たちってテニス部の……やつぱり病院を抜け出して來たみたい」

「今頃病院はパークかな？ それよりも、どう見ても人数増えるよね。また僕らの失態だよ、これは。まったく、前の生徒会長にでも見られたら殺されるかもね」

自虐的に言いながら、銀英は懐から護符を一枚、中指と人差し指に挟んで取り出す。

「銀くん、葵ちゃん、わかつてると思つけど、操られてる人を殺しちゃダメよ」

「そりゃあそつた。」ここで殺したら巴堂の思つっぽだからね

当たり前のことと、とでも言つよう。銀英は顔の横で護符をヒラヒラさせる。葵も小さく頷いた。蠱術とは、殺し合ひをさせる術なのだ。

「それではそれでは、パツも揃つたことですし、術の開始と行きましょーか！」

両腕を限界まで開き、広い体育館内にもよく響く声で巴堂が宣言する。すると、こちらを向いて並んでいる生徒たちが道を開くように脇に寄り、そこから日本刀を握る黒髪の少女が兵士を束ねる騎士団長の」と歩いてくる。

「言つまでもない、生徒会書記の退魔師 神代紗耶である。

「紗耶ちゃん……」

悲しげな表情で月夜が呟く。紗耶は本当は操られてなどいない、そんな想いを彼女は今の今まで抱いていたのかもしれない。実際に見ていた魁人だって心のどこかにそんな想いがあつたのだ。話に聞いただけの月夜たちは強く願つていたことだろう。

だが、紗耶は操られる演技などするような性質じゃないし、演技する意味もない。

魁人は一步、前に出る。

「紗耶！ 聞こえてんだろ？ 何やつてんだよ、お前

紗耶は無反応。念のための問いかけだつたが、現実を知るだけになつた。これでもう、割り切るしかない。

「もう一ですよ！ あなたの声なんて届きません！ 届くのは、蟲を通しての私の意思だけですからねえ！」

ステージでくつくなと嗤う巴堂を憎々しく思つてゐると、銀英が操られた生徒たちを見据えながら一つの指示を出してくる。

「魁人、『親』を探すんだ」

「親？」

「そう。魁人にはみんなを操つてゐる蟲が見えてゐるんだろう？ あれだけの人数だからね。命令は『殺せ』とか『守れ』みたいな単純なものしか出せない。そしてその命令を出すリーダー的存在がいるはずなんだ。巴堂が直接制御してゐる蟲はその一匹だけだから、それを見つけて潰せば全員助かるつてことだよ」

「みんな……助かる。本当に」

それは、自分にしかできないこと。この眼が役に立つといふこと。一抹なんかではない、大きな希望が生まれてくる。

「わかりました。それで、見分け方とかはあるんですか？」

魁人はここに来てからずつと青く煌めいてゐる魔眼に意識を持つていきながら訊くと、銀英は前方から注意を逸らさないままきつぱりと答えた。

「より強い魔力を持つていて、他よりも大きいやつがそうだね。たぶん、巴堂本人が所持してゐると思うけど」

（ え？ ）

魁人は、そういうものに見覚えがあつた。

彼女には特別強力な蟲を憑けました

巴堂の言つてゐたことが脳内に蘇る。バネで弾いたように、魁人は青煌する魔眼を『彼女』に向ける。

そして 見た。

「……紗耶の、中です」

あのよつに並んでいるのだから簡単に比較できた。銀英の言ひつ『親』がそういうものなら、間違いなく紗耶に憑いているものがそうだろう。

「そうか、最悪だよ」

「よりによつて紗耶ちゃんになんて」

月夜と銀英は一瞬だけ驚いた風を見せたが、予想はしていたのだろう、すぐに冷静さを取り戻している。

「術者、殺すしかない」

葵が巴堂に視線をやる。もう彼女の言つた方法しかないのだろうか。

「なあーにをじゅぢゅぢゅと話しているのです？　ああ、いいーんです。いいーんですよ。作戦会議は君たちの必須科目でした。ですが、それは敵前でやることではなあーいでしょー！」

巴堂のやかましい声が場の主導権を握っているかのように響き渡る。

「さあー、まずは魔術師のあなたたちから蠱の糧となあーつてもらいましょうか！」

それが開戦の合図となつた。

紗耶が蒼炎龍牙を真横に構える。その刀身に蒼い炎が纏う。もう魁人も何度も見たあの炎だ。しかし

「操られてる状態でも魔術つて使えるのかよ」

自分を伸した時は蹴りだつたため、魔術は使えないものとばかり思つていた。ただでさえ厄介だというのに、これで倍以上に辛くなる。

「魔術は使えても、紗耶ちゃんの本来の力全部は出せないと思つのだからといつて安心できることじやないけど。……銀くんは紗耶ちゃんを引きつけて。その間に葵ちゃんは巴堂先生の始末をお願い」魁人は月夜を振り向いた。今のは、あれだけ殺すことや力ずくの方法を最終手段としていた月夜の指示とは思えなかつた。いや、あ

くまで最終手段として残している以上、月夜はただ甘かっただり優しかったりするわけではない。

「ここではその最終手段しかないのだと彼女は悟った。だから戸惑うことなく指示できたのだ。

了解した銀英に、魁人は押し退けられる形で強制的に下がらされた。

「魁人は会長と一緒にいること。死にたくなければ絶対に前線へは出ないことだね」

振り返らずに言られた。歯痒いが仕方ない。ここからは彼らの戦いだ。非力な自分は下がつて見守るしかない。

言われた通り、魁人は月夜の近くで待機する。そこでふと思い、月夜に問う。

「月夜先輩は戦わないんですか？」

「あはは、まさか。そんなことはないよ」

微笑しつつ、月夜は取り出したケースの中から三本の白チョークを抜いた。指の間に一つずつ挟んだ新品のそれは、彼女がルーンを刻むための道具の一つである。

「私は一人のサポート。私の術式は、直接戦闘にはあまり向いてないからね」

様々な月夜の魔術を魁人は体験しているだけに、それにはどこか納得するものがあった。

前に出ていく銀英と葵の体内に魔力の高まりである炎を捉えながら、魁人は周囲の動きにも気を配る。

自分にしか見えない何かが起これば、すぐに伝えられるように

## 四章 悪魔の視力（6）

紗耶以外の生徒たちも、一斉に行動を始めた。全員が殺し合いを始めるのではなく、巳堂の意思通りに生徒会魔術師から殺すつもりらしい。

まるでゾンビのようにおぼろげな足取りだが、こちらが彼らに殺せない以上、厄介であることには変わらない。

「葵、リクに乗つて一気に奴のところへ。こひちは僕が何とかするよ」

「わかった」

承知し、葵は飛び乗るように素早くリクに跨る。リクの脚力ならば、巳堂のところまで一つ飛びで行くことだって容易いだろう。だが

「そおーはさせませんよー！」

巳堂が眼鏡を煌めかすと、紗耶が蒼炎龍牙を天井へ向けるように翳した。次の瞬間、刀身の炎が膨張し、火山が噴火したような炎の奔流を噴射する。それはあたかも蒼い龍が天へと昇るようにも見えた。

ある程度昇ったところで炎は重力に引っ張られるように弧を描き、ステージの前方に着弾。そのまま横方向へと不自然に燃え広がり、巳堂とこちら側を隔離するように高く炎上する。

破魔の炎である蒼炎は、仮にも魔獣であるリクにとって文字通り『越えられない壁』を形成したのだ。

「降魔障壁。……こ今までの術が使えるのなら、ちよつと僕らまずいかもしれないよ」

「銀、どうする？」

「どうするつてそりゃあ！？」

魔力の流れを感じし、銀英と葵を乗せたリクは左右に飛んだ。ブウオン！ と空間ごと斬つてしまいそうな音を立て、今までいた場

所の空気を紗耶の蒼炎龍牙が薙ぐ。

そのまま彼女は葵とリクを狙つて跳躍。刃を振り回し、蒼い炎を乱射する。が、葵たちは素早く複雑に動いてそのことじくをかわした。外れた炎は床や壁に触れて引火することはなく、焦げ目だけ残して消えていく。

紗耶は明らかに他と動きが違う。これが『親』の力ということか。銀英がそんなことを考えていると、いつの間にか背後に近づいていた男子テニス部員が両手で首を絞めてきた。こちらは紗耶と違つて単純な動きだ。

絞める力は強かつたが、それで殺される銀英ではない。すぐさま振り解くと、流れるような動きでテニス部員の鳩尾付近に掌底を叩き込む。その際に除霊の護符を貼りつけたが、同じ憑きものでも呪いに対しても効果がないかもしれない。

案の定、吹き飛んだテニス部員は何事もなかつたかのように起き上がってきた。「いや、それはおかしい。

「完全に意識を奪うつもりだつたんだけどなあ。あー、そうか。最初から意識なんてないんだつた」

つまり自分を取り囮もうとしている彼らは、殺されるまで動き続けるということだ。本当にゾンビのようである。

さらに何人か纏わりついてきた生徒たちにも普通なら氣絶するほどの打撃をくらわせたが、誰もが何の問題もなく立ち上がった。銀英は小さく舌打ちする。

「さあーしてさて！ 殺さないと殺されまーすよ？ といつても、この体育館は蠱術における『皿』。私はどおりちらでも構わないんですけどねえ」

炎壁の向こうから高みの見物をかましている口堂の言葉はとりあえず無視。殺してはいけない、殺されてはいけない。もはや一方的な消耗戦だ。

と、リクが銀英の隣に着地していく。

「銀、どうする？」

葵からさつきと全く同じ質問。銀英は数瞬だけ考え、首だけで後ろを振り向く。

「魁人！君の魔眼での炎の壁に隙間、もしくは魔力の弱い部分がないか見てほしいんだけど」

「わかりまし 銀先輩ツ！？」

魁人の了解の言葉が悲鳴に変わる。

銀英と葵は同時に魔力の流れを感じてそちらを見る。紗耶が自分の周囲に炎の陣を描き、そこから生まれた無数の火炎球が流星群となつて襲いかかっていた。

今から動けば避けられないわけではない。だが、避けねば後ろの生徒たちが燃えてしまう。

「くつ！」

銀英は対抗するように掻めるだけの発破符を投げた。即行で九字を切り、印を結ぶ。

炎に触れれば先にこちらが燃えてしまつため、その直前で起爆。それで消滅した炎はあるが、全てを消すことはできない。しかし、発破の衝撃で炎の軌道が変わつたため、自分たちはもちろん背後の生徒にも被害はなかつた。

と

「！」

爆煙の中を紗耶が突つ込んでくる。刺突に構えられた蒼炎龍牙の刃が残り十数センチで銀英の喉元に届こうかという瞬間、リクが体当たりで紗耶を突き飛ばした。

受け身は取れずに床を転がる紗耶。当然、悲鳴などは上がらない。

「いやあ、助かつたよ」

リクと葵、両者ともに銀英は礼を言つ。葵は無言だつたが、リクは『わうつ』と返事してくれた。

「銀、もう紗耶を殺すしかない？」

疑問形なのは、葵も躊躇つてゐるからだ。確かに意識を失わすことができない以上、術を解くには紗耶を殺さなければならぬ。だ

が

「ダメだよ、葵。誰か一人でも殺せば呪いがかかつてしまつ。そうなつたら、いくら僕らでも死ぬか靈になるかのどちらかしかなくなるんだ。他の手を考えないと。せめてそれまで、紗耶がおとなしくしてくれると助かるんだけどねえ」

「凍らす」

「いや、たぶんそれは無理……」

と言つてゐるそばから紗耶が立ち上がる。蒼炎龍牙を構え直し、空虚の瞳がこちらをロツクオンする。

その時、彼女の周りに白い粒子が舞つた。それはたちまち奇妙な文字を形成して彼女を囲う陣となる。月夜のルーンの魔術 封滅の檻だ。

陣の文字が純白に輝く。瞬間、同じ輝きの糸のよつなものが彼女を雁字搦めにした。

## 四章 悪魔の視力（7）

「やつた！ 紗耶ちゃん動くから狙いがつけにくかつたけど、タイミングばっちりね」

そんな月夜のガッシュポーズでもしてそうな声を横から聞きながら、魁人は銀英に頼まれた『穴』探しをやつていた。

大火事になりそうで、しかしそれ以上燃え広がることのない炎の壁 降魔障壁 とか銀英が言つていた は、魔術そのものなだけに魔力の塊だった。

正直、色のついた光体の中に魔力である透明な輝きを『見る』ことはかなり意識を魔眼に集中する必要がある。見えないわけではないので、ちゃんと意識すればはつきりと映つた。

だが、はつきりとしているだけに、探し物の有無もはつきりわかる。

「……ない」

絶望的な表情で、魁人は呟いた。

「抜けれそうなどこなんて、どこにもないじゃないか」

巳堂のいる側へ行けないことには、この戦いは終わらない。それは銀英たちの戦闘を見ていたら理解できる。終わるとすれば、こちらが消耗して殺される時だけ。紗耶の動きを止めたからといって、そこは変わらない。

この状況を何とかしたいが、魁人には致命傷を与えないように手加減して生徒たちと戦っている銀英たちを眺めることしかできなかつた。

「月夜先輩、あの炎の壁、どうにか破ることはできないんですか？」

魁人は訊ねる。返ってくる答えが自分にもやれることだと期待して。方法があればとつぶやつしているだらうことも理解した上で、訊ねる。

「私たちには無理かな」

わかつていた。そう返つてくることは何となくわかつっていた。

「私の術じや弱すぎるし、銀くんの魔術は御札だから、発動前に燃やされちゃう。破魔の炎をリクちゃんが突破することはできない。ついでに言えば、この体育館が蠱術の『皿』として機能している以上、外にも出られない。あははー、手の打ちようがないわね」

「笑つてる場合じやないですよ！」

月夜に余裕があるとは思えない。人間、本当にどうしようもない時にはつい笑いたくなってしまうのだろう。

だが、魁人は諦めない。笑えない。諦めてしまえば、立ち向かうと決めた自分を否定してしまう。

月夜だつて諦めてなどいはないはずだ。証拠に、彼女はチョークを一本ずつ削つて向こうの援護を怠つていない。チョーク一本で一人束縛できるみたいだが、紗耶については三本使つていた。それは本数を増やせば増やすほど術が強固になるということらしい。

あとどれほどストックがあるのかは知らないが、なくなる前に何か策を見つけなければ……。

（何か、何かあるはずだ。魔術だつて完璧じやないんだろ？　だつたら、その何かを、俺が見つけるんだ！）

自分にしか見えない世界からそれを探し出す。魁人は炎壁を凝視した。一点でいい、あの壁に一点でも魔力の綻びがあればどうにかなるかもしれない。だが

「んんー？　はあー柴魁人君！　ああーなたはその魔眼で何をしようというのですかあ？　何もできないとは思いますが、とりあえず先に潰しておきましょーかねえ！」

「ツ！？」

いつの間にか、魁人と月夜は周囲を操られた生徒たちに取り囮まれていた。月夜は銀英たちの援護に集中を割いていたし、魁人は炎壁ばかりに注意が行つていたため彼らの接近に気づかなかつたのだ。魁人の首に手が伸びてくる。咄嗟にその手首を掴むと、柔道でもするように相手を投げ倒した。見ると、体操着を着た女子生徒だつ

た。女の子にこんなことするのはいい気分ではないが、やらなければ殺されるので仕方ない。

一時凌ぎに過ぎないことは十分理解しているのだけれど……。

「さやつ！？」

月夜の短い悲鳴が聞こえて魁人は反射的に振り返った。そこでは大柄な男子生徒 恐らくバスケ部員 が、その筋肉質な腕を月夜の背後から首に巻きつけるようにしていた。月夜は巻きついてきた腕と首の間に自分の細腕を入れていて、完全に絞まるだけはどうにか防いでいる。

だが、彼女よりも二十センチは背の高い男子にそんなことをされでは爪先立ちになる他なく、彼女は完全な死に体をさらしている。そこへ他の生徒たちが動きの鈍い蟻のように群がつていぐ。

「月夜先輩！」

魁人はまず月夜の首に絡みついていた腕を力づくで引き剥がし、その腕の主をとりあえず蹴り飛ばす。そして群がつてきた生徒たちも、投げたり突き飛ばしたり、時には殴つたりして倒していく。もちろんすぐに起き上がりてくるが……。

もし彼らが人並みの動きをしていたら一人とも呆氣なくやられていたことだろう。

「あ、ありがとう、魁人くん」

「いえ。ていうか、月夜先輩は体術とかできないんですか？」

「あはは、あんまり得意じゃないかな」

意外に思つたがそれが普通なのかもしない。魔術師はあくまで『魔』術を使うのであって、『体』術を使う者ではないだろうから。となると、弱虫を嫌っていた紗耶がなぜ彼女を慕つているのかと疑問に思わなくもないが、そこは今考えることではない。まあ、彼女は別に『弱虫』ってわけでもないし。

「それよりも、ごめんね。今ので紗耶ちゃんを放しちゃつた。ほら、チヨークのローンって簡単に消えちゃうから」

済まなさそうに月夜は打ち明けてきた。見ると、紗耶がまた銀英

たちを襲っている。ルーンは文字そのものを刻むだけで効果があると聞いたが、やはり術者とはリンクしているらしい。

「魁人、どこか抜けられそうなところはあつたかい？　あと会長はしつかり紗耶を抑えていてほしいねえ」

彼の声にはまだ余裕があるように思えた。

「まだ見つかってません。でも、絶対に探してみせます！」

力強く言うと、彼は『期待してるよ』と言いながら紗耶の剣閃をかわす。その紗耶に葵を乗せたりクが口から吹雪のようなものを吐き出しが、紗耶の炎がそれを呑み消した。

第三者の位置だつたら思わず見入ってしまうだろう戦闘から田を離し、魁人は再度炎の壁ににらめっこを挑む。

（そうだ、俺は早く魔力の『穴』を見つけないと！）

しかし、そんなことさせないように、再び誰かの手が横から魁人の首を絞めようと伸びてくる。

「く、また　！？」

振り返る勢いでその手を弾こうとした魁人だが、そこにいた人物を見て硬直する。

鈴瀬明穂だった。

## 四章 悪魔の視力（8）

「す、鈴瀬……ぐつ」

その名を呟いた瞬間、彼女の小枝のように細くて白い両手が魁人の喉を圧迫する。独特の違和感と苦しみが襲いかかり、吐き気のようなものが込み上げてきた。

凄い力だった。とても鈴瀬のようなか弱い少女が出せるようなものではない。これも操られているからだろうか。

「魁くん！」

月夜は他の生徒を捌くのに必死で、とても助けに来られそうにない。

何とか、彼女の両手首を掴んで首から僅かに放すことだけはできた。だが、どうしても知っている人なだけに暴力的なことをするのは躊躇ってしまう。代わりに、声が出た。

「鈴瀬、俺がわかるか？ 羽柴だ」

こんな近くに助けたかった少女がいるのだ。黙つてなどいられるはずがない。

「助けに来たんだ。だから、もうこんなことするなよ」

鈴瀬に反応はない。虚ろな瞳は、虚ろなまま一点の光も取り戻さない。

「おやおやおやあ、あなたは人形に向かつて何を真剣に話しかけているのですう？ くくく、私より愉快な人ですねえ！」

ピクリ、と魁人の眉が動く。

「人形……だと？」

これほど凄みの利いた声を放ったことが今までにあつただろうか。背後の月夜がビクリとするほどの威圧感がそこに込められていた。しかし、叫んだわけではないので、炎壁を間に置いたステージにいる巳堂まで届く音量ではなかつた。

が、巳堂は魁人が何を言ったのかわかつたように続ける。

「そおーですよ？ 実際に意識も感情もないのですからソレは人形なあーんですよ。所詮人形、しかあーし、私にとつては大事な大事な生贊です。人間からできた『蠱』といつ、倫理に縛られ誰も作ろうとしなかつた未知の作品を私は作るのですよう！」

「てめえ！ そんなものを作つて一体何がしたいんだ！」

今度は叫んでいた。銀英から聞いた話によると蠱は薬になるらしいが、巴堂がそんなものを作るとは思えないし、人間からできた薬なんてふざけている。

「そおーですねえ……私を追放した者たちに私の凄さを死をもつて見せつけるつもりですが、私が蠱を作る一番の理由は、見たいからですよ！」

「見たい？ 何がだ！？」

「蠱に決まつていてるでしょう？ 人間の蠱なんて誰も見たことないですから、私はそれを是非とも見てみたいのです！ 探究者という者は皆、そおーんなものなんです」

「それだけのために……」いいつやつぱり外道だ

吐き捨てる魁人。

ただ見たいだけ。馬鹿げている。馬鹿げていてもつこれ以上奴と口を利きたくない。

魁人はなおも力を入れてくる鈴瀬の手首をしつかりと握り、寄つてきた他の生徒を蹴り飛ばしておいてから、彼女をまっすぐに見詰めて言葉をかける。

「なあ、鈴瀬。本当は聞こえてるんだろ？ 僕のこと見えてるんだろ？ こんなことしたいだなんて思つてないんだろ？ なあ！」

次第に声を荒げていく。が、やはり反応はない。

「だあーかあーらあー、無駄だつていいーつてるでしょ？ どんなに声をかけても、あなたの声など蟻の触覚ほども届いていませんよ！ 馬鹿なんですか？ 馬鹿なんですねえ！」

「つるせえ！ てめえは黙つてろよ……」

激情に任せて魁人は絶叫する。と、銀英が振り向き、普段よりも

数倍は真剣な声で言つてくる。

「魁人、気持ちはわかるけど怒りや憎しみを覚えるのはダメだ。そういう感情は呪いになる。だから巳堂の言葉は聞かない方がいい」  
「そうは言つが、怒りを抑えることはできても感じないようにするなんて不可能だ。それに巳堂の言葉は嫌でも耳に入つてくる。

「くくく、そおーだ！ 一つだけ感情を取り戻せる方法を教えてあげましょうか？ そおーれはですねえ、殺してあげることです。殺される寸前に『憎しみ』や『怒り』といった呪いの素となる感情を取り戻してあげられるのですよー！ さあ、早速殺つてみなさいっ！」

殺したいほどムカつくが、無視だ。

「大丈夫。俺は鈴瀬やみんなを殺したりなんかしない。だから安心しろ。そして呪いなんかに負けるな。体の蠱を追い出すんだ。その後は俺が、俺たちが必ず何とかするからだ」

怒りの感情ができるだけ押し殺し、魁人は優しい口調で鈴瀬に言った。

絶対に声は届いていると信じて、言つた。

内容は正直月並みな頭の悪いものだと思つ。元から用意してきたものではなく、こんな時に咄嗟に出した言葉なのだから仕方がないだろう。だが、その分そこに演技などはなく、魁人の素の想いが込められていた。

鈴瀬の口は動かない。首を絞めようとする力も弱まることはない。瞳も、相変わらず光を失つたままだ。  
だが

彼女の頬を、一滴の雫が伝つた。

「！？」

彼女の目には涙が浮かんでいたのだ。まさか自分の言葉に感動したわけではないだろうが、確かに彼女は泣いていた。

いや、彼女だけではない。

見える範囲だが、他の操られた生徒全員にも微かに田の端に水滴が見て取れた。

(何だ、やっぱり聞こえてたんじゃないか)

魁人は静かに俯く。

「おい、巳堂。見えるか？ こいつら泣いてるぞ？」

それはからうじてステージまで行き渡る声だつた。

「苦しいんだ。みんな苦しんでるんだよ。てめえのふざけた実験のせいで、みんな泣くほど苦しい思いをしてるんだ！」

自分の言葉は、彼女たちの『苦しみ』を表面に引き上げることに成功した。それだけでも効果があつたことに、魁人は喜びさえ覚えた。しかし巳堂は、

「泣いてる？ いいーや見えませんねえ？ 人形が泣くはずないじゃないですかあ？」

見えないのは当然だ。ステージからは距離があるし、何よりあの炎壁が視界の邪魔になる。

だがそれを知った上で、魁人は見えている」と前提に問い合わせかける。

「一つ訊く。てめえは仮にも先生だろ？ こいつらが泣いているのを見て、何とも思わないのかよ？」

「だあーから人形は泣かないって言つてるでしょう？ まあ、仮に泣いているとすれば、思うところはあります。それは凄く、実に、絶対に、蠱にしてしまいたいほど興味深いですねえ！」

プチン

魁人の中で、何かが切れる音がした。

周りが沈黙する。違う。魁人の聴覚が音を拾わなくなつたのだ。

代わりに聞こえるのは、サーー、という自分の血液の流れでも聞

いているよつた音。しかし聞いていて心地のよくなる音色は、確実に体のある一点へと集中していく。

魔眼へ。

頭を上げ、カツ、と目を見開く。

瞬間、周囲の者には青色の光が漏れたように見えたことだらう。そこには、蒼海の「」とく深く澄み渡つた青の瞳が凜然と煌めいていた。

その魔眼に映るのは、鈴瀬の体内に宿る一匹の蜘蛛。

「 消えろ」

ぼそりと呟いた瞬間、見えていた蜘蛛の光が歪み、そして爆ぜるように跡形もなく綺麗に霧散した。

続いて鈴瀬の瞼が落ちたかと思うと、彼女はそのまま弛緩し、糸が切れたようなくぼ人の胸の中へと倒れ込んだ。

## 四章 悪魔の視力（9）

とてつもない魔力の高まりを、月夜は魁人から感じていた。

（殺した！？）

一瞬、倒れた鈴瀬を見てそう思つてしまつたが、魁人が彼女を抱えて体育館の隅へ運んでいるのを見てそれを否定する。

彼女はまだ生きている。だが、月夜には何が起こったのかまだわからなかつた。ステージの上では已堂もあんぐりと口を開けて固まつていて。『開いた口が塞がらぬ』といふ言葉を絵に描いたような姿だ。

すると、紗耶を葵とリクに任せた銀英が他の生徒たちを押し除けながら駆け寄ってきた。

「会長、一体どうしたんだい、魁人は」

「……さあ？」

月夜は首を捻ることしかできない。

魔眼の煌めきが増したことはわかる。まるで本来の力でも開放したような変化だった。

（本来の、力？）

この眼は悪い魔法使いを倒せるほど凄い

魁人が夢の中で聞いて思い出したという言葉。あれがそうなのだろうか？ だつたら、それはどんな力だろう。

見ただけで殺せる『バロールの邪眼』、見たものを石に変える『石化の魔眼』、相手に不運をもたらす『妬みの眼差し』など、魔眼は強力なものから微妙なものまで様々だが、たつたあれだけのことでは判断できない。今のところ、『バロールの邪眼』が一番近そうであるが……。

その時、蒼い光が爆発した。

魁人の魔眼からではない。それとは別種の熱を持つた輝き 紗耶の炎だ。

その爆発に吹き飛ばされたように、葵とリクが倒れ込んでくる。

「葵ちゃん！？ リクちゃん！？」

彼女たちに直接的な傷はないが、多少炎を浴びたのだろう、ところどころ火傷を負っている。

「……不覚」

葵が紗耶を睨めつつ立ち上ると、リクも同じように唸りながら身を起こす。

炎纏う日本刀を右手に、紗耶はゆっくりと月夜たちの方に歩いてくる。彼女の目には、他の生徒たち同様一滴の涙が浮かんでいた。  
「そ、そおーです！ 神代紗耶さん！ 魔術師たちをさっさと葬つてしまいなさい！ まずは、羽柴魁人からです！」

我に返った巴堂が喚いている。その声からは明らかな焦燥が読み取れた。命令通り、紗耶は彼にその焦りを植えつけた張本人である魁人へと進路を変更する。

鈴瀬を体育館の隅に寝かせ終えた魁人は立ち上がり、何を考えているのか紗耶に向かつて前進する。

だがすぐに両者とも立ち止った。その距離約十メートル。

紗耶が蒼炎龍牙を両手持ちし、大上段に構える。その刀身の炎が噴き上がるよう天へと昇ったかと思えば、炎自身が刃の形となつた。それはまるで、巨大化した蒼炎龍牙そのものみたいだった。

十メートルの距離などないにも等しいリーチ。それを見ても、魁人は逃げようとすらしない。

「魁人くん！ まさか紗耶ちゃんと戦う気！？ 無茶だよ！」

「たぶん、大丈夫です」魁人は振り向かず、「俺、何となくですけど、この眼のことがわかつたんで。それに、すぐ終わると思いますよ」

彼は言った。操られていくとはいって、あの神代家の至宝を受け継いだ紗耶に対して、『すぐ終わる』と。月夜はもちろん、銀英や葵にだってそんなことは言えないだろう。

当然のように、紗耶が先に動いた。

炎の巨刀がまっすぐに魁人目がけて振り下ろされる。「オオ」と暴風でも吹き荒れた時のような戦慄の音が唸りを上げる。

しかし魁人は動じない。微動だにしない。後ろに鈴瀬がいるからという理由もあるだろうが、恐らく、避ける必要がないのだ。月夜には、そんな気がした。

空気を焼き斬り、全てを灰燼に帰す降魔の炎刀が頭上に迫りくる。残り一鼓動で刃が届きそうになつた刹那、魔眼が強く煌めいた。途端、紗耶の蒼い炎が捻じれるように歪む。そのまま雑巾を絞りすぎて千切れてしまつたように炎刀が分離され、構成していた蒼い炎は蠅燭の火を吹き消すように空気に解ける。

「なつ、なつ、なあーつ！？」

ありえない光景に口をパクつかせる巳堂。月夜たちも、他の操られた生徒たちを相手にしながら声を出すことを禁じられたように絶句していた。

（なん……なの……）

どう考へても、見たものを殺すような力ではない。魔術を打ち消したにしては少し様子が変な氣もする。もの凄い力で引き千切つたような、そんな感じだつた。

紗耶は全く怯むことなく（正常なら怯んだろうが）、敵を討ち取れなかつたことだけを認識して次の攻撃に移行する。

蒼炎龍牙を顔の横で刺突に構え、刃の切つ先から炎線を射出。蛇が這うような複雑な軌道を持つて魁人へと襲いかかる。

「曲がれ」

魁人が呟いたのを、月夜は聞き逃さなかつた。

その呟き通り、炎線は横から暴風にでも煽られたように巳堂のいるステージの方へと進路変更した。いや、させられた。

「ひいつ！？」

情けない悲鳴を上げる巳堂の前で、炎線は炎の壁に呑まれて消失する。

紗耶が次の行動を起こす。跳躍するように床を蹴り、一瞬にして

十メートルの距離を踏破しようとする。遠距離は効かないと靈が判断したのだろう。だが

「紗耶、お前もいい加減に目を覚ませよ！」

魔眼が煌めく。途端、力が抜けたように彼女の足がカクンと折れ、縛れ、勢い余つて転倒する。彼女が完全に倒れてしまふ前に、魁人がその体を優しく抱き支えた。炎の消えた蒼炎龍牙が手から零れ、乾いた音を体育館に響かせる。

彼女の体から紫色の靄が湯気のように出てくる。数瞬の間を置き、他の生徒たちも脱力したように倒れ、全員から同じ瘴気のようなものが抜けていく。それは、『親』である靈の完全消滅を意味していた。

フツ、と吹き消したように炎壁も消え去る。その奥には、この世の終わりでも見たような顔をした巳堂が立つたまま震えていた。

「会長、魁人の眼なんだけど、まさか」

「あ、銀くんも気づいた？」

一番近くで倒れた女子生徒の安否を確認している銀英に、月夜は魁人から目を離さずに考えを述べる。

「最初は魔術を打ち消したんじゃないかなって思つたんだけど、違う。魁人くんの眼は、どうも魔力を操作してるみたい」

それもただ術を方向転換させたりするだけではなくて、炎刀を消した時のように、込められた魔力を捻じ切つてバラバラにしたりすることもできるようだ。

月夜は知っていた。あまり詳しいことは載つていなかつたが、目を通していた資料の中にそういう魔眼の存在が書かれていた。

見える魔力を、術者の意思を上から書き換えて、操作する魔眼。

その名は

「『<sup>デモンズサイト</sup>悪魔の視力』。魁人くんの眼は、きっとそれだよ」

良い悪いはともかくとして、魔術師相手なら最強の部類に入るこ

と間違いない魔眼。

「危険？」

葵が僅かに首を傾げる。

「大丈夫……と思いたいところね」

「『悪魔の視力』ねえ。『バロールの邪眼』みたいなものじゃなくてよかつたんじゃない？」

銀英は立ち上がる。彼が診ていた女子生徒もそうだが、皆多少の怪我はしているも無事のようだつた。

月夜は一度皆を見回し、そしてステージの上に立つ白衣を見やる。

「何にしても、魁人くんのおかげで蠱術は失敗したみたいね」

完全に勝ち誇った笑みを、彼女は浮かべていた。

## 四章 悪魔の視力（10）

ステージの上からの眺めは実に痛快なものだつた。

そう、さつきまでは。

「何、なんですかアレはあ！？」

巳堂は声を荒げるほかなかつた。切り札だつた神代紗耶が得体の知れない力に敗れ、炎の壁もあの通り焦げ痕だけ残して綺麗になくなつてゐるのだ。もう自分を守るものがない。

他の操つていた生徒たちも倒れてしまつて動かない。あれが死んでいるのかどうかはここからではわからないが、恐らく死んでいなさい。

死んでいるのなら、殺した者に呪いがかかつてさらなる殺戮を始めるはずである。何もないということは、全員生きているということだ。

「アレが、あの魔眼の力だというのですかっ！？」

怒りや憎しみの感情を膨らますための言葉が、眠つていた魔眼の本質を目覚めさせてしまつた。自業自得とはこのことである。

生徒会魔術師たちと、羽柴魁人がこちらへと向かつくる。今一度、神代紗耶に仕込んだ『親』に意思を送つてみるが、結局は無駄だつた。

「本当に、蟲と私のリンクが切れたよーですねえ。やはり、術は失敗…………くく、ははははははははあ！ 許しません！ 許しませんよう！！」

人間の蟲を作るという自分の夢を、奴らはぶち壊しにした。魔術師を蟲術に使おうという欲求を出したことが間違いだつた。いや、あの場で羽柴魁人を殺すか操り人形にしておくべきだつたのだ。そうすれば生徒会魔術師たちには何もできなかつたはずだ。時期を置けば再び人間で蟲術をすることはできる。だが、そのためにはまずここから逃げ出さなくてはいけない。しかし、ステージ

側に外へ続いているような出入口がないのは痛い。

(このまま逃げる？ 私が？ くく、それもああーりでしようが、私の受けた屈辱を生徒会の連中に返さなくてはいけません。具体的に一文字で言えば、『死』で)

しかし、もうストックしていた蟲はほとんど使い果たしている現状。残りは、白衣のポケットに忍ばせている小瓶の中に一体のみ。（できれば、これは出したくない失敗作だったのですが……この際しううがありませんねえ）

脣がニイヤリと歪む。

(どおーセもうちこの学園にはいいーられないんですからあ、最後は派手にいきましょつかねえ)

眼鏡の奥の瞳に狂気めいた色を宿し、巴堂はポケットの『失敗作』を握り締める。

## 四章 悪魔の視力（11）

巴堂が何か取り出した。

例の蠱を入れておく小瓶だ。昼間に見たものより少し大きめで、封印の札らしき紙が何重にも巻かれている。

だが、中身までは魁人には映らない。それは今の魔眼の状態でも変わらない。

不思議な感覚だった。

この眼に見える魔力の光が、何となく思い通りになるような気がしたのだ。まるで魔眼自体に知識があつて、扱い方を脳に直接レクチャーブってくれるような、そんな感覚。

だから、鈴瀬を苦しめている蜘蛛に消えてほしいと思った。そうしたら眼に強い力が感じられ、本当に思い通りになったのだ。

そういえば、一昨日もこんなことがあった。貝崎に殺されそうになつたあの時だ。

魔力が見えるだけと聞いた時の違和感。その正体に今自分は触れている。

この眼は悪い魔法使いを倒せるほど凄い

夢で聞いたことを自分の言葉に直したものだが、確かに凄いと思つた。もしかしたらあれは魔眼が見せた夢で、父はそんなこと言ってなかつたのかもしれない。

とにかく、今の魁人は魔術師相手に負ける気がしなかつた。

「ステージから降りろよ、巴堂。そこは観客席じゃないんだ」

特に巴堂には絶対に負けない。負けられない。傍には先輩たちだつてついている。

「なあーにを言つてはいるんですかあ！ 私はここでいいーんですよ、

主役ですから」

「巴堂先生こそ、今さら何を言つてゐる？ 蠱術は失敗に終わつたのよ？」

月夜は彼をまだ『先生』と呼んでいるが、そこには敬いの気持ちなど欠片も見当たらない。敬語じやないのがその証拠だろう。寧ろその『先生』には皮肉めいたものを感じる。

「ええーそーですよー！ あなたたちのせいでもちやくちゃです！ ですが、それはあなたたちを術に組み込もーとした私の責任。よおーって、あなたたちを、いえ、もうこの学園」と殲滅することで責任を取らせてもらいます！」

巴堂は小瓶の蓋代わりになつてている札を剥がす ことはしないで、そのままステージの上から勢いよく投げ捨てた。床に激突し、パリイン！ と高い音を立てて小瓶は粉々に砕け散る。その瞬間、毒ガスのような紫色の靄がぶわっと噴き上がった。

「！？ みんな、離れるんだ！」

それを見た銀英の叫び。魁人たちは頷くこともせずに従い、体育馆の中央線を越えた辺りで足を止めて振り返る。と、そこには塔が建っていた。

否、塔ではない。そう思つてしまつほど、巨大な何かだった。

ゆつくりと見上げていく。

まず、茶色い毛に覆われたハ本足の土台があつた。蜘蛛としか表現できないそれは、その時点でブルドーザーのような巨大さを誇っている。

次に、本来は蜘蛛の頭がある場所から黒いものが垂直に生えていたのが見えた。それは心なしか人の形を いやもう人間の上半身そのものである。ボディービルダーも靈んで見える筋肉質な肉体は、その巨大さと全身が影を物質化させたように真つ黒だつたことから人間のものではないことはわかる。

さらに見上げると、二つの血色に鈍く光る目があつた。その上の禿頭からは、トリケラトプスのような三本の太い角が突き出している。

一言で表すなら『鬼』だが、下半身は蜘蛛だ。ついでに言えば、背中にカラスみたいな翼が右翼だけ生え、左翼があるはずの場所に

は昨日見たような大百足らしき物体がうねっている。

「何だよ、あれ……やつぱり蟲なのか？」

襲つてくる吐き気や恐怖を抑え込み、魁人は煌々とする魔眼での怪物の魔力をスキヤンする。すると、他の蠱と同様に、全身に隈なく行き届いている魔力の光を確認できた。それに、これも他と同じだが、魔力の核と思われる炎や光球は見当たらない。

「あわか魔獸を使つた。靈たよまさかも手を出してはいたと思つてなかつたねえ」

怪物を見上げる銀英の頬に冷や汗が伝つ。月夜や葵も、ヒーロー物にでも出てきそうな怪獣的存在を前に動けないでいる。それほどまでに危険な気配を　いや、もう見ただけで危険だと判断して脳内が警報を鳴らしている。

「あんなのに暴れられたら、学園とJNが街ごと壊滅しかねない……」最悪の事態を想像してしまったのか、月夜の声は震えていた。

葵は普段通りだが、そこに余裕は感じられない。

すると、ステージの上の巴堂が堰を切ったように笑い始める。

！ どおーですどおーですか！ これぞ私の最強の蠱にして最大の

失敗作！

魔獣を使つた靈は絶対に制御できないから禁忌。銀英の矢照作一矢には制御できなかつてござんまい。

たことを魁人は思い出した。巴堂はどれだけの禁忌を破れば気が済むのだろうか。

「そのとおりです！　しかあーし、そんなことはどうでもいいんですよー。この失敗作は、置土産としてあなたたちにプワー・レゼントする　！？」

その時、魔獣の蠱が動いた。

声を張り上げる巴堂を鬱陶しく思つたのか知らないが、あの怪物は鬼の上半身を捻つて血色の田に巴堂を捉える。

巳堂は短く悲鳴を上げて怯えるように後ずさる。

「なつ、何、です。わ、私は主人ですよ！　あなたの敵は向こうです！　さ、さあー、奴らを殺しなさ

」

巳堂は、命令を最後まで言うことができなかつた。

怪物が大木のごとき巨腕をスイングし、クレーン車でビルを破壊するように巳堂ごとステージや壁を粉碎したのだ。

一瞬だつた。巳堂が何かを思う暇すらなかつただろう。

ステージは抉られ、後ろの壁に穿たれた大穴からはすっかり暗くなつた空が覗いている。腕のリーチが壁を貫通するほどあるわけではないが、衝撃で吹き飛んだのだと思われる。

抉り取られたステージに、白衣の姿はない。外まで吹き飛んだのか、粉々になつたのか、何にしても生きているとは思えない。

魔獣の蟲にとつては耳元でうるさくするハエを掃つただけだらう。そして、奴にとつてのハエは巳堂だけではない。次なる排除対象は目の前にいる魁人たちである。と

ヴウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオオオオオツ！！

吠えた。空気を吹き飛ばすよつた超音波が体育館全体を振動させる。音波が衝撃となつたのか、音源に近い窓ガラスは次々と割れ、壁や天井からはパラパラと細かな破片が落ちてくる。

目眩がするほど強烈なハウリング。咄嗟に耳を塞いでいなかつたら危なかつた。意識のない生徒たちは大丈夫だらうか。

「みんな、大丈夫？」

月夜はフラフラしながらも皆の無事を確かめる。

「ま、何とかねえ」

「大丈夫」

銀英や葵、人間よりも聴覚が発達してそうなリクも問題はなさそうだ。魁人も大丈夫だということを月夜に伝え、銀英に一つ質問す

る。

「銀先輩、巳堂が死んでも蟲は消えないんですか？」

「いや、そんなことはないはず。あのバケモノがまだ残っているのは、制御下に置かれてないものは術者が死んでも消えないってことなんだろ？ね。もしくは、まだ巳堂が生きている、とか」

「巳堂が、まだ……」

「とてもそれは思えないが、生きているとすればありがたい。一発殴ることができるから。無論、そのためには眼前の問題をクリアしなければならないが。

「あれ、倒せるんですか？」

「難しいだろうねえ。あれだけ大きいと、僕らの攻撃が効いたとしても滅ぼすことは無理そうだ。放つておいても、数日は死なないだろうし……」

「銀くん、魁人くん、お喋りしてる暇はないみたいよ」

月夜の深刻な声。あの怪物が、狙いをつけたようにこちらを見下していた。

「来る」

葵が言つた途端、八本の足が前進を開始する。背中のカラスの右翼が羽ばたき、百足がぐによぐによとうなる。出たばかりで体が思うように動かないのか、動きは意外にも鈍い。

(まづい)

それでも、これ以上ここで暴れられると皆が危ない。生徒たち全員を抱いで避難させるには、あまりにも人数が多くすぎる。

月夜たちではどうも倒せそうにない。ならば

「俺が、やるしかない！」

意を決し、魁人は怪物と対峙するように一步前に出る。どれだけバケモノじみていても、あれだって『蟲』であることには変わりはないはずだ。だったら、鈴瀬や紗耶に取りついていた蜘蛛を掃ついた時のように、この眼で消せる。消してみせる！

月夜たちは魁人の意向を汲んでくれたのだろう、三人とも何も言

わざに見守っている。ただ何があつてもいいように、月夜はチヨークを、銀英は護符を、葵は短刀をそれぞれ握っている。

意志を強く持ち、魁人はバケモノの巨大な魔力をその眼で捉える。そうしたところで、思う。

( 消えろ! )

カツと見開くと同時に魔眼が青く煌めく。魔獣の蟲が動きを止める。

しかし

「!?

バケモノは、バケモノの姿のままでそこに健在していた。

「き、消えろ！ 散れ！ 捻じれろっ！」

声に出すことで意思を明確化させるが、言葉を連ねるごとに魔眼は煌めくものの、どうしても蟲を消滅させることができない。

(まさか、魔眼が元に戻ったのか？ それとも思うだけじゃダメだったのか？ いや違う)

蟲の魔力は間違いなく歪んでいた。それが見えていた。だが、歪んだ箇所はほんの一端、すぐに復元してしまった。

「あいつが……でかすぎるんだ」

巨大且つ強大な魔力の塊を動かすには、魁人の意思や力はちっぽけすぎたのだ。蟲術で魔獣を禁忌としているのは、絶対に制御できないから。つまり、制御できないほど強力なものができてしまうということだ。

自分ではあれを倒せない。消すことができない。せっかく『悪い魔法使いを倒せる力』を手に入れたのに、肝心な時に意味がなくなつた。

どうしようもない絶望感が魁人を襲う。

と、魔獣の蟲が唸り声を上げる。背中の翼を揺らし、百足をくねらせ、まるで今しがた自分の身に起こった些細な違和感を確認するように腕を回す。そして動けることを知った途端、魔獣の蟲は蜘蛛の足を這わせて移動を再開しようとした。

超特大のルーン陣に取り囲まれた。

次の瞬間には、純白の光糸が無数に陣から飛び出し、魚を網で捕えるようにその巨躯を強く拘束する。

「大丈夫、魁くん？ もしかして魔眼の調子が悪いの？」  
月夜が心配を含んだ優しい声をかけてくる。彼女はあれを囮むほどの巨大な陣を描いたのだから、残りのチョークは全て使い果たしているかもしない。

魁人は忌々しげに蠱を睨め上げ、

「たぶん、違います。あいつ、でかすぎて俺の魔眼が効かないんです」

「だつたら、少し弱らせればいいんじゃない？」

その声と同時に、数枚の札が紙にしてはありえない速度と正確さで宙を駆けた。それが蠱へと貼りつく寸前、札が岩塊の槍へと変化して鬼の上半身に突き刺さった。血のよつた黒い液体がそこから流れ出る。

悲鳴のような咆哮が上がる。しかし、魔獸の蠱にしてみれば岩塊の槍など爪楊枝にも等しい。そんなもので殺されるはずもなく、拘束を解こうともがき始める。そこへまた護符が飛び、糸に絡まれながらも暴れようとする腕にピタピタと貼りつくり、両腕合わせて計六回の爆発が動きを禁じた。

槍や爆発で輝く糸が切れるのではと思ったが、ルーンの魔術はルーン文字が生きているかぎり有効。糸での拘束も持続された今まである。

「いやあ、動きが鈍いってのは助かるね。巴堂が失敗作って言つたのはただ制御できないからってわけじゃなかつたみたいだ」

いつもの爽やかなのにどこかニヤケたように見える笑みを浮かべる銀英。余裕とは違うが、そこには勝機が見えていたようだった。

「リク、 絶氷の息吹」

葵の咳くような指示。リクはそれに『がうつー』と答え、蠱の顔面に向けて絶対零度の白い息を吐き出す。束縛されている蠱にそれを防ぐことはできず、直撃して頭部付近に霧のようなものが発生する。

「協力して、倒す」

相変わらずの無表情だが、確かに彼女の言う通りだろう。自分はあれを倒せる可能性を秘めた眼を持つているが、強大すぎる力の前では無駄に等しい。生徒会魔術師はあれを滅ぼすことこそできないが、力を削ぐことならできる。

が

ヴウ オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
オオオオオオオツー！

凍つて いると思われた頭部から再びあの超音波が発せられる。割れていなかつた窓ガラスがガタガタと揺れ、魁人の全身にはビリビリと痺れるような感覚が行き渡る。

今度は、耳を塞がなかつた。周りの音が何も聞こえなくなり、頭  
がくらくらして意識が途切れそうになる。たまらず膝をつく。月夜  
たちも、同じように跪かされていた。

を睨む。

魔獣の蠱の頭部は凍つてなどいなかつた。それどころか、今の音波の衝撃でローンが吹き消えて輝く糸が消失し、自由になつた腕で突き刺さつた岩塊の槍も抜いていく。

全てを抜き終わると、今度はこちらに向けて大口を開けた。その奥に、赤い輝きがあるのを魁人は見た。

するつもりだ、と思いかけた瞬間に答えを知る。魔獣の蟲は、その大きく開いた口から火炎を吐き出したのだ。

迫りくる灼熱の吐息。月夜たちはまだ動けないでいる。

「くそつ！」

思いつ切り目を見開いた。すると、魔眼の煌めきに合わせて火炎放射は根元から四方に爆ぜて消滅する。まだ、あの程度なら魔眼は有効のようだ。

だが、今のは防げても、本体を消せないことは意味がない。炎は効かないとわかったのか、やはりゆっくりとした、しかし先程よりも速い歩行で魔獣の蟲が迫りくる。

絶体絶命、いや、もう終わりだ。

そんなことを思つてしまつた。思つてしまつと、全部諦めてしまう方向へ思考が走つてしまつ。ダメだ、と抑制しても、絶望の念は止まらない。

そんな時だった。

「まったく、うつむいのよアレ。目が覚めちゃつたじゃない

背後から、不機嫌そうな少女の声が聞こえてきたのは。

忘れていた。酷い話だが、魁人はすっかり存在を忘れていた。生徒会の魔術師は月夜たち三人だけじゃなく、もう一人、最高の退魔師がいるということを。

「紗耶」

そう、先程まで蠱に意識を奪われていた神代紗耶である。どちらかといえば、忘れていたというよりはもう戦えないと思い込んでいた。

右手に退魔の日本刀を握り、長い黒髪を左右に揺らしながら凛然と歩み寄つてくる彼女は、迫りくる異形を見て眉を顰めた。

「で？ 何なのアレ？ ていうか今ってどういう状況？」

やはり操られていた時の記憶はないらしい。

「説明は後よ、紗耶ちゃん。とにかく、あれをどうにかできるかな？」

「月夜先輩、あたしは蒼炎龍牙を受け継いだ神代の退魔師ですよ？ あんな魔獣の詰め合わせみたいなやつ、すぐに燃やせなくてどうするんですか？」

言つやいなや、蒼炎龍牙に蒼い炎が点火。紗耶はあの怪物目がけて床を蹴り、疾走する。

あんなバケモノを前に全く臆さない自信家な彼女を見ていると、何か本当に呆気なく終わつてしまいそうな気がしてきた。

疾走する紗耶に向かつて巨腕が振るわれる。体育館の壁を紙切れのように破った拳を、彼女は横に跳んでかわす。ドゴオ、と豪快な音を立てて床に爆弾でも落としたような穴が穿たれた。

それによって発生した衝撃波はものとせず、紗耶は蒼炎龍牙から炎線を放つ。まるで生きているように空中を蛇行するそれがパンチを繰り出した巨腕に巻きつくと、一瞬のうちに肩まで炎上させた。悲鳴の咆哮を上げ、魔獣の蠱は腕を振つて炎を消そうとする。し

しかし破魔の力を持つた蒼い炎はなかなか消えることはない。その間に紗耶は刀身の炎を極限まで膨張させ、魔獣の蟲とほとんど変わらない刀身の炎刀を形成。操られていた時など比べ物にならないくらいの魔力がそこに込められている。

気合いと共に巨大炎刀を振るう。全要素を破魔の劫火で構成されているそれは、魔獣で作られた靈など何の苦もなく一刀両断することができなかつた。

魔獣の蟲が火炎放射を吐き、炎刀の一撃を受け止めたのだ。  
炎と炎。物質化されていないプラズマは均衡することなく混ざり  
合い、互いの性質が違うためか大爆発を起こす。

流石の紗耶も今度ばかりは爆風に堪えられなかつた。顔を腕で庇つて多少は踏ん張つていたものの、すぐに『きやつ』と小さな悲鳴を発して台風の日のくず入れみたいに何メートルも床を滑つていく。その間、彼女は絶対に蒼炎龍牙を手離さなかつた。

今の爆発は蟲の方にも影響がありそうだつたが、質量が半端ないことと蜘蛛の土台が安定したものだつたために転倒はしていない。しかしダメージは負つたらしく、衝撃波が直撃したと思われる顔を両手で押さえて人間みたいに唸つてゐる。

ようやく立つことのできた魁人が彼女に駆け寄る。自分が彼女の下へ行つたところで仕方ないとと思うが、もし打ちどころが悪くて気絶でもしていたら大変だ。

まあ、そんな心配は杞憂だつたが。

「フン、大丈夫に決まつてゐるでしょ」紗耶は上体を起こし、「それより邪魔よ。何であんたがここにいるのか知らないけど、魔力が見えるだけのやつがいてもしょうが……？」

魁人の顔を見た紗耶は、両眼の異常な煌めきに目を丸くする。

「あんた、何、その眼？」

「ああ、悪い魔法使いを倒せる眼だ！」

魔眼の名前をまだ知らない魁人にはそう答えるしかなかつたが、紗耶にはどうも気障っぽく聞こえたらしい。

「何よそれ、かつこつけたつもり？」銀英くらいムカつく台詞なんだけど

今さらだが、いつもの紗耶だということに安心する魁人。もつとも、こんな時でなければこちらも腹を立てていたかもしれない。

「わかりやすく何ができるか言つてやるよ。あのバケモノが弱れば瞬殺できるんだ」

「それ、本当？」

「ああ、俺の眼力舐めんなよ」

つい数十年前までは自分の眼の非力さを嘆き、さつきは覚醒した力が通用せずに絶望しかけていた魁人だが、今は違う。とてつもない力を手に入れた、紗耶の復帰と共にその喜びも蘇っていた。つまり、彼女の存在が自信を取り戻してくれたのだ。

紗耶は笑つた。面白そうなものでも見つけたような含みのある笑みだつたが。

「わかつたわ。それじゃあ、あなたの眼力ってのを見せてもらおうじゃない」

すつと紗耶は立ち上がる。同時に魔獸の蟲も顔面を包んでいた両手を外し、血色の両眼で紗耶と魁人の姿を捉える。

紗耶が燃える刀を携えて怪物へと近づいていく。

そんな彼女を向こうで月夜は不安そうに、銀英は口元に笑みを浮かべ、葵はやっぱり無表情で、リクは静かに、見守つている。

魁人は、全神経を魔眼に集中させて敵の魔力を凝視。あとは紗耶があれを弱めてくれるのを待つだけである。

魔獸の蟲が咆哮する。

紗耶は精神を集中させるように小さく長く息を吐く。そして、狙いをつけるように刀を床と水平に構え、

「火線術式」

刃の切つ先から火炎を射出。蒼く揺らめく線が空中に引かれてい

く。それは疾風の「」ときスピードで蠱を一周すると、続いて上へ、下へ、左へ、右へ、さらに一周と様々に、そして複雑に軌道を変え、艦のように蠱を取り囲む幻想的な紋様を描き上げた。

周囲を囲つた炎線に戸惑つてゐるよう魔獸の靈は首を左右に振る。が、決してそれには触れようとしない。破魔の炎に触れるとどうなるかはさつき腕に受けた一撃で、いや、本能的に思い知つているようだ。

「炎禍淨葬」

炎の紋様が燐然と輝く。刹那、中に封じ込まれた魔獣の靈の足元から蒼き炎が螺旋を描きながら噴き上がった。天へと昇る蒼い火龍が魔を喰らう、そんな光景だ。

凄まじい熱量が艦の中でのみ爆発する。大概の魔獸はこの一撃で灰も残らないだろうが、相手は幾多の魔獸が融合したような存在だ苦しみもがきはするも、消滅する気配はまるでない。

実に破魔の炎は敵の魔力を削っていく。

魁人の眼には、その様子がはつきりと映っていた。

そして

「消え去れ！」

魔眼が、今までで一番強く煌めいた。

蒼い劫火の中にしる魔獸の靈が、波打つ水面に映ったように歪む魔力が捻じれ、千切れ、次々と爆ぜていく。

尾を引くような長い断末魔を残し、魔獣の蠱は炎に炙られながら

霧散した。

轟の最後を見届けた後、魔眼の煌めきが静まつた。

無論、紗耶が蒼炎龍牙を灯している以上、まだ魁人の瞳は青いまだつたが。

二人の下へ月夜たちが駆け寄つてくる。

「凄い凄い！ 紗耶ちゃんと魁人くん！ 最強コンビ誕生ね！」

初めて遊園地に連れて行つてもらつた子供のようにはしゃぐ月夜。当然のことく表情は満面の笑顔だつた。同感というよつて、葵も口クリと頷いている。

「いやあ、このまま付き合つたらどうだい？」

「付き合うかっ！？」

どう考へてもからかいとしか取れない言葉を吐く銀英に、頬を赤く染めた紗耶が刃を一閃。居合の達人もビックリのそれを、銀英は軽く後ろに跳んだだけで難なく回避する。

「月夜先輩、凄いのはこいつじゃなくてあたしですよ、あたし。あんな魔獸くらい、あたしなら別に一人でも片づけられましたよ」紗耶は蒼炎龍牙を左手と同化させつつそんなことをほざく。敬語なのに何かもの凄く偉そうだ。確かに彼女だけでも勝てたのでは、と思わないこともないが

「お前格好悪く吹き飛んでただろ？ キヤーとか聞こえたぞ」魁人はそう言つてささやかに復讐してみる。殴られる覚悟で。「い、言つてないわよそんなこと！ ていうか、あんたその眼になつてから態度でかくなつてない？」

「気のせいだ……あれ？」

何だろうか。今、少しくらりとした。

「魁人、どうかした？」

俯いて額を押さえる魁人に、小首を傾げた葵が心配げに声（無感情だが）をかけてくる。

「いえ、ちょっと目眩が。たぶん、何でも、ない がつ！？」

瞬間、頭をバットで殴られたような痛みが走つた。全ての魔力の高まりが消え、青くなくなつた瞳に映る世界がぐらぐらと揺れる。

「ちょ、ちょっと、ホントに何でもないの？」

紗耶の声が遠くに聞こえる。割れるような頭痛。狭まる視界。だんだんと意識が朦朧としてくる。

「魁人くん？ 魁人くん！」

ついに全身に力が入らなくなり、倒れる。

意識は闇の中。誰のともわからない声が微かに聞こえていたが、

それもプツリと途切れてしまった。

魁人は眠る。

使い過ぎた脳を休めるように、一切の夢も見ることなく、眠る。

病院といつものまではいつ来てもいい気分にはならない。

ここに来るということは、診察だろうが入院だろうがお見舞いだらうが、必ず自分を含めた身近な誰かが健康を害していることになるからだ。知り合いの医者や看護師に会いに行くといつなら話は別だが、残念ながら魁人にそんな知り合いはない。

今日は四月十六日の日曜日。

この日、魁人が学園からほど近い那緑市中央病院へ赴いたのは、診察とかではなく、お見舞いだった。

「じめんなさい、羽柴君。その、お忙しいのに、私なんかのために……」

白く清潔な病室内のベッドで寝ている鈴瀬が、申し訳なさそうにベッド脇の椅子に座っている魁人を見詰めてくる。彼女が意識を取り戻したのは今朝方らしく、この様子からして呪いは完全に解けているようだった。

「鈴瀬だつて、俺なんかのために一睡もできなかつたんだろ？　おあいこだ」

己堂に蟲を憑けられた生徒たちは、全員この病院に運ばれている。『学園の第一体育館で爆発事件が起こり、それに巻き込まれた』といふことになつてゐる。当然、鈴瀬たち体育館になど行つた覚えのない者もいるはずだが、そこは生徒会か学園の魔術師がどうにかしたのだろう、全員その理由で納得していた。

魁人は記憶を弄られていないが、魔獣の蟲を倒した後ることは全く覚えていない。というか、あの後倒れて一日中眠つていたようである。昨日が土曜日でよかつた。

田覓めた場所は病院でも自宅でもなく生徒会室だったが、そのおかげですぐに事後処理のことを聞くことができた（月夜と、意外にも紗耶が付きつきりで看病してくれたらしい）。

だから今、こうやって鈴瀬のお見舞いに来ている。

「羽柴君……なんだよね、その、私を助けてくれたの」

「え？」

恥ずかしがるように布団で口元を隠した鈴瀬が突然そんなことを言い出し、魁人は戸惑った。彼女は女子バレー部顧問もしている担任の猪井先生に用事があつて体育館に行つた、という風に記憶を作られているみたいだったが、もしかして本当は全部覚えているのではないだろうか。

「ずっと、声が聞こえてたんですね。何を言つてるのかはわからなかつたけれど、羽柴君の声が。だから私、返事しなくちゃって思つても、できなかつた」

口元を隠したまま悲しそうな瞳をする鈴瀬。返事できなかつたと言つているが、魁人はしつかりと貰つている。涙という形で。

どうやら全部覚えているというわけではなさそうなので、魁人はそのことについて何も言えなかつた。

「……えっと、ごめんなさい、変なこと言つて。たぶん、私の夢だから、その、気にしないで」

「うん、わかつた。気にしない」

紅潮した顔をさらに布団で隠す彼女を可愛く思いながら、魁人はできるだけ優しげな口調でそう言つた。彼女はその言葉にほつとしたのか、布団から顔を出して上半身を起こす。

「起きて平気なのか？」

「あ、はい、大丈夫。明日には退院できるみたいなので」

「そつか。なら、すぐに学園で会えるつてことだな。その時はまあ、もつといろんなこと話そづ。あ、梶川も入れてな」

微妙に恥ずかしい」と言つたような気がするので、親友を使つた軽減作戦を実行。たぶん成功。

「はい」

鈴瀬は、まだ薄らと朱が差した顔に輝くような満面の笑みを咲かせた。

鈴瀬の両親らしき人が面会に来たので、魁人は入れ替わりに病室を出た。

すると、そこには待ち構えていたかのように紗耶が腕を組んで壁に凭れかかっていた。思いつ切り私服の魁人と違って、彼女は学園の制服を着たままだ。

「何でお前がいるんだ？」

素朴な疑問。紗耶は『別にいいでしょ』と言つてブイツと顔を背ける。被害者の中に親しい知り合いでモいて、お見舞いついでに自分を待つていたのだろうか？……ありえない。

とりあえず、このまま立ち話をしても迷惑なので一人並んで病院の外を目指す。

「で？ どうだつたの、あの子？」

歩きながら、彼女はそう訊いてきた。被害者が心配だということは間違いではないようだ。

「ああ、明日には退院できるつて。呪いに後遺症とかなくてよかつたよ」

「巴堂が呪い殺すつもりで蠱を使ってたら助からなかつたかもね」  
あたしも含めてだけど、と彼女は魁人にも聞こえない声で付け足した。

「そうだ。まだ聞いてなかつたけど、その巴堂はどうなつたんだ？」

やつぱり死んだのか？」

言つと、紗耶はゆつくり首を横に振つた。どうやらあれで生きているらしい。なんとしづといやつだろう。でも、これで一発と言わず三十発は殴れる。こっちの手が死ぬだろうけど。

だが、魁人のそんな希望は叶いそうになかった。

「あいつは、あいつを追放した巫蠱術の一族に引き渡したわ。既に九割ほど死んでたけど、残り一割を向こうで処分するんでしょうね」  
巴堂は禁忌を一つも破つていたのだ。その一族とやらも生かして

おくことはしないだろ？

自分の呪術で作り出したものに殺されかけた巴堂。人を呪わば穴

「一つとはこのことだ。

「そういえば、紗耶は検査入院とかしなくてもよかつたのか？」

「番強いのを入れられてただろ？」

「フン、あたしを誰だと思つてんのよ。一般ピーポーと一緒にしないでほしいわね」

まあ確かに、この様子だと全然問題なさそうだ。

「それもそうか。つーか、この病院もよく黙つて四十人近くも受け入れたよな。やっぱり生徒会が何かしたのか？」

「あんた、やつぱり何にも知らないのね」

「？」

「いい？ 世の中の偉い人にとって、オカルトってのは常識の範囲内なの。風水とか気にする社長つてけつこういるでしょ？ この病院もそう。学園と連携を取つて、今回みたいなことがあつた時のために備えてるのよ。まあ、呪いはすぐに対処できなかつたみたいだけど」

なるほど、だからここは学園から田と鼻の先にあるのか。

知らなかつた裏世界の事情がまた一つ。もつ後戻りはできないだろ？

もつとも、立ち向かうと決めた以上、戻る気はないのだが……。

鈴瀬の病室は五階だったので、階段を使わずエレベーターで降りる。一階のボタンを押すと扉が閉まり、密室となつた空間で魁人と紗耶は一人きり。

「……一つ、確認していい？」

エレベーター独特の落ちていく違和感を覚え始めた時、気まずくなりかけた空氣を壊すように紗耶がそう言つてきた。

魁人は脳内に疑問符を浮かべて首を捻る。彼女が自分に確認するようなことなどあつただろうか？

「月夜先輩から全部聞いたんだけど……、あたしを『靈』の呪縛か

ら解放してくれたのつて、間違いなくあんたなのよね？」

紗耶は魁人を見ていない。顔を背け、というより体ごと後ろを向いている。艶やかな黒髪の隙間から覗く耳が、心なしか赤く染まっているように見えた。

「まあ、そうなるな。『悪魔の視力』だけ？　この眼があつたからこそなんだけど」

自分があの後ぶつ倒れたのも、力を使つた代償のようなものだと聞いた。魔力を操作するということは、込められている術者の意思を上から書き換えるということで、脳への負担がとんでもないらしい。まだ偏頭痛がするも、一日寝込むだけで済んだのは月夜と紗耶の看病のおかげだろう。一応礼は言つたが、もう一度言うべきかもしれない。

「そ、そうよね。あんたの眼が凄いのよね。今は魔力操作できないみたいだけど」

そうだ。目が覚めてから月夜たちに実験的な感じで魔眼を試されたが、いつも通り、ただ『見える』だけだった。あの時みたいに思い通りになりそうな感覚はしなかった。

月夜曰く、あの時のように感情が異常に高ぶつていたり、危機的状況だつたりと、特殊な状況下でないと発動しないのではないかとのこと。危機的状況にさせられてまでテストすることは流石になかつたが、実際、自分でもそうじやないかと思っている。

「魔眼は凄い。でも力は使えない。弱いあんたのまま……それで

も

「？」

紗耶が妙にもじもじしている。その姿は何か彼女らしくない。トイレにでも行きたいのだろうか、と魁人はベタなことを適当に考えて浮かんできそうだった妄想を排除する。

「あり

紗耶が小声で何か言いかけた時、ピンポン、とドアホンのような音が鳴る。見ると、回数表示の『1』が点滅していた。静かな音

を立てて扉が左右に開く。

「それでも、何だよ？」

エレベーターを降りる前に問いかけると、彼女は一人さつさと早足で歩き出した。慌てて後を追う魁人。

自動ドアを潜り、病院の外へと出る。すぐそこは短い階段と入口一フになっていた。

「おい、紗耶」

「それでも！」

階段の前で紗耶は立ち止まると、振り向かず強い口調で、言ひつ。

「礼は言わないわよ！」

「……いや言えよ。ていうかそれ文章繋がってるのか？」

少しムカつときたが、あまり怒鳴ると偏頭痛が発動してしまう。前にもこんなことがあつたような気もするが、まあ、この方が紗耶らしいと言えばそうだろう。

「あーもうーうつさい！『じちや』『じちや』言つてないで行くわよ、魁人」

「そつちから言い出したんだろ？ それに行くつてどこに ん？」  
今初めて紗耶に『あんた』ではなく名前を呼ばれたような気が…  
…否、絶対に呼んだ。それはつまり、少しばし自分の存在を認めてくれたつてことなのだろうか。と

「いやあ、何かもうアレだねえ。うん、お熱いつてやつ」「  
聞き覚えのある男性の声。視線を紗耶からずらすと、階段の下に見知った顔が三人と一匹。

午後の日差しの下、生徒会魔術師の面々がそこに揃つていた。

月夜はにこやかに笑いながら手を振り、銀英はニヤニヤとしながら魁人と紗耶を眺め、無表情の葵は子犬リクをぬいぐみのよう抱いている。三人とも、紗耶と同じく制服姿だった。

日曜でも生徒会は活動しているのだろう。創立者際も近いことだ

し。

「えーと、先輩たちが何でここに？ 誰かのお見舞いですか？」

とりあえず銀英の冷やかしのような言葉は置いといて魁人は訊いた。そうすると月夜が手を振るのをやめ、

「あははー、違う違う。私たちは魁くんに用があるのよ」

「俺に？」

魁人が自分を指差すと、月夜は首を傾げた。

「あれ？ 紗耶ちゃんから何も聞いてないの？」

魁人は紗耶を見る。しかし、彼女は目を合わそうとせず階段を駆け下りていく。仕方なく、魁人も月夜たちの前まで下りていった。

「話はしましたけど、何のことですか？」

巴堂のことか、魔眼のことか、それとも紗耶がエレベーターで言おうとしたことか……。

「私たちはね、改めて魁くんを生徒会に誘いに来たの」

どれも違つた。だが一番納得できることだった。

少し前の魁人なら『お断りします』と即答していただろうが、今回はそうしなかった。

「僕らは諦めないって言つただろ？ 簡単に発動できなくとも、『悪魔の視力』なんて力を野放しにはできないからねえ。というか、魁人が入ってくれれば僕の仕事が楽にな いたたた、痛い痛い葵さん耳引っ張んないで取れるから！？」

「銀、サボるな」

葵の無表情から放たれる無感情な声は、なかなかに恐怖するものがあつた。ついでにリクも吠える。そんな彼らのやり取りはさておき、月夜が説得するように言つてくる。

「今回のことでわかつたと思うけど、魁くんの力は魔力操作じゃなくても役に立つの。寧ろ魔力操作は負担が大きいから使えなくてよかつたのかな」

メイザース学園の生徒会ならこの眼を誰かのために使える。生ま  
れて十五年、何の役にも立たなかつたこの眼が、だ。

前に銀英から聞いた話が本当なら、学費免除に加えて給料も多少出るらしい。丁度、アルバイトを探したいと思っていたところでもある。

「どう、魁くん？ 生徒会に、入ってくれないかな？」

「俺は――」

自分は魔術の世界から逃げられない。だから立ち向かうと決めた魁人。その答えは

「生徒会には入りません」

月夜の笑顔が固まつた。銀英と葵の動きも止まる。

「はあ！？ あんた今さら何言つてんのよ！？ ここまで来たんだつたら空氣読んで入りなさいよ！」

紗耶は振り向いたかと思えば眉を吊り上げて怒鳴ってきた。彼女は反対派だったはずではなかつたのか。　ああ、だから言い出せなかつたのか。

唾を飛ばす勢いでまだ何か叫んでいる紗耶は黙殺し、魁人は頬を搔きながら月夜に告げる。

「いや、えっと、生徒会には入りませんけど、協力はするつもりです」

「だつたら何で入らないの？」

「ほら、生徒会って表の仕事があるじゃないですか？ 俺、流石にそこまでやるつもりはないんで」

生徒会はあくまで生徒会なのだ。忘れてはならない。学費免除は魅力的だが、自分の時間というものが極端に減つてしまつのは御免である。それは彼女たちの姿を見れば一目瞭然。土日はもちろん、夏休みだって削られる。

「いやあ、わかつてるねえ、魁くん。普段の仕事は僕もついサボりたくなつちやうからねえ」

銀英が共感するように何度も頷く。紗耶が『馬鹿じやないの？』

「そんなの片手間でできる」とじゃない。

「それが僕ら凡人には億劫なのさ」

銀英が凡人かどうかは知らないが、部活にすら入る気のない魁人にとつては確かに億劫以外の何物でもない。

「魁くん、本当に入らないの？」

「はい」

真剣な表情で確認していく月夜を、魁人はまっすぐに見る。彼女はしばらく魁人の目を見詰めると、にらめっこに負けたように笑つた。

「あははー、それじゃあしようがないか。でも、生徒会魔術師の仕事は手伝つてはくれるんだよね？」

「はい、一応。あ、できれば魔術のことをいろいろと教えてくれると助かります」

何の知識がないまま、そんなところにいるわけにもいかないだろう。

「うんうん。じゃあ、魁くんは仮生徒会役員のままでことね。だから生徒会室は自由に使つていいわよ。魔術のことは、そこで手取り足取り教えてあげるね」

天使のような微笑みを浮かべる月夜に、魁人は照れたように頭を搔いた。彼女の言い方が何かアレだつた箇所もあるが、ここは気にしない。

と、何に対しても不服そうな顔をした紗耶が間に割つて入り、キツと魁人の顔を睨め上げてくる。そして

「魔眼の力が使えないあんたはただの雑魚なんだから、足手纏いにならないようあたしが鍛えてあげるわ！」

「は？ 鍛えるって 痛あつ！？」

呆けたような顔をする魁人は弁慶の泣き所られて悲鳴を上げる。紗耶はそのまま、フン、と鼻から息を吐いて立ち去つていく。向う脛を両手で押されて蹲る魁人は、何なんだよ、

と揺れる黒髪を涙目で睨みつけた。

そこへ、先輩たちが気の毒そうに言葉をかけてくる。

「おやおや、紗耶先生による愛と炎のトレーニング開始ですかねえ。

『りや魁人も大変だ』

「魁人、死ぬかも」

「あははー、魁くん頑張ってね」

「ちよつ！ 先輩それどういうことですかっ！？」

急激に不安が込み上げてくる。紗耶が具体的にどう鍛えてくれるのかは知らないが、危険度を示す信号機の色は間違いなく赤色だろう。

明日からの自分は果して無事でいられるのだろうか。いろんな意味で。

協力すると言つたことを、今少しだけ後悔する魁人だった。

## HPLローグ（後書き）

ここまで読んでくれた方、ありがとうございました。そしてお疲れ様です。昔とあるラノベ新人賞に投稿して一次選考も通らなかつた駄作ですが、是非とも感想をお聞かせください。

これでたぶん文庫本一冊くらいです。一巻田完結ということですが、続きを書く気は今のところありません（要望が強ければ話は別ですがw）。

## プロローグ

その日、那縁市<sup>なより</sup>の早朝は台風のような豪雨に見舞われていた。

風は特に強いわけではないが、降り注ぐ雨の一滴一滴がまるで矢のように地面へと突き刺さっていく。

数十メートル先が白い闇で覆い尽くされているため視界も悪い。そのせいか、普段ならば早朝でも多少なり賑わっている繁華街ですら、人の気配は全くしなかつた。

いや、全く、ではない。

チャツチャツチャツ。水の溜まつたアスファルトの歩道を蹴る靴音が小気味よく響く。

白く霞む沛雨<sup>はいり</sup>の中を、緑色のレインコートを着た何者かがジョギングスタイルで駆けていた。

背は百六十七センチほどだろうか。フードを被っているため顔は判然としないが、胸の辺りの膨らみから女性だということがわかる。

彼女はペースもフォームも呼吸すらも一切乱すことなく、異世界のように白い繁華街を駆け抜けでゆく。雨で視界が悪いといふのに、自転車にも負けない速度でひたすらに走り続ける。

だが、驚くべき箇所は彼女の身体能力などではない。

彼女の纏っているレインコートが、その役目を一切果たしていないところだ。要するに、彼女は濡れていないのである。

滝の「ごとく降り注ぐ雨は、彼女を打つ直前で弾かれたように外側に飛び散っている。それを不自然に思う者はいない。繁華街の道には彼女以外誰もいないのだから。

彼女もそう思っていたからこそ、能力を惜しみなく雨避けに使役していたのだらう。

繁華街のメイン通り、その出入口にあるアーチをくぐった時、彼女はそれを見つけた。

「 ん？」

歩道の端に赤色の何かが転がっている。近づいて観察すると、それが幼い少女だとすぐにわかつた。

踵まで届きそうなほど長い赤髪は乱れ、泥水を浴びて汚れている。この大雨の中、うつ伏せに倒れている少女は昔の囚人服に似た薄い襟襷切れを纏つているだけの姿だつた。

「これは……いかんな。おい、大丈夫か？」

レインコートの女は即座に少女を抱き起した。呼びかけるが返事はない。少女の瞼は力なく閉じられ、肌は嘘のように青白い。死んでいないようだが、体温がかなり低下している。早く病院に連れて行かないと命に関わるだろう。

普通の人間ならば。

「この子は……まさか……」

レインコートの女は気つく。

魔術師として、この赤い髪をした少女が普通ではないことに。

少女を抱えて立ち上がる。

「すまないが、ひとまず私の家に連れていくぞ」

聞こえないと知りつつ、女は少女に語りかける。

「知り合いに治癒術を学んでいる者がいる。そいつを呼ぶから頑張って堪えるんだ」

レインコートの女は少女を背負い直すと、全力で、しかし少女を気遣ったスピードで疾走する。そのまま携帯電話を開き、知り合いの番号をアドレス帳から探し出して発信する。

幸い、相手はツーコールで出てくれた。

「ふわあ……こんな朝早くからどうしたの？」

寝起きを思わせるふわふわした声が携帯から聞こえる。実際、今まで夢の中にいたのだろう。それなのに二回のコールで起きてくれるとは流石だ。そう思いながら、女は用件だけを言う。

「月夜、急患だ。今すぐ治癒術の準備をして私の部屋で待機してい

てくれ

「え？ なに？ どういひ」 「

有無を言わさず通話を切り、女は走速を僅かに上げる。相変わらず雨は彼女に触れる前に弾けて逸れるため、背負った少女がこれ以上濡れることはない。

「しつかりしる。すぐに治療してやるからな」

女は走る。疾風の「とく、文字通り豪雨を搔き分けて。

私立メイザース学園。その第一女子寮へと。

## プロローグ（後書き）

「」要望があつたので連載再開しました。  
といつても気まぐれ更新となります。他の連載も抱えてますし、  
それを区切つた後も公募のための新作を書かないといけないからで  
す。下手すると一ヶ月以上更新できないこともあるでしょう。脳内  
プロットの行き当たりばつたりで書くので質も下がるかもしませ  
ん。そこは「了承ください」と（――）m

## 一章 赤い少女と風切りの王（1）

私立メイザース学園。

この街 那縁市にある併設型の中高一貫校にして、とりわけ広い敷地面積を所有している学園である。偏差値もそこそこであり、毎年他県からも多くの学生たちが入学してくる有名校でもある。

ただ、この学園には裏の顔がある。

魔脈と呼ばれる、世界の魔力が循環している場所の上に建つているのだ。その影響は様々であり、人に異能の力を与えることもあれば、人外の怪物を引き寄せてしまうこともある。後者はもちろん、前者も度が過ぎる力を得た人間は悪行に手を染めてしまうことも多い。放つておけばヤンキー漫画の不良学校よりも廃れた地獄のような人外魔境が完成することだろう。

よつて、そういった脅威から学園を守護する契約を行つた者たちがいる。

生徒会魔術師。

生徒にして、魔術のプロ。

彼らはそれぞれ得意とする魔術を行い、今日も人知れず学園の脅威排除の任を執行している。

「ありえないありえないありえないありえないありえないいいいつ！」

那縁市住宅街の路上を、羽柴魁人は全力で疾走していた。メイザース学園の制服を身に纏つたどこにでもいる男子高校生は、なにかから逃げるように表情を歪め、汗を流し、必死に足を前へと動かしている。

いや、逃げるようにではなく、本当に逃げているのだ。  
何から？

それは魁人の背後から物凄い勢いで転がり迫る大玉からである。

(ふざけんなよ！　何で俺がこんな目に合わないといけないんだよ！)

先日、生徒会魔術師に協力すると言つた魁人だが、こんな前線に駆り出されるなど聞いていない。

というか、そもそもこれは生徒会の仕事ではない。速度を落とさぬまま振り返る。瞬間、魁人の両瞳が青色に染まつた。背後の大玉には透明な光が血管のように張り巡らされており、その中心部にやはり透明な炎が見える。

あれは魁人にしか見えない光 魔力の光だ。

『デモンズサイト悪魔の視力』。そう呼ばれる力が魁人の両目には宿つている。要するに魔眼だ。普段は魔力が透明な光となつて映るだけの魔眼だが、真の力は視界に映るあらゆる魔力に込められている意思を上書きすること。しかし、魁人はその力をかつて一度しか使用したことがない。

毒虫に殺し合いをさせることで強力な『呪い』を生む呪術 巫蠱術を人間で行おうとした外道極まる魔術師と相対した時だ。

その時は覚醒した魔眼の圧倒的な力で儀式を阻止することができた。が、それ以降、魁人の魔眼はただ魔力が見えるだけの力に戻つてしまつた。

それでも、後ろから迫りくる大玉が何なのかわかる。

あれは魔獸だ。

魔脈に惹かれて湧いて出た人に害成す存在だ。逃げなければ魁人など一瞬で食い殺されてしまう。

「しまつた、行き止まり……！」

前方左右が高い塀で囲まれている。何ともベタな展開だが、それは仕方がない。魁人はこの那縁市に来たばかりで土地勘など皆無なのだから。

「うつ……」

振り返れば大玉がすぐそこまで転がり迫っていた。道幅は狭く、大玉の全身がギリギリで入る程度。よつて逃げ場はない。文字通り

八方塞がりだ。

巨大なブルドーザーが突っ込んでくるような轟音に、魁人は数秒後の自分の死を幻視する。

(止まれ！ 消えろ！)

強く念じる。前はこうすれば魔眼の力で魔獣を抹消することができた。でも、今は何も発動しない。魔眼は静かに魔力の光を映すだけだった。

突如、大玉が縦に開くように変形する。その内側から露わになつた幾本もの足がグロテスクにカサカサと動き、頭部についた緑色に光る小さな二つの目玉が魁人を獲物として捉える。

大玉の正体は巨大なダンゴ虫。吐き氣がするほど気持ちが悪い。目玉の下にある口から触手のようなものが伸びる。魁人の体を貫き、体液を吸うのだろうという嫌な予想が一瞬の間に何度も脳裏を駆け巡る。

その時だった。

触手を伸ばしていた大ダンゴ虫が、唐突に蒼く炎上した。

そして 斬、と。

目にも留まらぬ剣閃が、大ダンゴ虫の体を真つ二つに切断した。

「ダメね。全然ダメ。あんたやる気あるの？ そんなんじゃいつまで経つても魔眼は使いこなせないわよ」

蒼い炎に包まれて消失する魔獣を背に、日本刀を携えた少女が凜然と歩み寄ってきた。

## 一章 赤い少女と風切りの日（一）（後書き）

再開したばかりで申し訳ないのですが、公募作品の執筆に集中したいため勝手ながらしばらく休載することにしました。早ければ三ヶ月くらいで戻つてこられると思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4731q/>

---

魔術的生徒会

2011年11月30日12時47分発行